

### 第三部

#### 手紙 一 ドルブ夫人より

あなたという方はあなたを愛している人々にどれほど不幸をもたらすのでしょうか！ あなた一人で安息をかき乱していらっしやる不幸な家庭に、もうどれだけ涙を流させたことでしょう！ わたしたちの涙に喪の悲しみを重ねないようご用心なさい。悲嘆にくれた母の死が、その娘の心にあなたが注がれる毒の最後のききめとなりませぬよう、秩序のない愛がついにはあなた自身にとつても永遠の悔恨の源となりませぬよう、ご用心なさいませ。あなたの間違った振舞も、それがかすかな希望にはぐくまれているあいだは友情が命ずるままに我慢いたしました。いまではあなたをいたずらに変わらぬお気持は名譽と理性とによって断罪されていて、もはや不幸と苦惱しか生みだすことができませぬ、しつこいとしか名づけようがないのです、どうして大目に見ることができませぬよう。

あんなに長いあいだ、伯母の疑いをかいくぐっておりましたあなたの方の愛の火の秘密が、あなたのお手紙でどのように露見したかをご承知ですね。あのやさしく高潔な母上にはそんな打撃が痛々しいほどですのに、あなた方よりもご自身に対してご立腹で、ご自分の盲目的だった不注意ばかり責めていらっしやいます。ご自分の致命的な錯



デタンジュ夫人は何度かわたしを招へ呼んでお話しになりましたが、わたしはご叱責の穏やかさやあなたのこと  
を言われるときの口調から、ジュリがたいそう骨折ってあなたやわたしに対する当然すぎるほど当然なお怒りをし  
ずめたこと、自分を犠牲にしてせいっぱいわたしたちを弁護したことが容易にわかりました。あなたのお手紙に  
したって極端な愛の性質をそなえていることが一種の申し訳になっていて、そのことも母上はお見逃しではありま  
せんでした。あなたの背信をお責めになるよりは、信用なすったご自分の単純さを責めていらっしやいます。あな  
たの立場にいたらどんな男の人でもこれほど耐えることはできなかったでしょう、と、そんなふうにお考えにな  
るほどあなたのことを重んじていらっしやいます。あなたの過ちについて徳を非難なさるのです。誠実という、こ  
のあまりにもほめそやされているものがどんなものか、今ようやくわかります、誠実さがあっても、かりにまじめ  
な人が恋に落ちてつましい娘を墮落させるようなとき、それを引きとめることはできないし、一瞬の熱狂をみた  
すために、ためらうことなく家族全体の名誉を汚してしまうのですね、と言われるのです。でも、過ぎ去ったこと  
をとやかく言って何になりましょう。問題はこのいまわしい秘密を永遠のヴェールのもとに包み隠すこと、できる  
ことならもつともかすかな痕跡までも消し去ること、その眼に見える証拠を残さぬようにしてください。天の好意  
に協力することです。秘密は六人の確実な人のあいだに包まれています。あなたが愛されたすべての人の安息、絶  
望に沈まれた母上のお命、尊敬すべき家の名譽、あなたご自身の徳、すべてはあなたの一存にかかっています。す  
べてがあなたにあなたの義務を命じています。あなたはご自分がおつくりになった禍の償いができるのです。ジュ  
リをあきらめることによってジュリにふさわしい人になり、彼女の過ちをかばうことができるのです。あなたのお  
心がわたしのお見受けした通りならば、いままではもはやそのような犠牲の大ききだけが、それを要求する愛の大き  
さに応えることができるのです。わたしはあなたの感情に対してつねづね尊敬をいできてきましたし、あなたの方  
かつてないほど愛情深い結びつきは、いやがうえにもそんなわたしの敬意を強固にいたします。わたしはこうした  
自分の気持をよりどころにして、あなたがなさるべきことをあなたに代わってすべてお約束しました。あなたを買

覚を嘆いていらっしやるのです。いちばん残詰なお苦しみは娘を信用しすぎていらしたというそのことで、ジュリにとつては母上のこの苦悶が叱責よりも百倍もつらい罰なのです。

かあいそうないとこの打ちひしがれようは想像することもできないほどです。この眼で見なければとてもわかりません。胸は苦惱で息がつまるかのよう、胸を圧するさまさまの感情が度はずれていて、それで鋭い叫びをあげるよりももっとそら恐ろしい、呆けたような様子になるのです。昼も夜も母上の枕もとにひざまずいたまま、鬱々として、眼をじつと伏せ、深い沈黙を守っています。かつてないほど注意をこめて機敏に看病しているかと思えば、たちまち別人かと思うほどの無気力に落ちこみます。母の病が娘の力の支えとなっていないことは明らかでして、看病しなければという気持が彼女の熱意を駆り立てていなければ、わたしはあの光のない眼、蒼白な顔、極度の沈みようを見ると、あの人こそお母さまにしてさしあげている看病をすべて必要としているのではないかと案じるでしょう。伯母さまもそれに気づいてらして、あたしに心配そうに娘の体気をつけてやってほしいと内々にお頼みになるのですが、わたしはそのご心配からお二人がそれぞれどうしようもなく気づまりなのを気持の上で乗りこえようとしてらっしやるのが手にとるようになって、そして、こんなすばらしい結びつきをかき乱すあなたはどれほど憎むべきかということが見えてくるのです。

母上は娘の命が不安でならず短気な父上にはこの危険な秘密は隠しておこうとなさいますから、父上に見せまいとする心づかいで気持のこだわりはいやますのです。父上のまえでは以前のとおりに親しくなさることを決めてらっしやる、しかし母の愛はこの口実を喜んで使っても、恥じ入った娘はつくろわれた愛撫と申いますから心をゆだねることができません。思い切ってますがることができれば、どれほどか心なごむでしように、それだけにいっそうむごいのです。父上の愛撫を受けながら母を見つめるあの人のとてもやさしい、とても謙虚な様子から、心が眼にこう語らせているのがわかります。「ああ、どうしてわたしはお母さまからこんなふうにしていただけないのでし

うー」

方が口になさった約束はけっして取り消されないこと、あなたも重々おわかりでしょう。あなたがどのように行動されようとも、あらがいがたい運命があなたの願いを妨げており、あなたはけっして彼女をご自分のものにできません。あなたに残された唯一の選択は、あの人を不幸と汚辱の淵に突き落とすか、それともあなたが崇めてきたものを大事になさって、失われた幸福のかわりに、あなたがたの不吉な関係があの人から奪い取った知恵と平和と安全とを彼女にお返しになるか、どちらかです。

あなたがああのみじめな友の現状を、悔恨と羞恥が彼女を追いこんだ低迷をごらんになることがおできになれば、どれほど悲しまれ、後悔に憔悴なさることでしょう！ 彼女の輝きは失せました！ 優美な魅力は打ちしおれました！ あの人のあんなにすばらしい、あんなにやさしかったあらゆる感情は、それを吸い取る唯一の感情のなかになんとみじめに溶け込んでしまったことでしょう！ 友情さえも熱を失ってしまいました。わたしがあの人にも会う喜びを、あの人にはかろうじて分かち持っているにすぎません。彼女の病める心はもう愛と苦悩のほかほかにも感じる事ができないのです。ああ、いったいどうなってしまったのでしょうか、あのやさしく感じやすい性質は、正しい事柄へのまじりけのない愛着は、他人の苦痛や喜びに対する情深い共感。あの人はいまなおあなたかく、寛大で、思いやりがあります。それはその通りです。善い行ないをする心やさしい習慣があの人のうちから消え去ることはありえないでしょう。しかしそれはもう盲目的な習慣、反省を欠いた好みにすぎません。彼女はすべて以前と同じようにしていますが、同じ熱意でしているわけではありません。あの崇高な感情は弱まり、神々しい焔は消え、あの天使はもはや普通の女にすぎないのです。ああ、あなたは徳からなんとこの魂を奪い去ったのでしょうか！

いかぶりすぎていたのでしたら、どうぞわたしの約束しましたことを打ち消してください。それとも、今日この日からあなたがそうあるべき人になってください。愛のために愛する人を犠牲にするか、愛する人のために愛を犠牲にするか、またもつとも卑怯な人間であることをお見せになるか、もつとも有徳な人間であることをお見せになるか、どちらかです。

不幸な母上はあなたにお手紙を出そうと思われました。すでに書き始めていらしたのです。ああ、短刀がいかばかり悲痛な嘆きであなたを刺し通したでしょう！ 胸打つ非難がいかばかりあなたの心を引き裂いたでしょう！ 辞を低うされた懇願がいかばかりあなたを恥じ入らせたでしょう！ あなたにはとても耐えられないでしょうこの痛切なお手紙、わたしは引きちぎってしまいました。娘の誘惑者のまえて辞を低うなざる母、あまりにもひどすぎる、わたしは見つてられなかったのです。あなたは少なくともこのような、人でなしの心をも動かさず、感じやすい人なら苦痛のあまり死んでしまうような手段をとらずともよい方です。

愛があなたに犠牲を要求するこれが最初の機会でしたら、成功を疑うかもしれませんが、あなたに捧げられるべき敬意についてもためらいを覚えるかもしれません。しかし、あなたはこの国を去ってジュリの名譽を救ってくださったのですから、今度は無用なまじわりを断つという犠牲を払って彼女の安息を守ってくださるものと安心しております。有徳な行為はいつもその第一歩がもつともつらいもの、あれほど苦しい思いをなされた犠牲の値打ちを甲斐なき文通にいつまでも固執して無になさいますな。あなたの恋人にとってお手紙の危険はただごとではなく、二人のいずれにもなんの償いもありません、文通をつづけられてもお互いの苦惱を得るところなく引き延ばすだけです。もうこのことを疑ってはなりません、あなたにとってあんなに大事な人だったジュリは、彼女があれば愛した人となんのかかわりがあったてもいけないのです。ご自分の不幸に眼をつぶることはできません。あの人と別れたときに、あなたは彼女を失ったのです。と申しますよりも、彼女があなたに身をまかせる以前に、天は彼女をあなたから取り上げていたのです。父上はご信違早々にあの人を与える約束をなされたのですから。あんな一徹な

することができ、と言いきれる人でありませう！ 奥さま、その人物が私の持たざるものをすべて持つていようともなんのことがありませうか。私の心を持つていなければ、ジュリさんにとっては何も持たざるにひとしいでありませう。だが私はこの誠意ある、愛をこめた心しか持つておりませぬ。悲しいかな、私にはそれ以上の何もありません。愛はすべてを結び合わせますが、人の位置を高めません。ただ感情だけを高めるのです。ああ！私のあなたに対する感情にのみ耳を傾けていましたならば、お話し申しあげて母という甘美な名を何度口にいりましたことございませう。

けっしていたずらにはいたしません誓いを、嘘つきではない人間を、なにとぞご信頼くださいますように。尊重していただきながらそれを欺くようなことをかつていたしましたとすれば、私はなによりもまず自分自身を欺いたのです。経験をもたない私の心は、もはや逃れようのなくなったときにはじめて危険を知ったのでして、お嬢さまから愛によって愛を克服するという残酷なすべを、のちに十分に教えていただいたそのことを、まだ教わっておりませんでした。お願いいたします、ご懸念は遠ざけてくださいませ。あの方の安息、至福、名譽、それを私以上に大事にしております者がこの世にだれかおりませうか。いいえ。私の言葉と私の心が、あの誉れ高い友の名と私の名にかけて誓いますお約束の保証でございます。不謹慎な振舞は金輪際いたしません、ご安心くださいますように。そして私はいかなる苦惱によって命を終えたか人に知られることなく最後の息を引き取るでありますように。それゆえ、おん身を痛めますお苦しみ、私の苦しみをさらに激しくしますそのお苦しみ、どうぞしめてくださいませ。私から魂をもぎ取りますお涙をぬぐってくださいませ。ご健康を回復なさいますように。またとなくやさしいお嬢さまに、母上ゆえに断念なさった幸福を返してさしあげてくださいませ。お嬢さまによってご自身も幸福になつてくださいますように。なによりも、あの方が生を受するように、そのために生きてくださいませ。ああ、愛の錯誤はございましたが、ジュリの母であられることは、生きることをよしとするにたるすばらしいご境遇ではございませんか！

與さま、私は生涯つづくであります。苦惱にみちて足下にひれ伏します。それは私の心のあずかり知らぬ後悔をお見せするためではなく、私の人生の幸福たりえたものをすべて諦めることによって意図せざる罪の償いをいたすためでございます。いかなる人間の感情も、崇拜すべきお嬢さまが私に呼び起こされた感情にけっして及ばなかつたように、いかなる犠牲といえども、母のうちのもっとも尊い母なる方に私が捧げます犠牲に匹敵したためしはありません。しかしジュリさんは、義務のために幸福をいかに犠牲にしなければならぬかを十分すぎるほど教えてくださいました。並ならぬ勇氣でもってその模範を示されましたから、私もせめて一度は見習うことができるようにと思わざるをえません。お苦しみを癒すに私の血でこと足りませうれば、無言のまま血を流しましょうし、私の熱意のそんな微弱な証拠しかお見せできないのを残念に思ひましょう。しかし二つの心を結び合わせるまこと類のない、あのように甘美な、純粹な、神聖なきずなを断ち切りますことは、ああ、全世界が求めようともしんじませぬ犠牲、母上だけが力をお持ちになつたのでございます。

わかりました、私は母上がお命じになりますかぎり、いつまでもあの方から遠く離れて暮らしますことをお約束いたします。お会いすることも手紙をさしあげることと断念します。私はこのことを、あの方に命ながらえていただくために不可欠な、お母上の貴いお命にかけて誓います。私は怖れなしとはしませんが、それでも不平は申さずに、あの方と私にあえてお命じになりますことはなんであれ服従いたします。さらに申しあげましょう。彼女の幸福はわが悲惨の慰めとなりうるのでして、もしあの方にふさわしい夫君をお与えになりますれば私は満足して死ぬであります。ああ、そのような人が見つかりますことを！ 私に向かつて、自分は君よりもいっそう彼女を愛



だったすべてのものを忘れましょう。もうジュリの名もあなたの名も耳にしたくありません。その耐えがたい思い出をよびおこしたくありません。恨みが、抑えようのない怒りが、私をかくも多くの不運に対してこわばらせません。非情な一徹さが私には勇気のかわりとなりましょう。感じやすいということのために、あまりにも痛い目に会いました。人間らしさを棄てるほうがいいのです。

手紙 四 ドルブ夫人より

心を痛ませるお手紙をくださいました。でもあなたへの行動には愛と徳がいっぱいこもっておりますから、それがご不満の刺々しさを消してしまいます。あなたはあまりにも寛容でいらっしゃるから、とても言い争いをする勇氣なぞ起こりません。どんなに激昂を表に出されましようとも、このように愛する人のために自分を犠牲にすることがおできになると、その方は叱責よりも称讃を受けるのが当然、いくら暴言をおっしゃっても、あなたの価値がすべてよくわかりましてからは、わたしにとってこれまでになく大事な方になりました。

あなたは徳を憎んでらっしゃるおつもり、でも徳に感謝なさいませ。あなたのために、愛よりもたくさんのことをしてくれませすのよ。犠牲的な行為をなすつたあなたに惹きつけられなかった人はいません。伯母さままでもがそうで、犠牲の代価を十分にお感じです。お手紙を感動なしにはお読みになれませんでした。気弱におなりになって娘にお見せになったほどで、かあいそうなジュリの溜息と涙をなんとかこらえようとするその痛ましさに、気を失って倒れておしまいでした。

おやさしい母上は、これまでにもすでにあなたのお手紙で強く心を動かされていらしたところへ、またまのあたりにこらんになりましたから、あなたがた二人の心はどれほど並の規準から離れているか、あなた方の愛は時を

手紙 三 ドルブ夫人へ（前の手紙を同夫人に送るにあたって）

さあ、むごい方、これが私のお返事です。あなたが私の心を知っていらっしゃるなら、あなたの心が情を解するならば、お読みになって涙にかきつけてくださるがいい。しかしこれだけは申しておきますが、あなたが私にあなたに高価に売りつけていらっしゃる、それでもって私の人生を責め苛んでいらっしゃる、あの無慈悲きわまる尊敬とやらで私を打ちのめすのはよしていただきたい。

あなたの無情な手は、それでは断ち切ったのですね、あの甘美なきずな、まだ芽生えてまもないころからあなたの眼前で育ってきた、あなたの友情があんなに喜びをもって分かち持ってくださいようだったあのきずなを。これで私はあなたのお望みどおりの不幸に、不幸になりうるかぎり不幸になりました。ああ！ あなたがどんな痛みをもたらしたか、それをみんなお知りだろうか。私から魂をもぎ取られたこと、私から取り上げられたものは償いようがないこと、二人がお互いのために生きるのをやめるよりは死んだほうが百倍もましだということ、あなたはよくわかってらっしゃるのだろうか。ジュリの幸福、いったい何をおっしゃるのです。心の同意がなくて幸福たりえましようか。母上のお命が危いとは何をおっしゃるのでしょうか。ああ、母の命、私の命、あなたの命、いや彼女の命だって、私たちを結びつけていた喜ばしい感情とくらべればなんでしょう、世界全体の存在だってなんなのでしょう。理不尽にして残忍なる徳よ！ 私はおまえの価値なき声に従う。おまえのためにすべてをなすつのおまえを憎悪する。激しい魂の苦悩にはおまえの空しい慰めなどなんになるか。不幸な者たちの惨めな偶像よ、まこと、おまえは運命が残しておいてくれる手段を取り上げて悲惨をいやますばかりだ。とはいえ、従いましょう、ええ、むごい方、従いましょう。できますれば、あなたのように残酷無情になりました。およそこの世で大事

も、親戚の人たちも、友人たちも、父上のほかは今ではみんなあなたの方です。父上だけは、こんなやり方でお心をかちえるかもしれないし、何をしてもだめかもしれません。一時の絶望がどんな呪いの言葉をあなたに書き取らせたにせよ、あなたはわたしに徳の道よりも確実な、幸福にいたる道はほかにないことを何度となく示されたのです。幸福にまでたどりつきましたならば、その幸福は徳のためにいっそう純粹に、堅固に、甘美になります。うまくいかなくても、徳だけでその償いとなりえます。ですからまた勇気をおもちなさいませ。男らしくなつて、もう一度あなた自身におなりなさいませ。わたしがあなたのお心を十分に存じあげているとして、それでこう申します、あなたがジュリを失うとして、そのさいいちばん残酷な失い方は、彼女を手に入れるにふさわしからぬ方におなりになることです。

(1) クレールさん、そんなことをいってあなたのほうは不謹慎ではないのですか。これを最後に、そうでなくなるのですかね。

手紙 五 ジュリより

お亡くなりになりました。永久に眼を閉じられるのをこの眼で見ました。最後の息をわたしの口が受けました。最後におっしゃったのは、わたしの名でした。最後のまなざしはわたしのほうに向けられました。いいえ、この世を去るといふふうではありませんでした。わたしは母にこの世の生をいとおしんでいただくことができなかつたのです、あまりにも。ただわたしだけから、つらい思いをして離れて行かれたのです。わたしが導き手もなく希望もなく、不幸と過ちに押しひしがれているのをごらんになっていました。死は母にとってなんでもなかった、娘をこんな状態に打ち棄てることだけが心を悩ますのでした。まことにむりからぬことでした。母に、この世になんの

もってしても人間の努力をもつてしても消しえない共感の自然な性格をどれほど宿しているかということがわかり始めていらっしやるのです。伯母さまは、ご自分こそ大いに慰めを必要としてらっしやるのに、世のしきたりが引きとめなければすすんで娘を慰めてやりたいお気持ちで、わたしの見るところいまも娘の聞き役におなりになりかねない、わたしがそうだったことをお許しにならないわけにはゆかぬほどなのです。昨日もあの人のまえで、おそらく、慎みに欠くことなのでしょうね、<sup>(1)</sup>思わずこんな言葉を洩らしておしまいでした。「ああ、わたしの一存だけで運ぶことなら……。」それだけで自制なさって、おしまいまでおっしゃらなかったのですが、ジュリはわかりすぎくらいわかっていたのですね、熱い接吻をお手にぎゅっと押しつけました。一徹な父上に何度かお話になろうとなさったこともわたしは知っています。でも、お腹立ちの父上の激昂に娘をさらす危険を思われたのか、ご自分を案じられたのか、いつも気弱になっておっしゃれないのでした。衰弱のなさりようもご病氣も目に見えてつのおりますから、お気持ちをしっかり固められるまでに実行なさる力をなくしてしまわれるのじゃないかと案じられます。

それはさておき、あなたがもておきた過ちではあるのですが、あなた方のお互いの愛のなかには心の誠実なものを感じられますから、伯母さまはあなたに対して好感をお持ちになり、それで文通を断つというお二人の言葉を信じられて、これまでよりも娘を監視するようなことは何ひとつなさらないのです。じっさい、もしジュリがそんな信頼に応えないならば、もう母上の心づかいを受ける資格はないでしょうし、もしあなた方が母のなかの最上の母をあざむき、あなた方を尊重なさるお気持ちにつけこむようなことがおできになるならば、二人とも息の根をとめなければなりません。

あなたの心に希望の火をともしようとしているのではありません。わたし自身、希望がもてないのですから。そうではなくって、本当のこと、もっとも誠実な手段がもっとも賢明な手段でもあり、かりにあなた方の愛になんらかの方策が残されているならば、それは名誉と理性が命ずる犠牲のなかにあることを示してあげたいのです。母上

んにもならないこと。悔恨に引き裂かれたわたしの心を欺きうるものは何ひとつありませんでした。わたしは命を与えてくださった方の命を縮めたという怖ろしい思いを、永遠の責苦として墓まで抱いてゆくことでしよう。

ああ、天がその怒りのなかで、わたしを不幸にし罪人にするためにこの世に送ったもうた方、あなた、これを最後に、あなたから生じた涙を胸に受けてください。以前のよう、わたしたちに共通であるべき苦しみをあなたと分かち合おうとしているのではありません。心ならずもわたしの口から洩れて出ますのは、最後のお別れの溜息です。もうしようがありません。愛の支配は絶望にのみゆだねられた魂のなかで消えました。わたしは母のうちの最良の母の死を悼むことに余生を捧げます。母の命を奪った感情を、母のために犠牲にいたします。その感情ゆえに母は苦しんだのですから、わたしがそれに打ち勝とうとして母のその苦しみのいっさいを償うに足るだけつらい思いをいたしますならば、わたしには過ぎたる喜びでございませぬ。ああ、母の不滅の霊がわたしの心の底を見通されたら、わたしが捧げます犠牲がお母さまにまったくふさわしからぬものでもないとおわかりになるはず。あなたゆえに避けれなくなりましたこの努力、あなたもともになさってくださいませ。これほど貴重な、こんなに不幸をもたらしたきずなの思い出を大事になさるお気持ちがあなたのうちにいくらかでも残っておりますなら、そのお気持ちにかけて、どうかわたしからお去りになるように、もう手紙をお書きにならないように、わたしの呵責をこれ以上激しくなさらないように、わたしたちのかつての間柄を、できることなら忘れさせてくださるようお願いいたします。わたしの眼がもうふたたびあなたを見ませんように。あなたの名がもうわたしの耳に入りませんように。あなたの思い出がもうわたしの心を乱しに來ませんように。もはやあつてはならない愛の名において、あえてもう一度申します。これほど多くの苦惱の種をかかえておりますうえに、愛の最後の願いがないがしろにされるのを見る苦しみまでお加えになりますな。それでは、これっきり、さようなら、ただひとりの、いとしい……ああ、だめな娘ね……永久に、さようなら。

名残り惜しいことがありましたでしょう。天国では忍耐と徳の不滅の報いが待っているのです、地上でそれに相当するようなものが、母から見てなにかありえませんでしたでしょうか。わたしの恥辱に涙されることのほかに、この世で何かなさることが残っておりませんでしたでしょうか。清く汚れなき魂、立派な妻、そしてたぐいなきお母さま、あなたはいま栄光と至福の住みかに生きておいでです。あなたは生きていらっしゃいます。そしてわたしは後悔と絶望に身をゆだね、永久にあなたの心づくしも、忠告も、やさしい愛撫も取りあげられ、幸福からも、平安からも、無垢からも遠く離れてしまいました。わたしはもうあなたを失ったことしか感じません。わたしはもう自分の恥しからずに入りません。わたしの生はもはや苦しみと悩み以外のなんでもありません。お母さま、あたしのやさしいお母さま、ああ、あたしはあなたよりもずっと死んでいるのです！

まあ、なんとしたことを！ なにに血迷ってこの不幸な女は錯乱し、決心したことどもを忘れ果てているのでしょうか。わたしはいったいだれに向かって涙を流し、うめきをあげているのでしょうか。わたしの涙とうめきをひき起こしたむごい人、その人に訴えかけているのです！ わたしの不幸をつくっているその人に自分の不幸を嘆いている！ ええ、そうだわ、非情な方、あなたがわたしを苦しめているこの苦悩をとみなさいませ。あなたゆえにわたしは母の胸に短刀を刺したのです、あなたも、あなたゆえにわたしに起こった不幸にうめきをあげ、あなたの所業である親殺しの怖ろしさをわたしとともに感じなさいませ。わたしは自分のこんな軽蔑すべき姿をいっただれの眼にさらせばいいのでしょうか。良心の咎めるままに、だれのまえて自分を卑しめたいのでしょうか。わが罪の共犯者以外のだれがその呵責をよく知りえましようか。わたしの心しかわたしを責めるものがなく、焼けつくような後悔から思わず流す不純な涙も生まれつきやさしいからとみなされる、これがわたしのいちばん耐えがたい苦痛です。わたしは見ました、苦痛がいたわしい母の最後の日々を毒し、死期を早めるのを、震えおののきながら見ました。わたしに対する憐れみからそうはお認めにならず、病気が進んだのはもともと悪かった体のせいです。と、そんなふうに言ってもらしたけど、いともそう思いこんで同じことを言ってくれましたけど、それもこれもな

した、いまわしい訶責が愛を追い出しました、私にとってすべてが変わった、ただ私の心だけがいつまでも同じで、それゆえにこの身の上がいよいよ怖ろしいのです。

でも、私がどうであれ、どうなろうと、そんなことはどうでもいいのです。いまジュリが苦しんでいるときに、私のことを考えていいものか。ああ、あの人の苦しみが私の苦しみをいっそうつらいものにするのです。彼女が私を受することをやめて、それで幸福になってくれるほうがいい……。私を受することをやめる！……あの人はそう望んでいるのでしょうか……。そんなことは、けっして。私に会うことを、手紙を書くことを禁じてもなんにもならないのです。あの人は苦惱を遠ざけているのではなくって、ああ、慰める者を遠ざけているのです。やさしい母上をなくされたために、もっとやさしい友まで失わねばならないのでしょうか。不幸を軽くするつもりで不幸をふやしているのじゃありませんか。おお、愛よ！ おまえを犠牲にして自然の情の仇討ちができるものなのだろうか。

否、否、私を忘れようとしても駄目です。あの人のやさしい心が私の心から離れることができましようか。あの人がどう思おうとも私がその心を引きとめはしないでしようか。私たちが感じたような感情を人は忘れるでしょうか。それを思い出せばふたたび感じないでいられるでしょうか。勝利した愛は彼女の人生を不幸にしました。打ち負かされた愛はいつそうみじめにするばかりでしょう。あの人は空しい悔恨と空しい願望にさいなまれて、愛も徳も満足させることができずに、苦惱のなかで生涯を送るでしょう。

こんなことを書きましても、私が彼女の間違った考えを嘆いて、もうそれを尊重しないでよいと思っているとは受け取らないでください。あれほどの犠牲を払ったあとでは、服従しないすべを身につけようとして遅すぎるのです。あの人が命令するのですから、それで十分です。もう彼女は私のことを耳にはしませない。思ってもみてください、私の境涯は怖ろしいものではないでしょうか。私の最大の絶望はあの人をあきらめることではありません。ああ！ 私のもっとも激しい苦惱はあの人の心のなかにあり、私は自分の悲運よりも彼女の悲運によって不幸なのです。彼女がなにもまして受しているひと、あなた、私について彼女を本当に受せるただ一人の方、クレールさ

ついにヴェールは裂けました。あの長きにわたる幻影は消え失せました。あれほど甘美な希望は消え去りました。永遠の焰の糧として私に残っているものは、苦くて甘い思い出だけ、思い出がもはやない幸福のうつろな感情で私の生を支え、私の苦悩を養っています。

私が最上の至福を味わったというのは、いったい本当なのでしょうか。私と、かつて幸福であった者とは同一の存在なのでしょうか。私が苦しんでいるこんな苦しみを感じうる者は、永遠に苦しむために生まれてきたのではないのでしょうか。私が失ったような幸福を享受しえた者は、それを失ってなおかつ生きることができるとは、いのでしょうか。私ほど相反する感情が一つ心のなかに芽生える、そんなことがいったいありうるのでしょうか。喜びと栄光の日よ、そうだ、おまえは死すべき人間に属するものではなかったのだ！ おまえは滅びるべきものであるには、あまりにも美しすぎたのだ。甘美な陶酔がおまえの持続をすべて吸収して、それを永遠の持続のように一点に集めていた。私には過去もなく未来もなかった、そして私は千の世紀の歡喜を一度に味わっていたのだ。悲しいかな、おまえは稲妻のように消えてしまった！ この永遠の幸福はわが生涯の瞬間にすぎなかった。わが絶望の時にあって、時間はふたたびのろのろした歩みをとりのどした。倦怠が私の不幸な残生を長い年月に少しずつふりわけののだ。苦悩が私を押しつぶせばつぶすほど、かつて私に大事だったものがいっそう私から離れてゆくように見え、それが私の生きてゆく日々をいやがうえにも耐えがたくいたします。夫人よ、あなたはいまなお私を愛していただくかもしれない。しかし別の配慮があなたを呼び、別の義務があなたのお心を占めています。同情をもって聞いてくださった私の嘆きの声も、いまとなっては不謹慎です。ジュリ！ ジュリその人が力を落とす、私を見捨ててま



日ごとに立派な方と思えてまいりますのに、あなたへの愛しようが弱まるなどということがどうしてありませんか。日々あらたな愛情をお受け取りになる資格をお持ちなのに、どうしてわたしが以前の愛情をなくしたりしましようか。そんなことありませんわ、わたしの親しい立派な友よ。まだほんの若かったころからのわたしたちの間柄は、生涯の終わるまでつづきますですよ。おたがいの愛着がふえないのは、もうこれ以上ふえないところまで来ているからです。変わったことといえば、以前わたしはあなたを兄のように愛しておりましたが、いまではわが子のように愛している、そのことだけ。だって、わたしたちはあなたより年若くお弟子ではありませんけど、わたしはあなたを少々わたしたちのお弟子と思っておりますから。あなたは考えることを教えてくださって、わたしたちからは感性を豊かにすることを学ばれました。そしてあなたあのイギリスの哲学者さんがなんとおっしゃることも、この教育はもう一つの十分に匹敵いたします。人間をつくるのが理性であるとすれば、人を導くのは感情なのですから。

あなた方のことでわたしの態度が変わったように見えますのはなぜか、おわかりですか。本当のこと、それはわたしの心がいつも同じでないからではないのです。あなたの状況が変わったからなのです。一条の希望の光が残っておりましたあいだは、あなたの愛の火をお助けしました。あくまでもジュリを離すまいとなさって、それでジュリを不幸になさるだけというようになってからは、あなたのお気に入るようにすればあなたを傷つけることになるのです。あなたのほうがまだしも痛ましくないと、わたしはそう思いたいし、あなたのほうによけいに不満をお与えするほうがいいのです。共通の幸福が不可能になったとき、愛する人の幸福のなかに自分の幸福を求めること、

ん、愛らしいクレールさん、あなたはあの人に残された唯一の宝です。ほかの宝を全部失ってもこれがあればあの人には耐えられる、それほど貴重なのです。あの人が奪い取られた慰めの、あの人拒絶した慰めの償いをしてあげてください。神聖な友情が母のやさしさの、恋人のやさしさの、彼女を幸福にするはずだったあらゆる感情の魅力の代わりをつとめてくれますように。どのような代償を払ってでも、できることなら彼女が幸福であってくれますように。私があの人から奪った平和と安息を取り戻してくれますように。そうなれば彼女が私のうちに残した責苦も軽くなりましょう。私自身の眼から見ても私はもう何者でもないのですから、あの人のために死ぬべく人生を送るのが私の運命なのですから、私をもはやなきものと思ってくださいといい、そう思うことであの人安らかになるのなら、それでいいのです。あなたのそばで、以前の徳を、以前の幸福をまた見出してくれますように！ あなたの心づかいで、私がいなければそうになっていたであろう人間にまた立ち戻ってくれますように！

ああ！ あの人には母上がいらない、いまはもうおられないのですね！ これは償いようのない、そしてそこにみずから咎めるところがあればあきらめきれない喪失です。たちさわぐ良心がやさしい最愛の母を返すようにと彼女に訴え、こんなむごい苦悩のなかで、怖ろしい呵責と悲嘆が合わさっているのです。おお、ジュリ、あなたはこんな怖ろしい感情を知らねばならない運命にあったのか。どうぞお願いいたします、あなたは不幸せな母上のご病氣をご存じで最期まで見取られたのですね、私は懇願します、私がどう考えるべきなのかおっしゃってください。私に罪がありますなら、心臓を引き裂いてください。もし私たちの過ちがもとでその心痛が母上を墓までお連れしたのでしたら、私たち二人は生きるに値しない人非人です。こんな禍を招ききずなを考えるに罪です。日の光を見ることは罪です。いえ、私はあえて信じます、こんな清い火がこんな暗い結果を生み出したのではない、と。愛は私たちにあまりにも気高い感情を鼓吹したのですから、そこから歪んだ心根の人たちの犯す極悪な罪が導かれるはずがないのです。天が、天が不正なのでしょうか。あの方は命を授けてくださったご両親のために自分の幸福を犠牲にできた人、その彼女がご両親の命を滅ぼすようなことがどうしてできましようか。

害を克服しました。そのひとつとは、もはや克服すべき障害をもたないこと、ただひたすら己れを糧として燃えつづけることです。いまだかつて世界はこの試験に耐えた情熱を知りません。あなたの情熱ならそれに耐えるであろうと、そうお思いになるどんな資格がおありですか。長いあいだわがものにしてしていると嫌気がさしますね、それに加えて時が年齢の進行と美の衰えとを重ね合わせておりますでしょう。別れ別れになったために、時はあなた方に都合よく固定したように見えます。あなた方はお互いにいつまでも人生の花盛りにいるでしょう。別れたときの姿のままでもいつもお互いに見合っていることでしょう。墓にいたるまで結ばれているあなた方の心は、愛とともに青春を美しい幻影のなかで延ばしつづけることでしょう。

幸福に恵まれたことがおありにならなかつたら、やみがたい焦燥があなたを苦しめておりました。あなたの心は授けられてしかるべき幸福を溜息をつきながら恨みに思われるでしょう。あなたの燃えるような想像力が、手に入れることのできなかつた幸福をたえずあなたに求めるでしょう。しかし、愛があなたに存分に与えなかつた歓喜はひとつもないのです。あなたのおっしゃりやうにならえば、あなたは一年のあいだに全生涯の喜びを汲みつくされたのです。向こうみずなしのび逢いの翌日お書きになった、あんなに情熱的な手紙を思い出してごらん下さい。わたしはあれをかつて知らないほどの感動をもって読みました。そこに見られるのは感動した魂の永続的な状態ではなく、愛に燃え逸楽に陶醉した心の極度の熱情です。あなたご自身が、このような熱狂は生涯に二度と経験することはない、これを感じたあとは死ななければならぬとお考えでした。あなた、あれが頂点だったのです。運命と愛があなたに何をしてくれましょうとも、あなたの愛の火とあなたの幸福はもう衰えるしかなかったのです。あの瞬間はあなたの不運の始まりでもあったのでして、恋人のそばにいて味わうべき新しい感情がもはやなくなつたそのとき、彼女はあなたから取り上げられたのです。まるで運命があなたの心を避けられない涸渇から救い、過ぎ去つた歓びの思い出のなかに、あなたがまた授かるかもしれないあらゆる歓びよりもずっと甘美な歓びをあなたに残しておこうと望んだかのように。

それだけが希望のない愛に残された唯一なすべきことではないでしょうか。

あなたはこのことを感じていらっしやるばかりか、それ以上のことをなさってますね、心の広い方。どんな忠実な恋人にもできなかった苦しい犠牲を払って実践してらっしやいますもの。ジュリをあきらめることで、ご自分の安息を犠牲にして彼女に安息を与えようとなさる、あの人のためにご自分を放棄していらっしやるのです。

そのことで奇妙な考えがうかんのですが、これがちょっと申しあげにくいこと、でも心を慰めてくれますことです。ですから、勇気を出して申しましょう。まず第一に、わたしの思いますにまことの愛は徳と同じ利点をもっていて、そのために払った犠牲をすべて償ってくれるということ、そしてわたしたちは自分に課した禁制を、そのためにこうむるまさにその苦しい思いによって、またわたしたちをそこへ導く動機を意識することによって、いわば享受するようになるということです。ジュリは間違いなくジュリにふさわしい愛され方であなただから愛されたのだとご自分に言っごらんないませ、あなたはそれでますますジュリを愛されるでしょうし、それでいっそう幸福になられるでしょう。あらゆるつらい徳に報いを与えるあの繊細な自尊心が、その魅力为爱の魅力に混ぜ合わせるでしょう。「私は愛する人を手に入れた」とおっしゃって味わう喜びよりも、もっと持続的で微妙な喜びでもって、あなたは「私は愛することができるとおっしゃるでしょう。なぜなら、一方は享受によってすりきれてゆきますが、もう一方の喜びはいつまでも残り、たとえもう愛さなくなってもあなたはそれを享受なさるでしょうから。

さらにまた、愛というものが、本当にジュリとあなたがあれほどわたしにおっしゃったように人間の心に宿りうるもっとも甘美な感情であるのなら、それを引き延ばすもの、固定するものはみな、たとえ代償として千の苦惱を味わうとしても、やはり善いものなのです。またあなたが言っごらしたように愛は障害によってかきたてられる欲望であるならば、それが充足することはよくありません。喜びのさなかで消えてゆくよりは、持続して、報いられないほうがよろしいのです。あなたの愛の火は、思いをとげるといっ試練にも、時間の試練にも、不在の試練にも、あらゆる種類の苦しみの試練にも耐えました、その通りです。もっとも強い障害ひとつを除いて、あらゆる障

涙、心を打つ愛燕、なんという尽きせぬ思いやり！ 母の苦しみはことごとく娘の眼のなかから読み取れるのでした。娘は日々母に仕え夜々母を看とるのでした。娘の手から母はあらゆる支えを受け取るのでした。ジュリはまるで別人になったようでした。もって生まれた華奢なところも消え、強くたくましくなりました。どんなきつい看病もなんとも思わなかった、魂が新しい身体を彼女に与えたかのようにでした。あの人はあらゆることをしながら、なんにもしていないようなふうでした。いたるところ飛びまわりながら、母のそばから動かないのでした。たえずベッドのまえにひざまずき、お母さまの手に唇を押しつけ、自分の過ちを嘆き、母の苦しみを嘆き、この二つの感情をなげきまぜてはますます悲嘆にくれるのでした。最期の日々に伯母さまのお部屋に入って、このなにももまして胸打たれる光景に感動のあまり涙しなかった人をわたしは知りません。痛ましい別離の時であって、二つの心がいつそう緊密に結び合おうと努めているさまが見えるのでした。別れ別れになる悲哀だけが母と娘の心を占めていて、いっしょにとどまるか去ってゆくかできるものならば、生か死かはどちらでもよいという、そんなふうでした。

ジュリの暗い考えに同調なさってはいけません。人の助力と心の慰めから期待できるものすべてが彼女のもとで協力して病気の進行を遅らせたこと、彼女がいなくてわたしたちだけだったらとてもそうはいかなかったところを、あの人のやさしさと看病のおかげで確実に長いあいだお母さまにそばにいていただけなこと、信じてくださってよこさいます。伯母さまはご自身でわたしに何度も、最後の日々が生涯でいちばん楽しいとき、わたしの幸福に欠けているのはただ一つ娘の幸福だけ、とおっしゃってましたわ。

伯母さまが心痛のあまり亡くなられたとかりにしますならば、その由来はもっと遠くにあって、責を負わねばならないのは夫たる人なのです。長いあいだ多情で移り気で、貞淑な妻にくらべて相手にするに足りないあまたの女性と青春の火を浪費してこられました。お年を召してやむなく戻られてからは、不実な夫がそうやって自分の罪を重くするのがならわしの、あの頑固な荒々しさを妻のそばでお捨てにならず、かあいそうないとはそれを恨みに

それゆえ、いつもあなたから逃れてゆく、しかもあなたに残されている幸福まで奪い取ってゆくような幸福は、失つてもあきらめることです。幸福と愛がたとえ同時に消え失せたとしても、あなたは少なくとも愛の感情は保持されたのです。まだ愛しているあいだは欲びがないわけではありません。冷めた愛の姿は不幸な愛の姿よりもやさしい心をおびえさせるもの、所有したものに嫌悪をおぼえることは、失つたものを惜しむよりも百倍も悪い状態なのです。

悲嘆にくれたいとこは母上の死についてわが身を咎めています、もしそれが根拠のあることなら、そのむごい思い出がきつと愛の思い出を毒するでしょうし、そんな痛ましい思いは愛を永久に消し去るでしょう。しかし、あの人の苦惱をそのまま受け取られてはいけません。苦惱が彼女を誤らせているのです。というよりも、彼女が好んで苦惱をかきたてているそのいわれのない動機は、あまりにも強い苦惱に理由を与えるための口実にほかならないのです。あのやさしい魂は悩みようが足りないことをいつも恐れていて、自分の苦しみの感情に、さらに苦しみを鋭くするものをなんでもつけ加えることは、あの人には一種の喜びなのです。彼女は自分に苦痛を強制しています、本当です。あの人は自分に対して正直に振舞っていません。もし母上の命を縮めたところから信じていたら、彼女の心はそんな怖ろしい呵責にどうして耐えうるでしょうか。いいえ、そんなこと、できっこありません、お母さまの死を嘆き悲しんでいないで、後を追いかけてしょうよ。デタンジュ夫人のご病気は人のよく知るところです。肺水腫でした、とうとうお直りにならなかった、あなた方の文通を見つけられる以前から、お命に望みはないとされてきました。手紙のことでひどく心をお痛めになりましたか、またどれほどの喜びがご心労の苦しみを償ったことでしょうか！ 娘の過ちを嘆きながらもそれがいかに多くの徳で贖われたかをごらんになり、娘の弱さに涙しながらもその魂を称讃なさらずにはいられない、これはやさしい母にとつてどれほど心慰めることでしたか！ どんなに娘に愛されているかお感じになることはいかばかり楽しいことでしたか！ なんとという倦むことを知らぬ熱意！ たえざる心づかい！ たゆみない甲斐甲斐しさ！ 母を苦しめたと思うその痛恨！ いかばかりの後悔、

て同等ですが、働き方は似ていませんから。あなたの愛はたぎり立って激しい、彼女のは甘美でやさしい、あなたの感情は外に向かつて激発するのですが、彼女の感情は自分に帰ってきて、魂の実質に透過し、知らず知らずこれを歪め変えてゆくのです。愛はあなたの心を活気づけ、支え、彼女の心を沈ませ、打ち倒します。そのためにあらゆる活力がゆるみ、力は無になり、勇気は消え、彼女の徳はもはや価値を失います。あれほどのヒロイックな資質が無に帰したわけではありませんが、しばし中断されています。一時の危機がその力強さをすっかり回復させるかもしれませんし、あるいは永久に消失させるかもしれません。失意のほうへさらに一步ふみだせば、彼女はもうだめです。しかし、このすぐれた魂が一瞬また立ち上るならば、以前よりもさらに大きく、さらに強く、さらに有徳になって、再度の転落はもはやありえなくなりましょう。よろしゅうございますか、いとしい友、この危険な状態にあってあなたの愛する人をだいにさいませ。あなたから彼女にもたらされるものは、たとえあなたに不利なことであっても、すべて彼女に致命的に働かざるをえないのです。執拗にあとを追われたなら、あなたは楽々と勝利なさいましょう。でもまえと同じジュリを手に入れるおつもりでもそうはまいりません。同じジュリをふたたび見出すことはありますまい。

手紙 八 エドワード卿より

私は君の心を左右する権利を得ていました。君は私の必要とした人でした。それで君と合流するつもりだった。私の権利、私の必要、私の熱意は、君にはどうでもよいのですか。私は君から忘れられています。もう手紙をよこそうともしません。君の孤独な、人嫌いな暮らしぶりは耳にしています。ひそかな君の意図を察知しています。君は生きることがいやなのです。

思っていました。貴族の空しい頑陋と何をもってしても和らげられない性格的な強情が、あなたの不幸と彼女の不幸をもたりました。母上はいつもあなたに好感をもってらして、そして彼女の愛を察知されたときはもう消すには遅すぎて、長いあいだ、娘の愛着も夫の片意地も抑えることができない悩みを、ご自分が禍の第一の原因でありながらもやそれを解決することがおできにならない悩みを、ひそかに抱いてこられたのです。お手紙が見つかつて、あなたがどれほど信頼を濫用してらしたかをお知りになったときも、すべてを救おうとしてすべてを駄目にするのではないか、娘の名譽を回復しようとしてその命を危うくするのではないかとご心配なのです。何度か夫の意向を探ってごらんになりましたが不首尾でした。何度か、なにもかも打ち明けてしまつて、あなたがなさるべきはここまでですとはっきり言おうとなさつたのですが、恐ろしくもありまた内気なお人柄ですのでいつもようおできにならないのです。お話しになれるあいだはためらつていらした、そうなさろうと思われたときは手遅れでした。もうお力が残っていませんでした。母上は致命的な秘密を抱いて亡くなられました。そしてわたしは、この苛酷な人の氣質は存じあげつつ、肉身の自然の情がどこまでそれを和らげることかできたかは知らないままに、せめてジュリの命が安全なのを見てほつとしてるのです。

彼女はこうしたことすべてを知らないではありません。でもわたしから申しましようか、彼女が良心の呵責に苦しんでいると見えるそのことでわたしがどう思っているか。愛は彼女よりもいっそう巧妙なのです。あの人は母上を憐む気持でいっばいで、あなたを忘れたかと思つています。でもどんなに嘆き悲しんでも、愛が良心をかき乱して否応なくあなたのことを考えさせるのです。愛は涙が愛する人とかかわりをもつことを欲するのです。直接その人の思いにふけることは彼女にはもうとてもできないのですが、愛はむりやりに、少なくとも後悔というまわり道をしてその人を思わせるのですね。愛の欺きはじつに巧妙でして、彼女はもっとたくさん苦しみたい、しかもその苦しみのなかにあなたが入ってきてほしいのです。あなたの心は彼女の心のこんな屈折がきつとおわかりになりませんか。でも、やっぱり自然であることに変わりありません。といひますのもあなた方二人の愛は力におい



手紙 一〇

デタンジュ男爵より

右の短信はこの手紙のなかに入っていたもの

誘惑者の心中にも名譽の感情と人の情がながしか残っているならば、貴下が心根を慄らせた女、己れを忘れた所業に及ぶこといま一步すすんでいたと余が疑っておれば命を失っていたであろう不幸な女の手紙に答えていたきたい。相手かまわず身を投じることを教えた哲学が、父に楯つくことをも教えたとして驚きはしませぬ。しかしながら、覚えておかれるがよい。余はいかなる場合でも、それでこと足りると期待しうるならば穩健で紳士的な方法をとることを好む者、よって貴下に対しても丁重に振舞うつもりだが、ただし貴族が貴族ならぬ者から名譽を傷つけられた場合にいかにも復讐すべきかは心得ておりますから、念のため。

手紙 一一

返事

おやめになるがよろしい、無益な威嚇は私を恐れさせず、不当な非難は私を恥じ入らすことはできません。同じ年ごろの二人のあいだには愛のほかには誘惑者はありません、またあなたには光榮にもご令嬢に尊重していただいた人間を卑しめる資格は断じてありません、このことご承知おきください。

私にいかなる犠牲を強要なさるのですか、いかなる權利によってそれを要求なさるのですか。いったい私は、私のすべての不幸をつくりなしたその人のために私の最後の希望を犠牲にしなければならぬのですか。私はジュリ

それでは死ぬがよろしい、聞き分けのない若者よ。死ぬがいい、猛々しくせに臆病な人よ。だが死ぬにあたって、君は君を大切に思った誠意ある人間の魂のうちに、ただの忘恩の徒のためにつくしたという悲嘆を残してゆくのだということを知っておきたまえ。

手紙 九 返事

おいでください、卿。私はもはや地上では喜びを味わえないものと思っております。しかしまたお会いするのです。私を忘恩の徒といっしょになさるなど、そんなこと、おできにならうはがありません。あなたのお心は恩知らずに出会うようにつくられてはおりませんし、私の心はそうなるようにできてはおりません。

短信 ジュリより

いまこそ青春の迷いを捨てて、人を欺く希望を断つときです。わたくしはけっしてあなたのものとなることとはございませぬ。それゆえあなたにゆだねました自由は返してくださいませ。父が自分の意向に従わせると申しております。それとも拒絶なすってわたくしをやがうえにも不幸になさいませ。あなたが拒まれますならば、あなたに  
なんの益することもなく、わたくしたち二人をともに滅ぼしますでしう。

ジュリ・デタンジュ

ておられるときに、子を殺す恐ろしい罪の企てをお考えになるがいい。私があなたから与えられた不幸の復讐は、いつの日か、あなたの後悔がそれを果たすでありましょう。そしてあなたは遅きに失して、あなたの盲目的な、自然にもとる憎悪が、私にとつてと同様あなたにとつても禍多きものであることを感じられるでしょう。私はかならずや不幸になりましょう。しかしあなたも、いつか血縁の声がお心の底から立ちのぼることがあれば、あなたの血を分けたただ一人の息女を、美しさにおいて、才能において、徳において世にたぐいぬいぬい人を、天がその賜物を惜しみなく与えながらよりよき父を授けることのみ忘れたもうたその人を、荒唐無稽なことどもの犠牲になさったことにより、私にもましてどれほどか不幸におなりでしょう！

短信（右の手紙に同封されたもの）

私はジュリ・デタンジュに、自分の身を自由に処して、自分の心にはかることなく結婚を承諾する権利を返します。

S・G

手紙 一二 ジュリより

よんどころなく一筆したためねばならなくなって、あなたはもう受け取られたでしょうね。いましがた起こりましたその事情をお伝えしたかったのですが、父がきわめて的確な処置をとりましたので、郵便馬車の出ます直前に

さんの父上を尊敬いたしたく思っております。しかし、私がお父なる人に服従することを心得ねばならぬとすれば、その人はあえて私の父とならなければならない。否、否、あなたがご自身のお振舞をどう考えられようとも、私はそれに強いられて、あなたのために、わが心のかくも貴重なかくも至当な権利を放棄するものではありません。あなたは私の人生の不幸をつくられた、私がおあなたにお返ししなければならぬのは憎しみのみ、あなたは私に対して何も主張すべきことをお持ちならないのです。ジュリさんが言われた、だから私は同意するのです。ああ！ あの方にはつねに服従しなければなりません！ 別の人が彼女を手に入れましょうが、だが命に服する私は彼女にいつそうふさわしい人間になりましょう。

お嬢さまがもしあなたの權威の限界を私に問うてこられたならば、私は間違ひなく父上の不当な要求に逆らうよう申しましたことでしょう。あなたが濫用しておられる權威がいかなるものであれ、私の権利のほうがあなたの権利よりも神聖です。私たちを結ぶぎずなは父の權力の及ばぬところにあり、人間の法廷でさえそうなのですから、あなたがあえて自然の情を主張なさいますと、あなた一人が自然の掟に挑戦なさることになるのです。

またあなたがそのために復讐すると言われる、さても奇異にして厄介な名譽なるものを持ち出されるのもよくありません。当のあなた以外のだれも、名譽を傷つけてはおりません。ジュリさんの選択を尊重なさいますれば、あなたの名譽は安全です。なぜなら侮辱を受けながらも私の心はあなたを尊敬いたしますし、時代遅れの主義主張がどうありましようとも、誠実な人間との姻戚関係が誠実な人間の名譽を汚したことはけつしてないのですから。もし私の自負がおあなたを侮辱いたしておりますなら、私の命を毀れるがよろしい。私はゆめ手向かって命を守りたいしません。なおまた、貴族の名譽がどこに存するかは私の関心外のことであって知りたいとも思いませんが、正しい人間の名譽ということならば、それは私にかかわること、私はこれを守るすべを知っており、命絶えるときまで純粹に汚れなく保ちつづけるであります。

さあ、無情な、その甘美な名にふさわしからぬ父よ、やさしく柔順な娘がおあなたの偏見のために幸福を犠牲にし

しの心はあんなに痛い犠牲を払いました、その美しさがもうないの、あたしの病氣は治り、でもその病氣があたしを解放してくれました。この幸いな損失のおかげで、あたしの同意なしにあたしと結婚しようなどという、こまやかさを欠いた人の粗野な熱意も衰えるでしょう。あたしのうちの好ましかったところがもう見つからないので、ほかのことにも関心がなくなるでしょう。あたしは父との約束に背くことなく、父の命を救った友を傷つけることなく、あのわずらわしい人を拒むことができるでしょう。口は閉ざしていても、容姿があたしのかわりに語ってくれないでしょう。その人は嫌氣がさして、それがあたしをその人の横暴から守ってくれましょう。あたしをわざわざ不幸にするには及ばない、みにくい女だと思いでしょうよ。

ああ、いとしいいとこの君！ あなたは知っていますね、心変わりのしない、もっとやさしい、こんなことで嫌になったりしないひと。顔だちや容姿をこえて思いを寄せてくれました。その人が愛したのは面立ちではなくて、あたしだった。あたしたちは全存在によってたがいに結ばれていた。ジュリさえ同じままでいたら、美しさは逃げ去っても、愛はいつまでもそのまま残ったでしょうよ。それでも、あの人は同意したのね……つれないひと！ ……あの人は同意しなければならなかったのです、あたしがそうなさいと言ったものだから。交わした約束があるからといって、心を引き離そうとしている者をだれが引きとめるでしょう。するとあたしは、あたしの心を引き離そうとしたのね……あたしがそうしたのね……。ああ！ どうしてこうなにかもが過ぎ去った時を、もはやあつてはならない愛の火を、たえまなくあたしによみがえらせるのでしょうか。あたしがいくらあのないとしい面影を自分の心からもぎ取ろうとしてもだめ、あまりにも強く結びつけられているの。心を解放することができずに引き裂くばかり、あたしは甘美な思い出を消し去ろうと努力して、いっそう心に刻みつけているのです。

熱に浮かされていたときの妄想を思いきって言いましたか、それは熱が下がっても消えやらず、病氣が治ってからますますあたしを苦しめるのです。ええ、あなたのみじめな友の錯乱を知って憐れに思ってください、そしてこんな錯乱を生み出す怖ろしい情熱からあなたの心を守ってください。天に感謝なさい。あたしがいちばん悪かつ

話が終わったのです。父の手紙は駅で間に合いました。私が、私のはそうはまいりません。これが潜きますまであなたには決心をなさり、お返事が出されておりました。いまとなつては委細を申しあげてもどうしようもありません。わたしは自分の義務を果たしました。あなたはあなたの義務をなさいますでしょう。それにしても運命はわたしたちを打ちのめします、名譽はわたしたちを裏切ります。永久に離ればなれです、そしてなによりもおぞましいことに、わたしは死ぬことになるのです、人の……ああ！ あなたの腕に抱かれて生きることもできたのに！

おお、義務よ、おまえはなんの役に立つというのか。おお、摂理よ！……うめきつつ口を閉ざさねばなりません。

手からペンがすべり落ちます。数日まえから具合が悪かったです。今朝の話でひどくひどく揺すぶられました……頭と胸が痛みます……気を失いそう……よもや天がわたしの苦しみを憐れとおぼしめたのでは……起きていられないのです……仕方がありません、床について、もう立ち直れないという望みをもって慰めとします。さようなら、これが最後ね。ジュリのだいじな、やさしいひと。ああ！ あたしもうあなたのために生きてはならないのなら、生をすでに終えたのではないかしら。

手紙 一三 ジュリよりドルブ夫人へ

いとしい、むごいひと、するとあなたは本当にあたしを生と苦悩によみがえらせてくださったのね。この上なくやさしい母のもとに行こうとして幸福な時にめぐりあっていましたのに。あなたの無慈悲な看病に引きとめられて、またもつと長いあいだお母さまのことを思って悲しむのです。あとを追いたいという願望があたしを地上から引き離そうとすると、あなたから離れたがらない未練が地上に引きとめるのね。生きながらえて慰めがあるとすれば、それは完全に死の世界から脱したのではないという期待です。人に気に入られる容貌をしていたために、あた

通常の妄想とは違うどこかしら不可解なものがあるの。だれよりもいちばん立派な人の死の予感かしら。彼がもうこの世にいないという知らせなのかしら。天がせめて一度はあたしを導いて、あたしに愛させてくださつたその人のあとを追うよう誘っていらっしやるのかしら。ああ！ 死の命令ならばあたしには恩恵の最たるものだわ。

なにも感じない人を信じこませる哲学の空疎な論議をすべて思い起こしても、なんにもなりません。そんな議論はもうあたしに対して力をもちません、あたしは軽蔑をおぼえます。霊というものは目に見えないものですね、あたしはそう思いたいの。でも、こんなにしっかりと結びついた二つの魂がたがいのあいだで肉体や感覚から独立した直接的な交流をもつことはありうることじゃないかしら。一つの魂が別の魂から直接的な印象を受け取ってこれを脳に送り、脳から逆にその別の魂が自分の魂に与えた感銘を受け取るということはありえないことなのでしょか。哀れなジュリ、なんとまあとてつもないことを！ 情熱はあたしたちをどれほど信じやすくすることか、強く動かされている心は自分で気づいている迷妄からも容易に離れられないのね！

手紙 一四 返事

ああ、あまりにも不幸な、あまりにも感じやすいひと、そんなふうではあなた、苦しむためにだけ生まれてきたのかしら。つらい思いをなんとかしてあげたいのだけど、だめなのね。あなたはしょっちゅう苦悩を求めてるみたいだし、宿命があたしの心づかいよりも強いのです。現実には苦しみの種が山ほどあるのに、せめてはそれ以上に頭を悩ませてくれる迷妄から抜け出さない、きつと悲しい真実のほうがまだしもつらくないでしょう。あなたの夢は夢ではないのです。あなたが見たのは友の幻影ではなくって、その人ご自身、あなたの空想のなかでたえずうかん

たころ、激しい発作がつづいていたとき、あたしはベッドの脇にあの不幸な人を見たような気がしたのです。それも以前あたしの生涯の短い幸福のときにあたしの眼をうっとりさせた姿ではなく、蒼ざめて、やつれて、取り乱し、絶望のまなざしをしているのです。彼はひざまずいていました。あたしの片方の手をとって、ひどい状態になっているのも厭わずに、恐ろしい毒の感染も恐れずに、接吻と涙でおおってらした。よく彼が不意に現われると激しく喜ばしい感動をおぼえたのですが、あの人の姿を見て同じ気持を味わったの。あたしは彼のほうに身を投げようと思いました。だれかがあたしをつかまえました。あなたがあたしの目前からあの人を引き離していった。なによりも激しく胸を打たれたのはあの人うめき声、離れてゆくにつれてそれが聞こえるように思えたのです。

この夢はあたしに不思議な効果をもたらしたのですが、それをあなたにお伝えすることができません。長くつづいた、ひどい熱でした。何日かのあいだ、意識を失っていました。熱に浮かされていて、よくあの人夢を見るのですが、そのどれひとつとして、さきほどの夢ほど深い印象をあたしの頭のうちに残さないのです。その印象はあたしの記憶や感覚から消し去ることが不可能なほど強いのです。ひっきりなしにあの同じ姿勢のあの人が見えるようなの。あの人の様子、服、身振り、悲しそうなまなざしがいまだにあたしの眼をとらえます。手に唇が押しあてられているみたい、涙で手がぬれる感じがします。あの人を嘆きの声のひびきがあたしを身震いさせます。あの人があたしから離され、連れて行かれ、あたしは引き留めようともがいているの。すべてがあたしに空想の場面を、じっさいに起こった出来事よりも強力に描いて見せるのです。

あたしは長いあいだこのことを打ち明けるのをためらっていました。恥ずかしくって口では言えなかった。でもあたしの動揺はしずまるどころか日に日につよまる一方で、ついに狂気を告白したい気持ちに逆らえなくなりましだ。ああ！ 狂気があたしを全部とらえてくれたらいいのに。どうして理性をすっかりなくしてしまえないのでしょうか、少しくらい残っていてもあたしを苦しめるだけなのに！

夢の話にもどります。ね、クレール、笑ってくださいっていいのよ、あたしの愚かしさ。でもこの幻覚のなかには



した調子で言われました。「それは私の破滅にむかって弁を弄しすぎるといふものです。私を追放なさったようにまた私を追っ払おうとしても、そうはまいりません。あの人に会うためとあらば、世界の涯から百回でもやって来ます。しかしこれは私をつくりたもうた神に誓って言っておきますが」と、あの人は性急に言い添えました、「彼女に会わないかぎりここから動きません。あなたが憐れを知る人になるか、私がこの誓いを破るか、一度試してみようじゃありませんか。」

覚悟は決まっていたのです。ドルブはあの人の希望をかなえる手段を探して、それで帰ってこられたことが露見しないうちに立ち去ってもらおうといいという意見でした。この家ではあの人を知っているのはハンスだけです、ハンスは信用できます、それに召使のまえではわたしたちはずっと別の名であの人と呼んでいましたから。あたしはその次の夜に会わせてさしあげましょうとお約束しました。ただし、少しのあいだだけで、彼女に話しかけてはいけない、明るる日の未明には発っていただく、という条件づきで。あたしはそれを約束してもらいました。それで安心して、夫とあの方を残して、あなたのそばに引き返したのです。

あたしの見るところあなたは眼に見えて快方に向かっています、発疹も終わっていました。お医者さまの言葉であなたは勇氣と希望を取り戻しました。あたしはあらかじめバビと示し合わせておいて、軽くはなりましたものの発作がまだあなたの意識を乱していましたから、その時をとらえてみんなを遠ざけ、夫にお客さまをお連れするようにと伝えさせることにしました。発作の残っているあいだなら、あなたがあの人に気づく可能性も少ないと思つて、なんととっても苦労したのはご心痛のお父さまに引き取っていただくこと、毎晩そこに残ると言つて聞かれないのです。とうとうあたしは怒つて、いらしてもだれの手助けにもなりません、あたしも夜通しおりますつもり、いかに父親であられて愛してらしても、あたしの愛情ほどゆき届かないことはよくおわかりのはず、と申しあげた。そこでしぶしぶ出て行かれ、あなたとあたしだけになりました。ドルブは十一時ごろに来て、あなたの友は通りに残してきたと言いました。あたしが迎えに出ました。手を取りました。彼は木の葉のように震えています

だ感動的な情景は、いちばん悪かった日の翌々日、お部屋でじっさいに起こったことなのです。

その前日、あたしはかなり遅くあなたのそばから離れて、その夜はあたしを帰らせて、交代するつもりドルブが出かけようとしていると、突然入ってきてあたしたちの足もとに身を投げたのです、あの不幸な人を見るも憐れな状態で。あの人はあなたの最後の手紙を受け取るや駅馬車に乗ったのです。昼も夜も走りつづけ、道中三日で飛ばし、最後の駅でようやく休止して町へ入るために夜になるのを待ったのです。打ち明けますと、恥ずかしいけれどあたしはドルブのようにすぐさま彼の首にだきつくことができなかった。どんな事情があつての旅かまだわからないままに、その結果を予見したのです。あんなに多くののにがい思い出、あなたの危険、あの人の危険、眼に映った取り乱したさま、すべてがこんなにうれしい不意打ちを曇らせていたし、あたしは動転してしまつて存分に愛撫することができないのでした。それでも胸しめつけられて抱擁し、あの人もやはり同じ思いだった、それは叫びや涙よりもはるかに雄弁に、もの言わず抱きしめていてたがいに感じられたのです。最初の言葉はこんなでした。「あの人はどうですか。ああ、どうなんです。私が生きるか死ぬか、言ってください。」そこであなたの病氣のことは知っておいでだとわかり、病名もご存じないはずはないと思つて、危険を少なめに言うだけでほかの用心はしないでお話ししました。天然痘とわかると、叫びをあげて、氣を失つてしまわれた。疲労と不眠に氣持の不安が加わり、すっかり打ちのめされてしまつて、意識を取り戻すのに長い時間がかかりました。ものを言うのもやつと、あたしたちで寝かせました。

自然の理に負けてあの人は十二時間ぶつづけに眠りました。しかし、あのような不安にさいなまれた眠りでは、力を回復させるよりもむしろ消耗させたでしょう。翌日また新たな難題がおきました。あの人はどうしてもあなたに会うというのです。あたしはあなたに急変が生じるおそれがあるといつて反対しました。すると危険がなくなるまで待とうとおっしゃる。しかしこの土地に逗留することからして剣呑なのです。そのことをわかつてもらおうと試みると、きつとなつてあたしの言葉をさえぎるのです。「あなたの無情な弁舌はもうけっこうです」と憤慨

かかっていました。まだかかっていることを隠してらしたのね、それで不用意にあなたのもとにお連れしたのでした。あなたの病気を治すことができないので、同じ病気を分かち合おうと思われたの。手に接吻なされたやり方ではないです、意図して自分に病気をうつしたのだということ、疑うことができません。あれ以上に無用心にはできっこありません。でもそれは愛の種痘でした。成功しました。命の父である愛は世にもやさしい恋人に命を残してくれました。彼は治って、エドワード卿の最近のお便りでは、いまごろお二人でパリに向かっているはずで

す。

さあ、あまりにも愛らしいこの君よ、これでもう、いわれもなくあなたを不安にした不吉な恐怖を追放できません。あなたは以前からあなたの友のことは断念してました、そしてその人の命は大丈夫です。だからあなたの命を大事にすることだけを、それとあなたの心が父上の愛に約束なされた犠牲を快くやりとげることだけをお考えなさいな。いたずらな希望にふりまわされ、空想をふくらませるのはやめることよ。あなたはみにくくなつたせつかちにご自慢ですけど、もつと謙虚におなりなさい。いいこと、まだまだあなたには謙虚であるべきいわれがありすぎるほどあるのですよ。あなたはひどい打撃を受けましたが、お顔は免れました。癩痕と思っているでしょう、じつはただの赤い斑点、じきに消えます。あたしはもつとひどいめに会ったのだけど、それでもごらんの通りそう悪くないでしょう。あたしの天使、あなたは期待に反してやっばり美しいのよ。それに一週間でもかかった恋の病が三年会わずにいても治らない無頓着なヴォルマールさんよ、あなたをしょっちゅう見ているはたしてそれが治るでしょうか。ああ、あなた、あなたの唯一の手段が気に入られないことだとすると、あなたの運命は絶望です！

(一) 第四部でこの仮名がサンヨブルーという名であったことがわかる。

た。控えの間を通るとき力が抜けてしまって、息が苦しく、腰を下ろさずにはいられなくなりました。

そのとき、遠くの明りのほのかな光で少しあたりのもの見分けがつくと、あの人は深く溜息をついてこう言いました。「ええ、この場所は覚えていきます。かつて一度ここを通りました……同じ時刻……同じように秘密で……今日のように震えていました……心臓が同じように動悸してました……。おお、無謀な者よ！ 私は人間にすぎないのに、あえて味わおうとしたのだ……私はいまなにを眼にするのだろう、すべてが逸楽の気を発し、私の魂はそれに酔いしれていたこの同じ隠れ家のなかで。私を熱狂させ、それを分かちもってくれたその同じ人のなかに。死の姿、苦しみの気配、不幸な徳、瀕死の美！」

いとしいいとこの君、この涙の出る場面のひとつひとつはやめましようね、あなたの心から免除してあげます。彼はあなたを見て、もの言わなかったわ。約束だったの。でもなんとという沈黙でしょう！ いきなりひさまずいた。嗚咽して寝台の帳とじに接吻して。両の手と眼を上にあげて。こもったうめき声をあげて。苦惱と叫び声をこらえているのがやっとだった。あなたがあの人の方を見ないで、無意識に片方の手を出したの。あの人は気が狂ったようにその手を取りました。病んだ手に押しつけられた火のような接吻は、まわりのいっさいのもの音や声にもましてあなたを目覚めさせました。あの人と気づいたのだとわかって、抗って喚く人をかまわずにすぐさま部屋の外に連れだしました。こんな束の間のことだからあの人が現われたと思ってあなたもあんなの妄想よといってごまかせる、そう考えたの。ところが、あなたがなにも言わないものだから、忘れてしまったのだと思って、パビにこのことはあなたに話してはいけないと禁じておきました。彼女はいわれたとおりしたのね。役立たずの用心でしたわね、うまくいくはずを愛が狂わせてしまって、そして思い出をじっと発酵させただけ、いまではもう消すことができない！

あの人は約束どおり出発しました。あたしは近在で足をとめないと誓っていたいただきました。でもね、あなた、これだけじゃないの。いずれはわかることですから全部いってしまいましょね。エドワード卿が二日後に立ち寄られました。急いであとを追ってディジョンで追いつかれたのですが、あの人は病気でした。不幸な人は天然痘にか

な自然よ、おまえの権利をすべて取り戻すがよい！ おまえを無に帰する無情な徳をわたしはきっぱり捨てます。おまえがわたしに与えた心情は、わたしをあれほど何度も迷わした理性よりもさらに人を欺くであろうか。

あたしのこの愛にみちた心情をだいにしてくださいな、いとしいひと。あなたはうんとその恩恵をこうむっているのだから、とても憎めませんことね。でもそれが分かち与えられ、貴重な、甘美な分配がなされても、どうぞがまんなさってくださいね。血縁と友情の権利が愛の権利によって消えてしまわないこと、がまんしてほしいのです。あなたのあとを追って父の家を捨てるとは考えないでください。あたしが神聖な權威によって課されたきずなを拒むとは思わないでください。残酷な別れ方で実の親の一人をなくしましたことから、残った一人を苦しめることのこわさをいやがうえにも教えられたのです。そうです、父が今後の慰めと期待しております娘は、悲嘆に沈むその心を悲しませることはいたしません。あたしは自分に生を与えてくださった方すべてに死を与えはいたしません。ええ、そうだわ、あたしは自分の罪を知りながら、それを憎むことができないのだわ。義務、名譽、徳、そうしたものはすべてもうあたしに語りかけてこない、でも、それでもあたしは人非人ではありません。あたしは弱いのであって、自然に背いているのではありません。覚悟は決まっています。あたしは愛する人たちを一人も苦しめたくないのです。約束に囚われて空しい称号に恋々としている父は、取り決めどおり勝手にあたしを結婚おさせになるがいい。あたしの心は愛だけが支配しますように。あたしの涙はいとこの胸のなかでとどまることなく流れますように。あたしは卑しく不幸であつてもいい、でもあたしの大事な人はみんな、できることならば幸福になつて満足なさいますように。お三人であたしのただ一つの生をつくりあげてください、そしてあなた方の幸福があたしに悲惨と絶望を忘れさせてくれますように。

もうたくさん、もうたくさんよ。あなた、あなたは勝ちました。あたしはそれほど愛に逆らえませんが、抵抗力が尽きました。あたしは持てる力をみんな使った、そのことは良心が証言して慰めてくれます。天にお願いいたします、みずから与えたもうた以上のことであたしに責任を問われませぬように。あれほど何度も苦心してかち取られたこの哀れな心、あなたの心にあんなにつらい犠牲を払わせたこの心は、完全にあなたのものです。あたしの眼がああなたの眼を見た最初の瞬間からあなたのものでした。最後の息を引きとるまであなたのものでしよう。あなたはこの心を手に入れる資格を十二分お持ちですから、もう失うことはありません。それにあたしは公正を犠牲にして幻のような徳に仕えますことにあきらめています。

そうよ、やさしい寛大なひと、あなたのジュリはいつまでもあなたのもよ、ジュリはいつまでもあなたを愛するでしょう。そうでなくてはいけない、あたしはそれを望み、あたしはそうすべきである。愛がああなたに与えた支配力をお返しします。もうあなたから取り上げません。偽りの声が心の底でささやいても大丈夫、もうだまされないわ。そんな声が押しつける義務、天意によってあたしが愛した人を永久に愛する義務に逆らって押しつける空虚な義務、それがいったいなんでしょう。あらゆる義務のなかでいちばん神聖な義務は、あなたに対してあるのじゃないかしら。あたしがすべてを約束したのは、あなただけじゃないかしら。あたしの心の最初の誓いはあなたをけっして忘れないということじゃなかったかしら、そしてけっして揺るがないあなたの忠誠はあたしの忠誠の新たなきずなじゃないかしら。ああ！ あたしをあなたにお返しするこの愛の感激のなかにあって、ただひとつ口惜しいのは、こんなに貴重な、こんなに正当な感情をむこうにまわしてあたしが戦ったことなの。自然よ、おお、甘美

ての愛情を抑えがたい愛と両立させたいと思われた。すべての心情に同時に身をゆだねたために、それらを一致させるどころか混乱させていて、徳のゆえに罪人となるのです。おお、ジュリ、あなたの不可思議な支配力はそもそも何なのでしょう！　なんと奇異な力であなただは多くの理性を幻惑するのだろう！　あなたは多くの恋の火が恥ずべきものだとはよく思わせてさえ、そんな間違いをしてもそれであなたを尊敬させるのです。あなたの呵責を共有することによって、よくがあなたを讚美せずにはおれなくなるようにしてしまおう……。良心の呵責！……そんなものをあなたが感じなければならなかったのだろうか……よくが愛したあなたが……よくが崇拜おくあたわぬあなたが……。罪があなただの心に近寄ることができるとは……残酷なひと！　あなたの心を、よくに屈しているその心をよくに返すならば、かつてよくに与えられた心をそのまま返してほしい。

あなたはよくに何を言ったのです？……よくになんということを聞かせるのです？……あなたが、ほかの男の腕に？……ほかの男があなただを自分のものに？……もうよくのものではなくなる？……いや、なによりも恐ろしいことには、よくだけのものではなくなる！　いったいよくは？　よくはそんな怖ろしい責苦をなめるのか？……よくはあなたでなくなったあなたが生きのびるのを見るのだろうか？……いやだ。あなたを共有するよりはあなたを失うほうがいい……。どうして天はよくを挿すおる熱情に見合う勇気を授けてくれなかったのだろう！……あなたの手が愛に嫌われ名譽に非難される忌まわしいきずなで卑しくなるまでに、よくは自分の手でもってあなたの胸に短刀を刺しに行くだろうに。あなたの清らかな心臓から不貞に汚されたことのない血を奪いつくすだろうに。この清浄な血に、よくの血管のなかで何もものも消しえない火によって燃えている血を混ぜ合わせるのだ。よくはあなたの腕のなかに倒れるだろう。あなたの唇に最後の息を送り……あなたの最後の息を受けとめる……ジュリが息を引き取る！……あんなやさしい眼が死の恐怖にかきくもる！……あの胸、愛の玉座がよくの手に引き裂かれ、どつと血と命を流す……。だめだ、生きて苦しむがよい、よくの臆病の罰を引き受けたまえ。だめだ、あなたが命がらえないことを望みながら、だがしかしよくはあなたを刺し殺すほど愛することができない。

ぼくたちは再生したのですよ、ジュリ。ぼくたちの魂の本物の感情がすべてまた流れだしました。自然はぼくたちに命を残してくれた。そして愛がぼくたちを生によりみがえらせてくれたのです。あなたは疑心を抱いてたのですか。ぼくからあなたの心を取り去ることができると、そんなことを思ったのですか。そうだ、あなたよりよく知っているのですよ、天がぼくの心のためにつくられたその心のことは。二つの心は一つの共通の存在によって結ばれていて、死にいたるまでそれを失うことはないと感じているのです。そんな心と心を引き離す、いやそうしようと思ふことさえ、ぼくたちの意のままになることでしょうか。この二つの心は、人間のつくったきずなによって、人間が断ち切れるきずなによって結びついているのですか。否、否、ジュリ、残酷な運命が夫妻という甘美な名を拒んでも、なにもものも忠実な恋人という名を取り上げることができない。その名はぼくたちの悲しい日々の慰めとなり、ぼくたちはそれを墓場まで持って行くでしょう。

こうしてぼくたちはふたたび苦しむことを始めるためにふたたび生き始めるのです、そして存在するという感情はぼくたちにとっては苦悩の感情にはかならないのですね。不幸な者たちよ！ ぼくたちはどうなったのか。どうして以前のぼくたちであることをやめたのか。至高の幸福のあの魅惑はどこへ行ったのか。徳が愛の火をかきたてたあの妙なる陶醉はどこへ行ったのか。ぼくたちに残っているのはぼくたちの愛だけ、愛だけが残って、その魅力は姿を消しました。あまりにも従順な娘よ、勇気のない恋人よ、ぼくたちの不幸はみんなあなたの間違いから来ているのです。ああ、心がもつと純粹でなければ、そんなに迷わなかったでしょうに！ そう、あなたの心の誠実さがぼくたちを滅ぼすのです。あなたの心にみちているまっすぐな感情が知恵を追いだしたのです。あなたは子とし



こつても、ぼくは自分が憎んでいる勇氣でもって自分をたたかしようというのではなく、またあのような犠牲を払わせる徳を欲しているのでもありません。そうではなくって、ぼくは自分の過ちを正当化しようとするよりも、それをみずから責めることによってまだしも罪が減ずると思うのです、そして良心の苛責を取り去れば罪は極まると思うのです。

ぼくはなにを書いているのかわからない。自分の魂が怖ろしい状態に、あなたの手紙を受け取る以前よりもさらに悪い状態にあるのを感じます。あなたがぼくに取り戻してくれた希望は悲しく暗い。それはぼくたちをあれほど何度も導いたあの清澄な微光を消し去ります。あなたの魅力はそれゆえ光を失い、それゆえますます感動的になります。ぼくの見るとあなたは、心やさしく不幸なひと。ぼくの心はあなたの眼から流れる涙にひたされ、ぼくはあなたの幸福を犠牲にしなければ味わえぬ幸福を悲痛な思いでわが身にとがめるのです。

とはいえ、ひそかな熱意がぼくをかりたて、悔恨がぼくから奪い去ろうとする勇氣をぼくに返してくれるのを感じます。いとしい人よ、ああ、ぼくの愛のような愛は、どれほどの喪失をあなたに償ってあげることができるか、わかりますか。あなたのためにのみ生きている恋人がどのくらいあなたに生を愛させることができるか、わかりますか。今後ぼくが生きることを、行動することを、思考することを、感じることを欲するのは、あなただけのためだということ、あなたにわかるでしょうか。そうだ、ぼくの存在の甘美な泉である人よ、ぼくはもうあなただけの魂のほかにも魂をもたず、あなたの一部分となってそれ以外の何ものでもなくなるでしょう。そしてあなたはぼくの心の底にまこと甘美な生を見出して、あなたの生が失った魅力についてはもう感じないようになるでしょう。よろしい、ぼくたちは罪人になるだろう、しかし悪人にはなるまい。ぼくたちは罪人になるだろう、しかし依然として徳を受取るだろう。過ちの言い訳なんかしないで、それをうめき悲しむだろう。過ちをいっしょに嘆くだろう。憐れみ深く、善良に生きることによって、できることならば過ちをあがなうだろう。ジュリ！ おお、ジュリ！ あなたは何をしようというのか、あなたに何ができるか。ぼくの心から逃れることはできない。ぼくの心はあなた

ああ、この苦悶に締めつけられる胸のうちを知ってもらえたら！ この心がこれほど神聖な火に燃えたことはたえてなかった。あなたの無垢と貞潔がこれほどこの心に貴重であったことはなかった。ぼくは愛する者です、ぼくは愛するすべてを知っている、そう感じています。しかし、ぼくは一個の人間にすぎません。そして、この上ない幸福を諦念することは人間の力を越えています。一夜、ただの一夜がぼくの魂をすべて永久に変えたのです。あの危険な思い出を取り除いてください、そうすればぼくは有徳になります。だがあの運命的な夜が心の底で支配し、残余の生をその影でおおいつくそうとするのです。ああ、ジュリ！ 愛してやまぬひと！ 永久に悲惨であらねばならないのなら、いまひとときの幸福を、それから永遠の悔恨を！

あなたを愛する者の言うことをお聞きなさい。ぼくたちは、どうしてぼくたちだけが他のすべての人間たちよりもつつましくあろうとするのでしょうか、みんなが口にしてだれひとり実行しない非現実的な徳を子供のような単純さで追いかけてやうとするのでしょうか。なんとまあ！ ぼくたちはロンドンやパリに群がっているあの学者連中にまさる道徳家なのでしょうか。彼らはみんな夫婦の貞節を嘲笑し、姦通を遊びとみなしています。そんな事態は破廉恥ではないのです。それに文句をつけることも許されないのでして、この土地では結婚を重んじて心の赴くままにしたがわれない人を紳士たちは笑いのものにするでしょう。彼らはこう言います。じっさい、行ないが咎められるべきなのはそれが世間の評判になったときだけであるから、秘密が守られていたらなんでもない。夫は自分の知らない妻の不貞からどんな害を受けるだろうか。妻は自分の過ちを償うためにどれほど夫の気に入るように努めるだろうか。夫の疑惑を防いだり癒したりするべく、どれほど優しく振舞うだろうか。想像のなかでの幸福はないとしても、夫は現実においてより幸福に生きているのであって、人が大仰に言いたてるあの罪なるものは、社会における関係が一つふえるだけのことなのだ、と。

おお、わが心のいとしい友よ、断じてぼくはこんな恥ずべき主張によってあなたを安心させようというのではありません。ぼくはそれを打破できないまでも唾棄しますし、ぼくの良心は理性よりも強くこれに反駁します。と

て今しがた、運命を彼女の運命と結び合わせた誠実な人を幸福にしてさしあげるにふさわしい女性となりました。あれほど無謀なことなされたのです、いまこそ天に感謝なさいませ。天はあなた方をお二人とも、彼女は、恥辱から、あなたは、彼女の名譽を辱めたことの悔恨から、救いたもうたのです。彼女の新しい境遇を重んじてください。お手紙は出されないように、あの人からお願ひです。彼女が書きますからお待ちください。じきに書きましよう。さあ、あなたがわたしの抱きました尊敬に値する方かどうか、あなたの心が純粹な、利害ぬきの友情に感応なさるかどうか、いまこそそれを知る時です。

手紙 一八 ジュリより

あなたはとても長いあいだわたしの心の秘密をみんな預かってくださいましたから、この心はもうそんな甘美な習慣を失うことができそうにありません。わたしの生涯のもっとも重大なこの時にあたって、心は思ひのたけをあなたに打ち明けたいと申しております。あなたもどうぞ心を開いてください、いとしい友。友情の長い長い話を胸のなかに受けとめてくださいな。友情は、ときとして語る友にとりとめのない話をさせるかもしれませんが、聞く友をいつも我慢づよくしてくれますわね。

断つことのできぬ鎖によって、夫の運命に結ばれて、いえむしろ父の意志に結ばれて、わたしは死の時にしか終えることのない新しい生涯に入りました。それを始めるにあたって、別れを告げた生涯にしばし眼を注ぎたく思います。あれほどなつかしい時を想い起こすことは、わたしたちにつらいことではありますまい。おそらくわたしは、残された時を善用するための教訓をそこに見出すでしょう。おそらくあなたは、あなたから見わたしの行動のあいまいだったところを照らしだす明りを見つけられるでしょう。少なくとも、わたしたちがお互いにどうい

と結婚したのじゃありませんか。

ぼくをこっぴどく欺いたあの空しい栄達の設計は、とうに忘れております。今後はもっぱらエドワード卿につきすべきぼくの責務を全うするよう専念します。卿はぼくをイギリスに連れて行くつもりで、その国ではぼくはかならずや彼の役に立ちうるそうです。ええ、ついて行きましょう。しかし毎年ぬけ出して、こっそりあなたのそばに行きましょう。話ができなくても、せめてはあなたを見るでしょう。せめてあなたの足跡に接吻するでしょう。あなたの一度のまなざしがぼくに十か月の生命を与えてくれました。やむなく引きあげて、愛する人から遠ざかるときは、またぼくをその人に近寄せるであろう道のりの歩を数えて慰めとしましょう。こうした度重なる旅は、あなたの不幸な友をたくみに欺いてくれるでしょう。あなたに会うべく出発するときに、すでにあなたに会っている思いでみたされるでしょうから。忘我の思い出が帰る途上ずっと彼を魅了するでしょうから。残酷な運命にもかかわらず、彼の悲しい歳月は完全に失われたことにはなりません。飲みの刻印をとどめていない年はなく、あなたのそばで過ごす短い時は彼の全人生へと拡がってゆくでしょう。

(一) このお人好しのスイス人はどこでこんなことを知ったのだろう。ずっと以前から浮気な女たちにはもっと横柄な態度をとってきたのだ。まず愛人たちを堂々と家に引き入れるのであって、彼女たちが夫の存在を我慢してやるのは、夫が当然払うべき敬意をもって妻の愛人に接する、その限りにおいてなのである。不倫な関係を隠したりすれば、それを恥じていると人に思わせることになり、辱めを受けるであろう。まともな女性はそういう女に会おうとしないであろう。

手紙 一七 ドルブ夫人より

あなたの恋人はもういません。しかしわたしは友をとりもどし、あなたもひとりの友を得られたのです。あなたが失ったよりもはるかに多くをあなたに返すことのできる、そんな心をもった友を。ジュリは結婚しました、そし

たちはやがて二人のあいだに何かしらあることを経験しました。沈黙を推弁にし、伏せた眼に語らせ、大胆な臆病さを生みだし、欲望を怖れによって示して、心があらわせないことをみんな言ってしまう、そんなあること。

わたしには自分の心がわかっていて、あなたが何かおっしゃれば直ちに破滅すると考えていました。わたしはあなたが慎み深く抑制してらっしゃるのを認め、こういう心づかいを好ましいと思ひ、それですます好きになりました。あなたが沈黙を守ってらっしゃるのはつらいでしょうがそうしなければならぬこと、わたしは自分の無垢を危うくしないようにしてそれに報いてさしあげようと思いました。自分の性質に無理強いして、いとこのまねをしました。彼女のようひょうきんで、おふざけさんになって、快活を装うことで深刻すぎる打ち明け話を回避し、数知れぬやさしい愛撫を見逃してもらおうと思ひました。現状はとても楽しいのだからこれを變えてはならない、そうあなたに思わせてますます慎み深くなっていたたくもりでした。みんな不成功でした。自分の本性から外に出ますと罰を受けますね。ほんとうに無分別でした、破滅を予防するどころかそれを速め、一時しのぎの薬のつもりが毒を使っていました。あなたにものを言わせないはずのものが、まさしく口を開かせることになりました。二人きりのときは冷淡なふりをして、距離を保ちましたがだめで、この抑制はわたしを裏切りました。あなたは手紙を書かれました。最初のお手紙を火にくべるか母のところへ持ってゆくかしないで、わたしは封を切ってしまいました。それはわたしの罪でした、でもそのほかのことはみんな仕方なかったのです。致命的なお手紙に対して、読まずにすますことはできなかったものの、お返事しないですますようしました。その怖ろしい葛藤で体をこわしました。わたしは自分が飛びこもうとしている深淵を見ました。自分自身を嫌悪して、それでいてあなたをそのまま発させる決心ができないのでした。わたしは一種の絶望におちこみました。あなたがわたしのものではなくなるよりは、あなたが存在しなくなるほうがいい、そう思った。あなたの死を望むところまで、あなたに死を求めるところまで来ました。天はわたしの心をこらんになったのです。この努力はいくらかの過ちを償ってくれるにちがいありません。

う存在であったかを考えて、わたしたちの心は生涯を終えるまでお互いにどうあるべきかをますます強く感じることでしよう。

はじめてお会いして、ほぼ六年になりますね。あなたは若くって、すらりとして、すてきな方でした。わたしから見てもっと美しい、姿のいい青年たちもおりました。だれ一人としていささかの感動も与えませんでした。なのにわたしの心は、最初ひとめ見たときからあなたのものでした。わたしはあなたのお顔に、自分の魂が必要としている魂の特長を見ているように思いました。わたしの感覚はほかでもない、もっと高貴な感情の器官として働いているのだ、そう思えました。わたしはあなたのうちにおいて、わたしの眼がそこに見るものよりも、自分自身のうちに感じていると思うものを愛したのです。二月にもならない前のこと、わたしはまだ自分は間違っていないかかと考えていました。こう思ったのです。盲目の愛は正しい。わたしたちはお互いのためにつくられている。人間の秩序が自然の関係をかき乱さなかったら、わたしはあの人のものになっているだろうに、そしてもし幸福であるということがだれかに許されているならば、わたしたちこそ一緒にそうなったにちがいないのに。

わたしの感情はわたしたちに共通していました。わたし一人がそれを感じたのだったら、感情はわたしを欺いたでしょう。わたしが知った愛は、たがいの適合と魂の一致からしか生まれえないものです。人は愛されなければ愛しません、少なくとも長いあいだは愛しません。あれほど多くの人を不幸にするといわれている一方だけの情熱は感覚にのみもつづいてるのでして、ときとして情熱が魂にまで入りこむことがあっても、それは偽りの関係によってそうなるので人はやがてその迷妄に気づくのです。官能の愛は相手を所有せずにはいられず、そして所有することによって消えてゆきます。真実な愛は心がなくてはすませず、そして愛を生まれさせた関係がつづくかぎりつづきます。わたしたちの愛の始めはこんなふうでした。わたしたちがその愛をよりよく秩序づけますならば、生涯を終えるときまでその通りでありましょう、そう願っております。わたしは自分が愛されている、そうにちがいない、と見もし感じもしました。口はつぐんだまま、視線は抑えられていましたが、心は理解されました。わたし

あいもあって、この友人がとても大事で誰れがたいのでした。ヴォルマール氏は年をとっていましたが、裕福で名門の生まれでしたが、似合わしい妻が見つからずにいました。父は友人を婿に迎えたいという気持があって娘のことを話しました。会ってみようということになって、それでなお気持があっていっしょに旅立ったのでした。運命のはからいによって、わたしはそれまで人を愛したことの無いヴォルマール氏に気に入られました。二人はひそかに約束を交わし、ヴォルマール氏は親族や財産のある北の国の宮廷で決まりをつける用件がたくさんあるので、そのための時間が欲しいといって、その約束を信じて発って行かれました。出発されたあと、父はわたしたち、母とわたしに、その人を夫と定めたと言明し、わたしの気弱では言い返す余地のない調子で、わたしにこの結婚を承知するように心を決めなさいと命じたのでした。母はわたしの気持がわかりすぎるほどわかっていて、あなたに自然な愛情をいだいていましたから、この決心を揺るがそうと何度か試みてごらんになりました。あなたを推輓することはようならぬままでも、父があなたを重んじるように、あなたをよく知ろうという気持を起こすように、と、そういう話し方でした。しかし、あなたに欠けている資格のゆえに、父はあなたがお持ちのあらゆる長所に眼を向けず、出生がそうした長所にかわりえないとは認めても、出生こそがそれらに価値あらしめるのだと主張なさるのでした。

幸福になれる可能性がない、とすればそれで愛の火は消されるはずなのに、かきたてられました。心慰める夢があるあいだは、苦しくとも支えられていましたが、それを失うとともに苦悩に耐える力もなくなりました。あなたといっしょになれる希望がいくらかでも残っているかぎりには、おそらくわたしは自分に打ち克ちましたでしょう。あなたを永久にあきらめるよりは、生涯ずっとあなたに抵抗するほうが、まだしもつらくはなかったのです。でも永遠の戦いということを考えてだけで、打ち克つ勇氣は失せました。

悲しみと愛がわたしの心を憔悴させました。打ちのめされた状態になって、わたしの手紙にもそんな感じが出てしまいました。メーユリから書かれたお手紙でその極に達しました。自分の苦悩にあなたの絶望感が重なったので

あなたがわたしに服従なさるお気持なのがわかって、わたしもお話ししなければなりませんでした。わたしはシャイヨからいろいろ教わっていて、それでこんな告白をする危険をよけいに知らされていたのです。愛ゆえに告白せざるをえなかったのですが、愛はその結果を避けるすべも教えてくれました。あなたはわたしの最後の逃げこむ場となりました。わたしの弱さの守りとなってもらおうと思うほどあなたを信用し、わたし自身からわたしを救ってくださる方と信じ、つまりあなたを正しく評価したのでした。こんな大事なものをお預けして、あなたがそれを尊重なさるのを見て、わたしは情熱ゆえに徳について盲目になってはいないと知りました。わたしは情熱に導かれてあなたのうちに徳を見出していたのです。わたしたちの心がたがい充足しあっていると思えましたから、なおのこと安心して情熱に身をゆだねていました。心の底には清潔な感情しかないと信じて、甘い親しみの魅力を警戒しないで味わっていました。なんとということでしょう！ わたしの怠慢ゆえに病が巣くっていること、習慣が愛よりも危険であることに気づいていなかったのです。わたしはあなたの抑制に胸打たれて、自分の抑制を緩めても危険はないと考えました。自分の欲望において邪なところのなかったわたしは、友情のやさしい愛撫をもってあなたのうちなる徳を勇気づけてさしあげようと思いました。クラランの木立のなかで、わたしは自分を過信していたこと、官能になにかを拒もうとする場合は何ひとつ与えてはならないのだということを知りました。一瞬で、ただの一瞬でわたしの官能は火と燃え、何をもってしても消しえなかったのです。わたしの意志はなおも抵抗しましたが、それ以後、心は俯敗したのです。

あなたも同じ迷いにおちりましたのね。お手紙はわたしを身震いさせました。危険は二重にありました。あなたからと、自分自身からとわたしを守るには、あなたを遠ざけねばなりません。これが瀕死の徳の最後の努力でした。あなたは遠ざかることによって決定的に勝利なさいました。お会いしなくなるや否や、わずかに残っていたあなたに対する抵抗力は、わたしの憔悴によって奪われました。

父は軍務を退きますときに、ヴォルマル氏を家に連れてまいりました。命の恩人ではあり、二十年来のおつき



たしにも起こりました。新たな夢が生まれて後悔の苦しさを和らげました。わたしは自分の過ちからそれを償う手段をひきだすことを期待し、わたしたちが結ばれることを父が認めざるをえないようにする目論見を立てました。わたしたちの愛の最初の果実がああ甘美な結びつきをいっそう固めるはずでした。わたしは天に、わたしが徳に立ち帰る保証として、またわたしたち共通の幸福の保証として、それを乞い願いました。ほかの人がわたしの立場にいたら恐れたかもしれませんが、わたしはそれを望んでいました。やさしい愛はその魔術によって良心のざわめきをしずめてくれるのですね。わたしが自分の弱さの結果として待ち望んでいたそのことによって、愛は弱かったわたしを慰め、こんな大事な期待がわたしの生の魅力と希望となるようにはからってくれたのでした。

わたくしは目立った徴候が見えてきたら、ただちに家族の全員のまえでペレさん（3）にそのことを公然と打ち明けようと決意しておりました。たしかに、わたしは臆病です。その結果どんなひどいめに会うかわかっていたのですが、まさに名譽がわたしの勇気をふるいたたせていて、心の奥底に永遠の恥をはぐくんではいるよりは、わが身相応の恥ずかしい事態に一度耐えるほうがよいと思われました。父はわたしに死か恋人かいずれかを与えるでしょう、わたしはそれを知っていました。この二者択一はわたしにはちっとも恐ろしくありませんでした。いずれにせよこのように運べば、わたしは自分のあらゆる不幸の終末に直面するのです。

あなた、これがあなたに隠そうとした秘密です。あなたはとても落ち着いていられず、やっきになって知ろうとなさいましたね。あなたのようにすぐかっとなる方がお話の相手、抑えておかなければならないわけがたくさんございました。そのうえ、あなたが遠慮なく言い寄ってみえる新しい口実を提供してはならなかったのです。とくにこんなあふない場面があるあいだは遠ざかっていただくほうがよろしいし、もしお知りになったら、こんな危険のなかにわたしを打ち棄てておくことにどうしても同意なさらなかったでしょう。よくわかっておりましたから。

悲しいことに、わたしはまたこんなに甘美な希望にも裏切られました！ 天は罪のなかで宿された目論見を斥け

す。つらいこと！ 二つの魂の苦しみを担うのは、いつだって弱いほうの魂なのです。あなたは思いきった手段を提案なさった、それはわたしを困惑の極におとしれました。わたしの一生の不幸は確実なのです、わたしに残された避けられない選択は、そこに両親の不幸を加えるか、あなたの不幸を加えるかでした。わたしはこの怖ろしい二者択一に耐えることができませんでした。人間の持つて生まれた力には限界があります。こんなあまたの動揺で精根つき果てました。わたしは生から解放されたいと願いました。天は憐れみをかけてくださったと見えたのですが、情を知らぬ死はわたしを滅ぼすべくわたしを見逃しました。あなたに会い、病は癒え、そして破滅しました。

わたしは過ちのなかに幸福を見出さなかつたのですが、もともとそういう期待はしていなかったのです。わたしは自分の心が徳のためにつくられていて、徳がなければ幸福になりえないと感じていました。弱さのゆえに屈したので、誤謬によって屈したではありません。盲目であつたという言い訳さえできないのです。なんの希望も残っていませんでした。もう不幸になるだけでした。無垢と愛とがわたしには二つながら必要なものでした。それらをもに保つことはできず、しかもあなたの錯乱を眼にして、わたしはその選択にさいしてあなたのことばかりを考え、あなたを救おうとして自分を滅ぼしました。

しかし徳を捨てることは人の考えるほど容易ではありません。徳はそれを放棄する人を長いあいだ苦しめるのでして、清純な魂を歎喜させる徳の魅力は、まだそれを愛していながらもはや享受できない邪な人間の最初の責苦となるのです。罪はあつても墮落してはいないわたしは、自分を待ちうけている悔恨を免れることができませんでした。貞潔ということは、それを失つたあとでもわたしには大事でした。わたしの恥は、人に知られないからといって、つらいことにかわりはなかつた、全世界が目撃したとしてもこれ以上には感じなかつたでしょう。壊疽えそになることを恐れる負傷者が痛みを感じて治癒の希望を抱くように、わたしは苦悩のうちに慰めを見出ししておりました。それにしてもこの恥辱はおぞましかったのです。罪を捨てずに自責の気持ばかり抑えつけようとはしましたから、歪みのない心をもちながら迷いの道に入って、しかもその迷いのなかで喜びを見出ししている人に起こることが、わ

ほどひどいもの、あなたがもつと完全な方ならわたしはこれほど愛さなかつたでしょう。わたしはあなたの心を知っていました、すぐかっとなさるのを知っていました。わたしよりも勇氣はおありだけれど忍耐は乏しくていらつしやる、わたしの心を打ちひしいでいる不幸をごらんになれば絶望なさるとわかつておりました。そんなわけで父の約束はいつも氣をつけてあなたに隠すようにいたしました。そしてお別れするときには、あなたの榮達を急じておられるエドワード卿の熱意を役立たせていただき、またあなたにもそんな氣持になつてほしいと思つて、わたしは自分の抱いてもいない希望をあなたに信じさせたのでした。それだけではありません。わたしはわたしたちを脅かしている危険を知つて、そこから免れうる唯一の予防策をとりました、そして誓約をしてわたしの自由をあたる限りあなたに預け、この約束によつてあなたには信頼を、わたしには毅然としたものをもたせようとしたのです。わたしはこの約束に背かぬ覺悟をきめ、それはあなたには安らぎを与えるはずでした。子供っぽい義務、といえはその通りなのですが、それでもわたしはけつしてこれを捨てないつもりだったのです。徳はわたしたちの心にきわめて必要なものですから、たとえ眞の徳を一度捨ててしまつても、あとからまた自分の流儀でつくりあげ、おそらくは自分自身の選択になるからでしょう、いっそう強くそれに執着するのです。

あなたが遠くへ行かれてからわたしがどれほどの苦悶を味わいましたかは申しあげずにおきましょう。なににもましてつらいのは、忘れられはしまいかという不安でした。あなたが逗留なさつた土地はわたしを身震いさせ、あなたの暮らしぶりがわたしの恐怖に輪をかけました。わたしはあなたがすでに女に大もてというだけの人になり下がっているのを見る思いがしました。この恥辱はわたしのあらゆる不幸よりもさらに残酷でした。軽蔑すべき人になつたあなたを知るよりは、不幸なあなたを知るほうがまだしもよかつたのです。あれほどの苦しみに慣れたあとでも、あなたの不面目だけは耐えられぬ苦しみでした。

わたしが安心を得ましたのは、お手紙の調子からしてわたしの心配が確實になりかけていた頃でした。ほかの人なら不安の絶頂に達したでしょうにわたしはそれで安心したのです。わたしが申しておりますのはあなたが放蕩に

られました。わたしは母となる名譽にふさわしくなかったのです。わたしの期待はついに実を結ばず、世評を犠牲にして過ちを償うことは許されませんでした。絶望してこんな目論見をいただき、あなたを危険にさらす向こうみずな逢引におさそいするのは無謀なことでしたが、わたしの狂った愛はとても甘美な口実でわたしの眼をおおっていました。わたしは願いがかなえられないのはすべてわたしが悪いのだと思っていました。そして願望で血迷ったわたしの心は、それを満たそうとする熱意を、他日それを正当なものにしようとする心づかいとばかり見ていたのです。

わたしはいつときこの望みがとげられたと思いました。この思い違いこそわたしのもろもろの哀惜のなによりも痛切な源でした。愛は自然によって願いをかなえられ、それゆえいつそう残酷に運命によって裏切られたのです。わたしの希望の最後の拠りどころが体に宿した種もろとも、どんな事故で打ち砕かれたかはあなたもお知りになりました。この不幸はちょうどわたしたちが別れておりますときに起きたのでした。まるでそのとき天が当然身に受けてしかるべきあらゆる不幸でもってわたしを圧倒しようと欲し、わたしたちを結び合わすことのできるあらゆるきずなを一度に断ち切ろうと欲したかのようでした。

あなたの出発はわたしの喜びの終わりであるとともに、わたしの間違った考えの終わるときでした。わたしは、遅すぎはしましたが、わたしを欺いてきた妄想に気づきました。無垢でない愛と希望のない願望をいただき、しかもそれを消すことができないうわたしは、自分は軽蔑すべき女になってしまったのだし、いまもそのとおりだ、自分は不幸な女であり、いつまでもそうあるべく定められていると思いました。無数の空しい後悔に責めさいなまれ、苦しく無益な反省を捨てました。もう自分自身のことを考えるに値しない女です、生涯あなたのことばかり考えることにしました。もはやあなたの名譽のほかになんか名譽はなく、あなたの幸福のうちにはか希望はなく、いまなお感動できると思えるものはただひとつ、あなたから来る感情だけでした。

愛はあなたの欠点についてわたしを盲目にはしませんでしたが、それをいとしく思わせました。愛の錯覚はそれ

こんなむこい別荘に打ちのめされて、わたしの魂にはもはや母をなくしたことを感じる力しか残っておりませんでした。うめきをあげる自然の声は愛のつぶやきをおし殺しました。これほど多くの不幸をつくりなしたものに對して、わたしは一種の嫌悪をおぼえました。ついにわたしは、わたしに不幸を招き寄せたいまわしい情熱をおし殺し、永久にあなたをあきらめようと思いました。その必要があったのです、きっと。この上また、たえず新しい涙の種を求めずとも、残された生涯、涙を流すにこと欠かぬわたしではありませんか。すべてがわたしの決意を励ますかに見えました。悲しみが魂を和らげるとすれば、深い苦悩は魂をかたくにします。死んでゆく母の思い出があなたの思い出をかき消していました。わたしたちは遠く離れていました。希望はとうにわたしを見捨てておりません。このときほどあの比類ない友が崇高で、わたしの心を全部ひとり占めしてふさわしい人だったことはありません。彼女の徳、理性、友情、やさしい愛撫が、わたしの心を純化してくれたようでした。わたしはあなたを忘れたと思い、自分が癒されたと思いました。しかし遅すぎました。わたしが消えた愛の冷たさと思ったものは、絶望のあまりの憔悴にすぎなかったのです。

氣を失って苦しまなくなった病人がより激しい苦痛によって生の感覚を取り戻すように、父からヴォルマールがまもなく戻ってくることを知らされると、わたしのあらゆる苦痛がたちまちよみがえってくるのを感じました。そのときでした、打ち克ちがたい愛がわたしに自分にはもうないと思っていた力を返してくれました。生まれてはじめてわたしは正面きって父に逆らいました。ヴォルマールさんはわたしにはなんのかわりもない方、わたしは娘のまま死ぬと心に決めております、お父さまはわたしの命は支配なさっても心は支配できません、なにをもつてしてもわたしの意志を変えることはできません、と明確に主張しました。父の怒りやわたしがどんな目に会わざるをえなかったかは申しますまい。わたしは揺るぎませんでした。臆病さが克服されるとわたしは別の極端に走っていて、父のように高圧的な調子をとらなかつたにしても、同じように決然たる態度だったのです。

父はわたしが決意を固めていて、専横なやり方では勝てぬと見てとりました。一瞬わたしは父の迫害から解放さ

引き込まれて、いち早くすすんでそれを告白なさったこと、この告白はあなたの率直さのあらゆる証拠のなかでもなによりもわたしの胸を打つものでした。わたしはあなたという方を十二分存じあげていましたから、かりにわたしがあなたにとって大事な人間でなくなっていたとしても、そのような告白をなさるのがどれほどおつらいかは察知できました。恥ずかしさに打ち克つ愛だけが、あなたにそうさせることができたのだとわかりました。こんなに誠実な心は隠れて不実はおできにならないと知りました。あなたの過ちの罪よりもそれを告白なさったいいところばかり思いうかぶのでした。そして、以前のあなたのお約束を思い出して、わたしはきれいさっぱり嫉妬から癒えました。

でもあなた、わたしはそれでとても幸福になったのではないのです。責苦がひとつ減じたかわりに、ほかの無数の責苦がたえずよみがえってくるのでした、わたしは知恵のなかにのみ見出しうる安息を心の迷いのなかに求めることがいかに無分別か、これほどよくわかったことはないのです。ずっと以前から、この世でいちばんいい母のことを思ってひそかに涙しておりました。極度の衰弱がいつとはなく母をむしばんでいたのです。わたしは自分の失墜の致命的な結果として仕方なくバビを頼りにしていたのですが、そのバビがわたしを裏切り、わたしたちの恋と過ちを母にあげました。いとこのところからお手紙を引き取ってくるとすぐに見つかりました。証拠は歴然です。その悲しみが母から病気のためにすでに衰えていた力まで奪い取りました。わたしは後悔のあまり母の足下で息絶えんばかりでした。わたしは死を与えられて当然ですが、母はそんな危険に追いやらずにわたしの恥を包み隠し、ただ嘆き悲しまれるばかりでした。あれほど手ひどく裏切ったあなたさえ、母の眼にはおぞましく映らなかったのです。わたしはあなたのお手紙が母のやさしく憐れみ深い心にもたらした結果をまのあたり見ました。ああ！ お母さまはあなたの幸福とわたしの幸福を望んでらしたのです。一度ならず母は……永久に消え去った希望を呼び戻したとてなんになりましょう。天の定めはそうなっていないかったです。母はかたくなな夫の意地をまげることのできないまま不肖の娘を残してゆく苦悶のうちに、痛ましい生涯を終えました。

掃られて最近の政変にまきこまれ、財産を失い、千載一遇の幸運で辛うじてシベリア流刑は免れたのだ、それで残ったみすばらしい財産をまとめて、かつて何人に対しても誓いを破ったことのない友人の言葉を信じて戻ってくるのだよ。さあ、わたしに命じてごらん、彼が戻ってきたときどう迎えたらいいか。こう言うのかね、あなたが裕福であったときに娘をさしあげるお約束をしましたが、無一文になられたいまでは取り消します、それに娘はあなたを望んでおりません、とね。ことわりを述べるのにこんな言い方をしないと、そう解釈するだろう。おまたちの恋を持ちだしても口実と受けとられるだろう、それともわたしに不面目がふえるだろう。そしてわたしは、おまえは墮落した娘ということになり、わたしは卑しい利害のために義務と誓いを捨て、不実の上に忘恩を重ねる背徳漢ということになる。娘よ！ 汚れない人生を汚辱のなかで終えるにはもう遅すぎる、六十年の名誉は十五分のあいだに捨てられるものではない。」

「さあよく考えるのだよ」と父は言葉をつづけました。「おまえが何を言いだそうと、所詮いまとっては時宜にかなわないのだ。羞恥心に責め立てられるような選り好みやほんの一時の若気の情火が、娘の義務や大事にいたった父の名誉に匹敵しうるものかどうか考えてみなさい。二人のうちの一方が他方のために自分の幸福を捨てるというだけのことなら、そんな喜ばしい犠牲なら、わたしの愛情はおまえと先を競うだろう。しかし、わが子よ、名譽が語るのだよ、おまえが引いている血のなかではつねに名譽が決定するのだ。」

この言葉に対してわたしに立派な返答がないではありませんでした。しかし父はその偏見のゆえにわたしの原則とはきわめて異なった原則をもっておりますから、わたしが理由を申し述べてもとても返答はひきだせませぬ、父を揺るがすことにもならなかったでしょう。そのうえ、父はわたしの行動をかなりご承知の様子、それがどこから来ているどこまで及んでいるのかわかりませんし、わたしが言いだすのをことさら避るようになるので、わたしの申し述べるべきことについてすでに覚悟を決めてられるのではないかと不安です。またそれにもまして、どうしても打ち克てない恥ずかしさに引きとめられて、父の考え方に見合っているためにいっそう確実と思われる、一

れたと思いました。しかし突然、わたしの足下に世にも峻厳な父のもろくも涙に崩れているさまを見たとき、わたしはどうなったでしょう。父はわたしが立ちあがることを許さずにわたしの膝をかき抱き、濡れた眼をわたしの眼に注ぎ、いまなおわたしのうちに聞こえる痛ましい声でこう申しました。「娘よ、不幸な父の白髪に敬意を払っておくれ。お前を体に宿した人と同じように、苦しみを抱いたまま墓場に行かせないでおくれ。ああ！ おまえは家族みんなを死なせるつもりかね。」

この衝撃をわかってください。あのようになさりよう、調子、身振り、言葉、恐ろしい考え、わたしは動転してしまつて父の腕に半ば死んだように身をあずけ、息がつまるほどすすり泣いたあとでようやく変わり果てた弱々しい声で答えることができたのです。「ああ、お父さま！ 脅迫に対してはわたしは武器をもっておりませんが、涙にはそれがありません。お父さまこそ娘を死なせるのです。」

二人ともひどく動揺していて、長いあいだもとに戻りませんでした。そのうちにわたしは父の最後の言葉を反芻し、わたしが考えているよりは多くをご存じだと思つて、それで父が承知していることを逆用しようと心に決め、命の危険を覚悟してこれまであまりにも長いあいだ引きのばしてきた告白をしようとこまえたとき、父はまるでわたしの言おうとしたことを予見してそれを恐れたかのように素早く制して、こんなふうには語るのでした。

「おまえが心の奥で良い生まれの娘にふさわしくないどんな気まぐれを育てているか、わたしは知っている。おまえの不名誉になり、わたしの命と引きかえなければけつして思いをとげられぬ恥ずべき情熱は、いまこそ義務と淑徳のために犠牲にしなければならないのだ。父の名誉とおまえの名誉がおまえに何を要請しているか一度よく耳を傾けて、自分で自分を裁きなさい。」

「ヴォルマールさんは立派な家の生まれで、その家門を支えるに足るあらゆる美点によつて秀でておられる。世間の尊敬を集めていて、じつさい尊敬されて当然の人だ。わたしの命の恩人です。彼にわたしが約束したことは、おまえも知っている。またこれも知つておいてもらわないといけないのだが、あの人は家政を整理するために国に



出て、無理にもあなたに一筆と思ったのですがもうひどく悪く、床について、これっきり回復することはあるまいと期待したのでした。その後のことはあなたもよくご存じです。わたしが軽率だったためにあなたに無謀なことをさせてしまいました。あなたはいらした、あたしはあなたを見ました、そして錯乱のあいだしょっちゃうあなたを姿が夢に現われたように、これもその夢のひとつにすぎないと思っていました。しかし、あなたは来てらして、わたしは本当にあなたを見たのだと知って、またあなたに病気が治せぬとあらば自分もいっしょにと故意に病気におりなりましたと知って、わたしはこの最後の試練に耐えることができませんでした。希望がなくなった後もこんなにやさしい愛が生きつづけているのを見ると、せいっぱい抑えてきたわたしの愛はもはや歯止めを知らず、やがてかつてないほどの熱をもってよみがえりました。自分はどうであれ愛さねばならぬと知りました。罪を負わねばならないと感じました。父にも恋人にも抗うことができない、淑徳を犠牲にしなければ愛の権利と血縁の権利を両立させることはできない、そう感じました。こうしてわたしの善良な感情はことごとく消え去りました。あらゆる能力が腐敗しました。罪はわたしの眼には怖ろしくなりました。自分の内部ですっかり別人になっていると感じました。障害によって燃えあがった情念のとどまるどころを知らない熱狂は、魂を打ちのめして、これ以上はないというほどのひどい絶望にわたしをおとしれました。わたしは徳に絶望しました。あなたのお手紙は良心の呵責をあらかじめ封じるよりはそれを目覚めさせるべきものでしたのに、わたしをすっかり迷わせてしまいました。わたしの心はひどく墮落しておりましたから、理性はあなたのおっしゃる哲学者たちの議論に対抗できないのでした。おぞましいことを考えて精神を汚したこと、たえてありませんでしたのに、そうしたことが浮かんできるのです。意志はまだ戦っておりましたが、想像力はそれを見ることに慣れてしまっていて、心の底で早くも罪をいだいでいたとは申さぬまでも、そのみが罪に抗しうるあの高潔な決意はもっておりませんでした。

とてもあとをつづける気になりません。しばらくよしましうね。あの幸福と無垢の日々を思い出してください。わたしたちをかりたてていたあんなに激しく甘美な愛の火がわたしたちのすべての感情を浄めておりました、

つの口実を使うことにしました。わたしはあなたとの約束を率直に打ち明けました。あなたに対する誓いをけつして破らないこと、なにが起ころうともあなたの同意なしには結婚しないことを明言しました。

たしかに、わたしが逡巡した結果は父を不快にさせず、それを知ってうれしく思いました。わたしの約束を激しく叱責なされたものの、なんの反論もありませんでした。名誉ということで頭がいっぱいの貴族は、生来それほど約束の信義を尊重し、その言葉をつねに神聖なものとみなすのです！　そこで父は、約束の無効をとやかく言い争っても、わたしはけつして認めないでしょうから、そんな時間つぶしはしないで、わたしにむりやりに一筆書かせ、ご自分の手紙を添えてただちに送ってしまったのです。わたしはどれほど不安な気持ちでお返事を持ったことでしょう！　あなたは鋭敏な神経をお持ちの方、もっと野放図でいらしたらとどれほど願ったかしれません！　しかし、わたしはあなたという方をよくよく存じておりましたから服従なさることは疑いをいれませんでした。課された犠牲がつけられればつらいほど、迅速にご自分にそれを強要なさるとわかっておりました。お返事が来ました。病気のあいだはわたしには隠されていました。回復しましたあとで恐れは事実となり、わたしには言い逃れるすべがなくなりました。少なくとも父はもうどんな口実も受け入れぬと宣言したのです。そして、まえにわたしに恐ろしい言葉を語ってわたしの意志を動かす力を得ておりました父は、その力を利用して、ヴォルマルさんにわたしとの結婚を思いとどまらせるようなことは何ひとつ言わないと誓わせたのでした。父はつけ加えて、そんなことをすればわれわれのあいだでしめし合わせた芝居と思われるだろう、それにどんな犠牲があろうとこの結婚は成立させねばならぬ、そうでなければわたしは苦悩のために死なねばならない、と語るのです。

あなたはご存じですね、わたしの健康は疲労や雨風に打たれたりすることにはとても丈夫なのですが、情念の乱れには耐えられないのです。わたしの体の病も魂の病も、すべての病の根源はあまりにも感じやすい心のなかにあるのです。長いあいだの心痛がわたしの血を腐敗させたのか、それとも自然がこの期を利して禍をもたらす酵母から血を浄化しようとしたものか、父と話を終えるときにはたいそう気分が悪くなっていました。父の部屋から

たちに永久に悪徳を嫌悪させないのかしら。どれほどの世紀をついやしてこの不思議な変化が生じたというのでしょうか。あのようにすばらしい思い出を破壊するのに、まことの幸福の感情を一度味わうことのできた者にそれを喪失させるのに、どれほど長い時間がかかっているというのでしょうか。ああ、最初の乱れはつらく緩やかなのに、その後はすべてなんと速やかで容易なんでしょう！ 情火の魔力よ！ このようにしておまえは理性を惑わし、知恵を欺き、人がそれと気づかぬうちに本性を変えてしまうのだ。生涯のただの一瞬迷いにおち、正しい道からただの一步踏みはずすと、たちまち避けられない傾斜がわたしたちを引きずり、破滅させます。ついに深淵に落ち、そして徳のために生まれた心をもちながら、罪におおわれたわが身を知り慄然として目覚めるのです。でもあなた、ヴェールをおろしましょうね。ヴェールが隠している断崖を、そこに近寄ることを避けようとして、あえて見る必要がありませんか。わたしの話にもどります。

ヴォルマールが着きました。わたしの面立ちが変わっていてもたじろぎませんでした。父はわたしに息つく暇を与えませんでした。母の喪はまもなく終わろうとしておりましたが、わたしの苦しみは時を経ても変わらぬままでした。わたしはそのどちらを持ちだしても、約束を逃げることができせん。実行しなければならぬのでした。あなたから、わたし自身から、わたしを永久に取りあげることになるその日は、わたしには生涯の最後の日のように思えました。わたしは自分の埋葬の準備を見ても、わたしの結婚の準備ほどには恐怖を感じなかつたでしょう。運命の時が近づくにつれて、自分の心から最初の愛情を抜き去ることがますますできないのでした。ついにわたしは無益な戦いに倦み疲れました。これから別の人に永遠の貞節を誓おうというそのときに、わたしの心はまだあなたに永遠の愛を誓っていたのでして、わたしはまるでそれが捧げられる聖祭を汚す不浄の生贄のようにして、聖堂に連れてゆかれたのでした。

教会に着き、なかに入りますと、わたしはかつて経験したことのない一種の感動をおぼえました。簡素でおこなかな、ここで人々に仕えられているお方の威厳にみちたこの場所で、なにかは知らぬある怖れがわたしの魂を捉え

神聖な熱情がわたしたちに羞恥<sup>(3)</sup>の心をいっそう大事なものに、廉潔をいっそう愛すべきものにしておりました、欲望までもが、わたしたちがそれに打ち克って、それで二人が互いにいっそう相ふさわしい人間になるためにのみ生まれてくるかのようでした、そんな日々。わたしたちのはじめのころの手紙を読み返してください。あまりに短かくてほんの少ししか味わえなかったあのころのことを考えてください、わたしたちの眼には愛が徳のあらゆる魅力に飾られておりましたころ、たがいのあいだに徳が認めない関係をつくるには、わたしたちあまりにも愛し合っておりましたあのころのこと。

わたしたちはどんなだったでしょう、それがどうなってしまったことか。二人のやさしい恋人たちは苛酷な沈黙を守ってまる一年すごしました。溜息も洩れないようにしました。でも二人の心は理解しあっておりました。苦しんでいるつもりでしたが、幸福でした。理解し合ったがために互いに語り合いました。しかし、自分に打ち克ちうること、おたがいにその名譽ある証人になることに満足して、やはり厳しい慎みのうちにさらに一年すごしました。たがいに自分の苦しみを訴えておりました、そして幸福でした。この長い闘いに耐えきれなくなりました。一瞬の弱さが二人を迷わせました。快樂のうちに己れを忘れました。しかし、純潔ではなくなっても、少なくとも二人は忠実でした。少なくとも天と自然は彼らが結んだきずなを許しておりました。少なくとも徳は彼らにとって変わることなく貴重でありました。なおも徳を愛し、徳を敬うことができました。彼らは墮落したというよりは低下したのでした。幸福たるべき資格は減じましたが、それでもまだ幸福でした。

あれほど純粹な焰に燃え、あれほど貞潔の価値を感じていたやさしい恋人たちは、いまなにを思っているのでしょうか。それを知れば彼らのことを嘆かずにおれますまい。いまや罪に身をゆだねているのです。夫婦のベッドを汚すことを考えてももう恐れを感じないのです……彼らは姦通をもくろんでいるのです！ いったい、同じ人間なのかしら、魂は変わらなかったのかしら。彼らの心のなかでは邪な人にはけっして見えないあの魅惑の影像が輝いておりましたのに、どうして消え去ったりすることがありうるのかしら。徳の魅力はどうして一度それを知った者

わたしにはなかったとしても、あなた方に見習ってそれにふさわしくなりましょう。こんな気持がわたしの希望と勇気をよみがえらせました。わたしはこれから結ぶ神聖なきずなを、魂をきよめ魂をそのすべての義務に立ち返らせる新しい状態と考えました。牧師が夫として受け入れる人に完全な服従と貞節を約束しますかと問うたとき、わたしの口と心はそれを約束しました。わたしは死ぬまでそれを守ります。

家に帰ってわたしは一時間ばかりの孤独と内省の時を切望しました。容易ではありませんでしたが、もつことができました。この時を善用しようと思ははやるものの、状態が変わったために一時の動揺を経験したにすぎないのではないか、慎みのない娘であったように今またわたしは妻たるにふさわしくないのではないかと恐れる気持が強くて、最初のうちはいやいやながら自分を検討したのでした。この試問は確実でしたが危険でした。わたしはまずあなたのことを考えました。愛のいかなる思い出もわたしがいま結んだおごそかな契約を破りはしなかった、と、自分でそう認めました。どうみても思い出して当然なのに、どんな奇蹟がおこってあなたの執拗な面影がわたしをあなたに長いあいだ平静にしておいてくれたのか、理解できませんでした。無関心とか忘れているとかいうのであれば、それはあまりにも不自然でどうも長い長つづきするとは思えない偽りの状態、信用しなかつたでしょう。でもそんな錯覚を恐れる必要はほとんどなかったのです。わたしは以前と同じように、いえきつとこれまでになかったくらいあなたを愛していると感じましたが、そう感じて顔を赤らめないのです。わたしがほかの人の妻であることを忘れないでも、あなたのことを考えることができるようになりました。あなたがわたしにどれほどいとしい方かと思うと、心は感動するのですが、良心と官能は平静でした。そしてこの時から、わたしは本当に変わったのだと知ったのです。そのときなんと清らかな喜びの奔流がわたしの魂を滲したことでしよう！ あれほど長いあいだ消えておりましたのに、なんとという平和な感情がもどってきて恥辱のために生気を失っていたこの心をよみがえらせ、わたしの全身全霊に新しい清朗さをみなぎらせてくれたことでしよう。わたしは自分が再生する思いでした、別の人生をまた始める思いでした。甘美な心慰める徳よ、そなたのためにわたしはまた人生を生き始めるのです。

ました。突然の恐怖がわたしをおのかせました。体が震えいまにも卒倒しそうになって、やっとのことで説教壇の下まで身を引きずってゆきました。式のあいだ回復するどころか、動揺はつるばかりで、それでもまわりの物は眼に入ったのですが、わたしはその眼にうつる物におびえるのでした。建物の薄暗い明かり、見守る人々の深い沈黙、その控え目な、思いに沈んだ物腰、なみいる親戚縁者、尊敬されている父のいかめしい様子、すべてがこれから執り行なわれることに莊嚴のさまを与え、それはわたしに注意と尊敬をうながし、偽りの誓約を考えるだけでも身震いするようでした。聖なる礼拝式を重々しく告げる牧師のうちに、摂理の道具を見、神の声を聞く思いがしました。聖書の言葉にあれほど強く述べられている結婚の純潔、尊嚴、神聖、人類の幸福に、秩序に、平和に、存続にまことに重要な、清らかで崇高な結婚の義務、義務として果たすだけでもまことに甘美な義務、こうしたことすべてがわたしにきわめて深い印象を与え、わたしは内面に突然の変革を感じたように思いました。未知のある力が突如わたしの感情の無秩序を改め、義務と人間本性の掟にしたがって感情を立て直してくれたように思いました。わたしは心のなかでこう申しました、すべてを見そなわす永遠の眼がいまわたしの心の奥底を読んでおられる。わたしの隠された意志とわたしが口にする返答をくらべていらっしゃる。天と地はわたしが結ぶ神聖な契約の証人であり、またそれを守るわたしの忠誠の証人にもなるであろう。だれであれあらゆる法のなかで第一位の法をあえて犯す者に、人間のあいだのいかなる法が尊重できようか。

たまたまドルブ夫妻に眼を向けますと、二人は並んで、眼をうるませてじっとわたしを見つめていらっしゃる、わたしはほかの何にもまして強い感動をうけました。愛すべき有徳な夫妻、愛を知ること少ないからといって、あなた方の結びつきは弱いでしょうか。義務と誠意があなた方を結び合せています。あなた方はやさしい友だちどうし、忠実な夫と妻、魂を焼きつくすあの貪欲な火に燃えていなくとも、純粹で甘美な感情、魂をやしない、知恵に認められ理性に導かれた感情によって愛し合っているのです。それゆえいっそう堅固に幸福なのです。ああ！わたしもそのようなきずなのなかで、それと同じ無垢を回復し、同じ幸福を得たいもの。あなた方のような資格が

敬と愛情を寄せていらっしやる夫の庇護のもとに、どなたがわたしを置いてくださったのでしょうか。いまなお貞潔な女性という名にあとがれをもつことを許してください。その名にふさわしくなろうとする勇気を返してください。わたしたのは、どなたでしようか。わたしはそのお方を見ます、感じます。闇のなかを導いてくださった救いの御手は、わたしの眼から迷妄のヴェールを取りあげて、わたしの意に反してわたしを自分自身に立ち帰らせてくださる御手です。わたしの心の底でささやくことをやめたことのないひそかな声が、わたしがまさに滅びんとした時にいっそう力を得て高まり、鳴りひびきます。いっさいの真理の創造主は、わたしが卑しい偽誓で罪を負って御前から去ることを許したまわず、悔恨を与えて罪を防ぎたい、身を投じようとしていた深淵を示してください。したのでした。虫を這わしめ天体を運行させたまう永遠の神よ、あなたは御業のうちのいとも小さきものまでも御眼にかけてくださるのです！ 御心によって愛しました善に、またわたしを呼び戻してください。ただあなたによってのみ、あなたに捧げてふさわしいものとなります。この尊崇、なにとぞ御心によりて浄められましたこの心からお受けくださいませ！

自分が救い出された危険と、自分に戻ってきたと思われる名譽と安全の状態を痛切に意識して胸いっぱいになり、たちまちわたしは地にひれ伏し、懇願する両の手を天にさしあげ、天に座したまう方、わたしたちにお与えくださる自由をわたし自身の手を用いて御意のままにあるいは支えあるいは打ち壊したまうお方に加護を祈りました。わたしは申しあげました。「わたしはあなたの欲したまう、あなたのみがその根源であられる善を欲しました。わたしはお与えくださった夫を愛したく思います。忠実でありたいと思います。なぜなら、それは家庭を結び、全社会を結ぶ第一の義務でございますから。わたしは貞潔でありたいと思います。それはいっさいの徳をはぐくむ第一の徳でございますから、わたしはあなたの定められた自然の秩序に、またあなたから与えられる理性の規範にかかわるものすべてを欲します。わたしはあなたの守護のもとに、わたしは願望をあなたの御手にゆだねます。わたしはすべての行動を、あなたのご意志にはかならぬわたしは意志に一致させてくださいませ

そなたこそがわたしに生を大切に思わせてくださるもの、そなたにこそわたしはこの生をささげましょう。そなたを捨てることがどれほどつらいか骨身にしましたわたしは、二度とそなたを捨てませぬ!

このように大きな、急速な、予期せぬ変化に陶然として、わたしは前日のわが身の状態に思いをめぐらせました。己れを忘れたために追ひこまれていた見下げはてた墮落に、最初に迷いにおちて以来駆けぬけてきたあらゆる危険に、わたしは慄然としました。なんとという幸運な変革がわたしを誘惑してきた罪の恐ろしさを示し、わたしのうちに思慮への愛をよみがえらせてくれたことでしょう。わたしにとってあれほど貴重であった名譽にもまして、愛に対してわたしが忠実であったのは、なんとというまれな幸福のたまものでしょう。あなたの心変わりか、わたしの心変わりによって、わたしが新しい愛情に流れてゆかなかつたのは、なんとという運命の恵みでしょう。最初の恋人に抵抗をすでに打ち破られており、羞恥心も欲望に服することに慣らされているとすれば、別の恋人にそれをどうして押し立てることができましたでしょう。愛が消えたとき、その愛の権利をはたしてどれくらい尊重することができたでしょうか。わたしがまだ徳の権威の支配下におりましたとき、それをどこまで重んじることができたかと考えるにつけても、疑わざるをえないのです。この世であなた一人しか愛さないという確信をわたしはどこから得ておりましたのでしょうか。永遠に変わらぬ愛を誓い、そして心移すことが天意にかなうたびごとに無邪気に誓いに背く恋人たちがみんな信じている、あの内面の感情しかないではありませんか。そんなふうにして一つの敗北はまた一つの敗北を準備したでしょう。悪徳の習慣はわたしの眼から悪徳の恐ろしさを消し去ったでしょう。不名誉から汚辱へと引きずられながら、踏みとどまる足場もないままに、だまされた恋する女から破滅した娘にいたり、女性の恥となり、家族を絶望におとしいれるところでした。わたしの最初の過ちのごく自然な結果におちこまないように、いったいどなたが救ってくださいたのでしょうか。最初の一步を踏みだしたあとでどなたが引きとめてくださったのでしょうか。わたしの評判と、わたしにとって大事な方たちの敬意を、どなたが守ってくださいたのでしょうか。有徳な、賢明な、性格からいっても、そしてその容姿さえ愛すべき、わたしにもつたいないような尊



ればよいのでしよう。わたしは秩序を考察することによって徳の美をひきだし、一般に共通する効用から徳の善をひきだします。しかし、それらがすべてわたし個人の利益に反するならばどうすればいいでしょう。わたし以外の人々を犠牲にして成り立つわたしの幸福、わたしの幸福を犠牲にして成り立つ他者の幸福、本当のところそのいずれがわたしにとって重要なのでしょうか。もし恥辱や懲罪がこわいから自分の利益のために悪を働かないのだとすれば、こっそり悪事をすればいいのです。徳はもはやわたしに言うべきことは何もないのです。かりに罪の現場をおさえられたら、スパルタがそうでしたように、罰せられるのは罪ではなくて不手際なのです。要するに、美の性質と美に対する愛が自然によってわたしの魂の奥に刻みこまれていきますならば、わたしは美が歪められないかぎり自分の規範をもっていることになりましょう。しかし、どうすればこの内面の肖像をいつも確実に保っていけるでしょうか。感知しうる存在のなかには、これをなぞらせることのできる手本がないのです。無秩序な感情は人の意志を損なうように判断をも損なうこと、良心はそれぞれの世紀、それぞれの国民、それぞれの個人において、先入見の不安定や多様性にしたがって知らず知らず変質し、修正を加えられることはだれもが知るところではありませんまいか。

わたしの立派な、賢明な友よ、永遠の存在を崇めなさいませ。そうすればただの一吹きで、空虚な仮象しかもたず、不動の真理のまえでは影のように逃げ去ってゆく、あの頭でつくりあげた亡霊たちは消え失せるでしょう。実在するお方によらずにはなにも存在しません。そのお方が正義に目的を、徳に根拠を与え、その方の意になうために用いられるこの短い生に価値を与えたまうのです。そのお方が、罪人たちには、お前たちの秘密の罪は見られたのだと絶え間なく叫びたまひ、忘れられた義人には、私の徳行には証人がおられると言わしめたまうのです。そのお方こそ、その不変の実体こそが、わたしたちが自分自身のうちにその像をもっておられます完全なるものまこととの典型なのです。わたしたちの情念がたとえこの像を歪めましても、無限の本質と結ばれているそのすべての特徴はいつでも理性に現われてくるのでして、欺瞞や誤謬が変質させたものを理性がもとに戻す助けをします。

せ、そして一時の迷いがわたしの全生涯にわたる選択に勝利しますことをもはやお許しになりませぬように。」

わたしがはじめてまことの熱意をこめてお祈りいたしましたこの短い祈りを終えますと、自分の決意が十分に堅固なを感じました。この決意に従うことがとても容易で甘美に思えましたから、わたしが自分の心に抗するために必要な力、わたし自身のなかには見出しえない力を今後どこに求めればよいかはつきりわかりました。わたしはこのただ一つの発見によって新しい自信を得ました、そして長いあいだわたしにそれを見つけさせなかった哀れな盲目が残念でした。わたしはまったくの無宗教であったわけでは決してありません。しかし、心に触れもせず良心を安心させる外形的なわざとらしい宗教をもつくらないなら、形式のなかにおさまるくらいなら、残りの時間はもう神のことを考えないでいいように一定時間だけきちんと神を信じておくくらいなら、まだしも完全に宗教をもたないほうがおそらくよろしいでしょう。わたしは礼拝の儀式はきちんと守っていましたが、じっさいに生きてゆく糧となるものは何ひとつひきだせませんでした。わたしは自分が生まれつき善良であると感じていて、そういう心の傾きに身をゆだねておりました。反省することを好み、自分の理性を信用していました。福音書の精神と世間のそれとを、信仰と行ないとを一致させることができなかつたわたしは、自分の空虚な知恵を満足させる妥協策をとっておりました。信仰のための格率と行動のための格率とを別にしておりました。ある場所でもたこともほかの場所で忘れていました、教会では信心家、家では哲学者でした。ああ！ わたしはどこにいても何ものでもなかつたのです。わたしの祈りはたんなる言葉にすぎず、推論は詭弁でした。わたしを破滅させようとして導いていた鬼火の偽りの明かりだけを光明と違って追いかけていたのです。

これまでわたしに欠けていたこの内面の原理が、わたしを間違つたほうに誘導してきた人々に対する軽蔑をどれほどわたしに抱かせたか、とても申しあげることできません。その人たちの第一の理由はなんであつたのか、どんな根拠に立脚していたのか、いったいどうなのでしょう。幸福な本能がわたしを善にいさないます。激しい情熱が燃え上がります。この情熱はその同じ本能のなかに根源をもっています、ではわたしは情熱を減ぼすには何をす

夫婦のどちらかが、自分のほうはまずまず自由の身であつてだれに信義を欠くわけでもないのだから罪はない、とても考えるのでしょうか。とんでもない間違いです。結婚の純潔を汚さないということは、夫と妻のあいだで意味をもつだけではなく、すべての人間の共通の問題なのです。夫と妻が正式なきずなによって結ばれるそのたびごとに、そこにはこの神聖なきずなを尊敬し、その二人における夫婦の契りを尊ぶ全人類の暗黙の誓約が介在しているのです。そして、このことが内密の結婚に反対する強力な理由のようにわたしには思われます。なぜならそれはこの契りのしるしをなんら見せませんから、罪のない心を姦通の焰に燃える危険にさらすのです。立ち会う人々はその面前でとり行なわれた約定のいわば保証人であつて、貞潔な女の名誉は心正しい人たちの特別の保護下におかれることになるかと申し立てよう。それゆえこの女性を墮落させる者はだれであれ罪を犯しているのです。第一に、その女性に罪を犯させるがゆえに、罪を犯させる者はかならず自分もその罪を背負つておりますから。次に、その者は自分でも直接罪を犯しております。なぜならその者は、それなくしては何ひとつ人事の正当な秩序のなかで存続しえない結婚の「公」にして神聖な誓いを破るのですから。

罪は隠されている、それゆえだれにとつてもなんの害悪も生じない、と彼らは言います。もしこの哲学者たちが神の存在と靈魂の不滅を信じておりましたら、彼らはまさきき侮辱をうけられたお方、唯一まことの審判者であられるお方を証人としてもつ罪を、隠された罪と呼ぶことができましょうか。すべての人の眼から免れても、いちばん隠しておかねばならないお方の眼から免れることはできない秘密とは、なんと奇妙な秘密ですこと！ たとえ彼らが神の實在を認めないとしても、どうしてだれにも悪いことをしていないと主張できましょうか。父親にとつて、血を分けない相続人をもつこと、おそらくは余分な子である者まで背負うこと、父としての情を感じていない自分の不名譽のあかしである子供たちに財産を分けてやらねばならないことがどうでもよいことだと、どうして証明できるでしょうか。この理屈屋たちが唯物論者であるとします、それでもますます確かな根拠をもって、人間本性の優しい声によって彼らに対抗することができるのであります。それはすべての人の心の底で傲慢な哲学に抗議してい

これらの識別はわたしにはやさしいことのように見えます。常識があれば十分です。この本質という觀念から分かちえないものすべてが、神です。その他のことはすべて人間の所業です。この神々しい典型を觀照することによって魂は淨化されて上昇し、みずからの低劣な性癖を輕蔑し卑しい傾向を克服することを学ぶのです。あのまろもろの崇高な真理にみちた心は、人間のちっぽけな情念を拒みます。あの限りない偉大さは、そうした心に人間の傲慢を嫌悪させます。瞑想の魅力は、心を地上の欲望から引き離します。そのような心が専念する無限の存在が、もしかりに存在しないとしても、たえずこれに専念してよりいっそう自己を支配する者となり、より強く、より幸福に、より賢明になることは、やはりよいこととごさいましょう。

ほかに拠り所をもたない理性だけの理性の空しい詭弁、その顯著な例をあげましょうか。あなたのおっしゃる哲学者、罪のご立派な擁護者、すでに墮落した心しか魅惑したことのないこの人たちの言説を冷靜に考えてみましょう。これらの危険な理屈屋たちは、もっとも神聖でもっとも厳肅な誓約をぶしつけに攻撃して、まるで約定の信頼の上に成り立っている全人類社会を一挙に壊滅させようと決意したかのようにありませんか。隠れて行なわれる姦通には罪はないとするこの人たちの論法を、まあ見てください！ それはなんの害もたらさない、知らないのだから夫にとってさえそうだ、と彼らは申します。まるでいつまでも夫は知らないと確信がもてるかのようにです。まるで偽誓と不実は、それが他人に害を及ぼさなければ認めてもよいかのようにです。罪は罪を犯す人々を苦しめる、そのことだけでは罪を憎むに足らないかのようにです。なんということでしょう！信義を欠き、もっとも不可侵な誓いと契約の力をあたうるかぎり破壊することが、悪ではないのでしょうか。悪賢い嘘つき人間になろうとしてせいっぱい努めることが悪ではないのでしょうか。他人の不幸と死を、しかもいちばん愛さねばならない人、ともに生きることが誓った人の死を願望させるような関係をつくるのが、悪ではないのでしょうか。いつも無数の罪を招来するような状態が悪ではないのでしょうか。たとえなにか善い行ないでも、それがこれほど多くの悪事をもたらすとあれば、それだけでも悪そのものでありましょう。

となく満足させようとして注意を張りめぐらせるなかで、子供の教育はどうなるのでしょうか。家の平和や上に立つ者たちのまとまりはどうなるのでしょうか。なんですって！ これをもつてしても夫は被害を受けていないといえましようか。ではいったい夫が受けてしかるべき心の埋め合わせは、だれがしますのでしょうか。女性を尊敬する気持ちをだれが夫にもどしてあげるのでしょうか。だれが安息と自信を与えるのでしょうか。きわめてもつともな疑念をだれが癒すのでしょうか。父親がわが子を抱いて肉身の感情にみだされるように、だれがしてあげるのでしょうか。

姦通や不貞が家族と家族のあいだに関係とやらをつくるとか言われておりますが、こんなことはまじめな道理と申しますよりはばかげた乱暴な冗談ごと、軽蔑と憤慨で答えるほかにしようのないものでございます。裏切り、不和、戦い、殺人、毒殺、いつのときもあの無秩序のために地上はこうしたこととおおわれてきたのでして、罪によってつくられる愛情から人々の休息や結合になにが期待できるか、これによって十分に明らかなのです。この卑しく軽蔑すべき交わりからなんらかの社会的な関係が生じるとしましても、それは強盗の社会に似たようなもの、正当な社会を確保するためには破壊し、根絶しなければなりません。

わたしはあなたと穏やかに話し合うために、こうした主張に思わず憤激をおぼえてもそれを一時抑えるようにしてまいりました。狂気の沙汰と思えば思うほど、あえてこれに反駁しなければならぬのです。おそらくはあまり嫌悪をおぼえずに耳を傾けた、そんな自分に恥を知らせるために。これらの主張が健全な理性の検討にとても耐えないこと、あなたもおわかりでございます。しかしこの健全な理性は、その源泉であられるお方のなか以外のどこに求めることができましょう。そして人を導くために与えられたこの神々しい松明を、人を滅ぼすために用いるような人々たちを、どう考えればよいのでしょうか。言葉だけの哲学を信用しないようにしましょう。あらゆる徳の根をほり崩し、あらゆる悪徳をひたすらに正当化してみずからがそのすべてをもつことを許す、偽りの徳を信用しないようにいたしましょう。善なるものを見出す最良の方法はそれを真剣に求めることであって、こうして善を求めるならばまもなくいつさいの善の創造主にまでさかのぼって行かざるえないのです。これが自分の理性と

る声、正当な理由をもってしてはけっして攻撃されたことのない声です。じっさい、肉体のみが思想を生み、感情がもつばら器官にのみ依存しているとしますと、同じ血でつくられた二つの存在のあいだにはいっそう緊密な類似があるはずであり、いっそう強い相互の愛着があるはずであり、その二人は顔が似ているように魂も似ているはずではありませんか。この似ているということが互いに愛し合う大きな理由なのです。

あなたのお考えはいかがです、この自然な結合を外部の血によって壊したり乱したりすること、家族の全構成員をたがいに結び合わせるべき相互の愛情を根源から腐蝕させることは、なんら悪いことではないのでしょうか。実直な人で、里子に出しているあいだに他人の子と入れ変わるのをいやがらぬ人がはたしていますか。これとくらべて母の胎内で子供を変えるのは、罪が軽いでしょうか。

とりわけ女性のことを考えてみますに、彼らがなんの害もないと称しておりますこのふしだらのうちに、どれほど多くの害悪が認められますでしょう！ それがたとえ罪ある女の墮落というだけのことであっても、その女は名誉を失うことによってやがてあらゆる徳を奪い取られるのです！ 秘密なるがゆえに密通も正当化できると彼らが考えましようとも、優しい夫から見れば、確実すぎるくらい確実な手がかりがどれほどあることでしょうか。たとえそれが、もう妻から愛されていないことを示しているだけであっても。妻はとってつけた心づくしで冷淡さを証明する以上のなにができませんか。見せかけの愛撫でもって愛の眼をだまそうというのでしょうか。愛する人のそばにいて、手では抱擁されながら心でいやがられていると感じる、なんという責苦でしょう。慎重な配慮をしても運命によってしょっちゅう欺かれるものですが、かりに好運に助けられたとします。また妻がみずから称している無実やほかの人間の平穏を、もろもろの用心、天が好んでその裏をかく用心にゆだねてしまうことの無謀さについて、さしあたりこれを問題にしないことにします。それにしても不義の交わりをおおい隠し、天を欺き、召使たちを墮落させ、世間をだますために、どれほどの偽り、どれほどの嘘、どれほどのべてんを必要とすることでしょう！ 加担者にとってはなんたる破廉恥！ 子供たちにとってなんとという模範！ 罪ある情火を罰せられるこ

かし、人間共通の父を知りこれに仕える者は、自分により高い目的があると信じます。それを果たす意欲が熱意をかきたて、自分の性癖よりもずっと確実な規準にしたがって、苦しくとも善を行ない、みずからの心の欲望を義務の掟のために犠牲にすることができなのです。これが、あなた、わたしたち二人がともに運命づけられておりますヒロイックな犠牲です。わたしたちを結びつけておりました愛は、わたしたちの生の魅力をつくってくれましたことでしょう。愛は希望が失せてもなおもつづきました。時間も距離も、ものともしませんでした。あらゆる試練に耐えました。これほど完全な感情はおのずと減びるというはずがありません。それはただ徳のためにのみ犠牲に捧げてしかるべきものでした。

さらに申します。わたしたちのあいだのすべてが変わりました。どうしてもあなたのお変わりにならねばなりません。ジュリ・ド・ヴォルマールはもう以前のあなたのジュリではありません。この女へのお気持を転換なさること、避けられないことでございます。この変化をもって徳と悪徳のいずれに榮あらしめるか、あなたにはこの選びのみが残されているのです。ある人が書きましたこういう文章がわたしの記憶にございます、あなたも否定なさいませまい。こうおっしゃいました。「誠実さが愛を見捨てると、愛はその最大の魅力を失います。愛の価値をすっかり感じるためには、心がそこに満足を見出し、愛する対象を高めることによって自分を高めるのでなければなりません。完成という観念を取り去ってごらんなさい、それは感激をも取り去ることになるのです。尊敬を取り去ってごらんなさい、愛はもはや何ものでもないのです。みずからの名譽を辱める男をどうして女性が尊敬できませうか。男もまた卑劣な誘惑者に身をゆだねることを恐れない女をどうして尊敬できるでしょうか。こうして、彼らはまもなくたがい軽蔑するようになります。愛は、この天上の感情は、もはや二人にとって恥ずべき関係にすぎなくなりました。彼らは名譽を失い、至福を見出すことなく終わるでしょう。」これがわたしたちの教訓です、あなた、これはあなたがお命じになったのですよ。このお手紙が書かれた幸福な時期ほど、わたしたちの心が喜ばしく愛し合っていたことがありましようか、誠実さがわたしたちの心にこれほど大事だったことがありましようか。


感情を矯正しようとして、わたしは、  
どるおつもりになれば、わたし以上におやりになるであろうことです。あなたが宗教の偉大な観念でしばしばわたしの精神をやしなってくださったことを思い出すと、心が慰みます。あなたの心はわたしに対して何ひとつ隠していらっしやらなかったから、別の考えをお持ちでしたらあんなふうにはお話しにならないでしょう。ああした会話はわたしたちにとって魅力があったときえ思えます。至高の存在がおわしますことは、わたしたちには決して邪魔なことではなかった。恐怖よりも希望を与えてくれることでした。それにおびえるのは悪人の魂だけです。わたしはそれがお方がわたしたちの対話の証人になってくださることを愛し、そのみもとまでいっしょに昇ってゆくことを喜びとしておりました。ときには恥ずかしさに打ちひしがれることもありましたが、わたしたちは自分たちの弱さを嘆きながら、少なくともあのお方はわたしたちの心の底をごらんになっている、と言ったものでした。すると、前よりもいっそう平静になるのでした。

この安心がわたしたちを迷わしたのであるならば、それが抱って立つ根源にまで自分を引き戻さなければなりません。自分自身とけっして一致しえず、行為のための規範と意見のための規範がそれぞれ別個であって、肉体がなにかのように思考し、魂がないかのように行動し、全生涯のうちに行なうことの何ひとつとして全体としての自己に適合させることができない、これではまさに人間として見下げ果てたことではないでしょうか。わたしは、わたしは、わたしたちの以前の格率をもっておりましたら、それを空しい思弁にとどめないかぎり大そう強いと思います。弱さは人間につきものです。人間をつくりたもうた神はきつと人の弱さをお許しになりました。しかし、罪は悪人のものにして、いっさいの正義の創造主のままで罰せられずにはすみません。不信の者も、といつてもよい人間として生まれついた者のことですが、自分の愛する徳には身をささげます。不信者は好みのままに善を行なうのであって、選択して行なうではありません。彼の欲望がすべて正しいものであれば、強制されなくてもそれに従います。が、それが正しくなくても、やはり同じように従います。さし控える理由がありませんから。し



かのことは神さまだけがこれをなさったのです。わたしの考えますに、いちど墮落した魂は、なにか突然の変革、運命や境遇のなにか急激な変化が突如として魂の關係を変え、激しい動転によって魂がすっかりした土台を見出すのを助けなにかぎり、永久に墮落したままで、ひとりではもはや善に立ち返らないのです。この全面的な転倒のなかで、魂がその習慣をすべて断ち切れ、その情念をすべて改変されると、ときとして人はみずからの本来の性質を取り戻し、いましがた自然の手から出たばかりの新しい存在のようになることがあります。そうなるも以前の低劣さの記憶が再度の転落をふせぐ予防剤になることができず。昨日は卑しく弱かったのに、今日は強く高邁になります。これほど異なった二つの状態において自分をこんな近くに近くからじつと眺めますと、自分が浮上した状態の価値がさらによく感じられ、そこから落ちないようにならなう注意するようになります。わたしの結婚は、あなたにご説明しようと努めておりますこのことに似た何かをわたしに経験させました。あれほど恐れていたのきずなは、それよりもはるかに恐るべき隸属からわたしを解放しました。そして夫は、わたしを自分自身に立ち戻らせたためにいっそう貴重な人となるのです。

あなたとわたしはあまりにもしつかりと結ばれていますから、たとえその性質を変えたからとて、わたしたちの結びつきはこわれません。あなたはやさしい恋人を失っても、忠実な友を得られるのです。それに、わたしたちが幻想をいだいておりましたころでも、こういうことを申しあげることがあるいはできたかもしれないのですが、いまわたしにはこの変化があなたにとって損失であろうとは思えないのです。あなたにお願いいたします、わたしと同様これをご利用になって、いっそう善良で賢明な人におなりになり、キリスト教の道徳によって哲学の教訓を淨化なさいますように。わたしはあなたも幸福におなりにならないかぎりけつして幸福になりません。そして徳なくして幸福のないこと、かつてないほどに感じております。あなたが本當にわたしを愛していらっしやるなら、わたしに与えてくださいませ、わたしたちの心が迷いるときに一致しておりましたのと同じく善に立ち帰りますときに一致するのを見ろという、その甘美な慰めを。

思ってもみてくださいな、魂を魅了するも、な感激を犠牲にして罪深い情火を育てていましたならば、いまわたしたちはどんなことになっておりますやら。わたしたち二人にはそれぞれ悪徳を嫌悪する気持がたいそう自然にそなわっておりますから、それはやがて互いに過ちの共犯者に拡がってゆきましよう。わたしたちはあまりに愛し合ったために憎み合いましよう。そして愛は悔恨のなかに消えておりましよう。<sup>(五)</sup>こんなだいな感情は、長くつづかせるために浄化するほうがいいのではありますまいか。この感情のなかに、せめて無垢と一致しうるものをとどめておくほうがよくはありますまいか。それは、そのなかのいちばん魅力あるものを、すっかりとどめておくことではありませんか。そうよ、わたしの立派な友、いつまでも愛しあうためにお互いに諦めなければならぬのです。ほかは全部忘れましよう、そしてわたしの魂の恋人になってくださいな。この考えはとても甘美で、いっさいのことを慰めてくれますの。

さあこれがわたしの生活の忠実な絵、わたしの心のなかに起こったことの率直な物語です。わたしはいまもなおあなたを愛しております、このことを疑ってはなりません。わたしをあなたに結びつけております感情はほんとうに愛がこもっていて、いまなお非常に激しいものですから、ほかの女の人ならきつと不安をおぼえますでしよう。わたしとしましては、あまりにも違った感情を知りましたから、この感情に警戒心をもたないのです。それは性質を変えたのだとわたしは感じておりました、少なくともその点でわたしの過去の過ちが現在の安心のもとになっているのです。厳密な礼節やこれ見よがしの徳からすれば、まだまだ多くを要求し、あなたを完全に忘れてしまうのでなければよしとしないでしょう。それはわかりますが、わたしはもっと確実な規準をもっていると信じて、それに従います。わたしはひそかに自分の良心に耳を傾けます。<sup>(六)</sup>良心はわたしになにも非難いたしておりません、そして良心はけっして真剣に問いかけてくる魂を裏切らないのです。世間に対してわたしを弁護しますにはこれだけで足りませんが、わたし自身の平穩のためならこれで十分です。この幸福な変化はどのようにして生じたのでしょうか。わたしにはわかりません。わたしにわかりますことは、わたしが痛切にそれを望んだということ。そのほ

## 手紙 一九 返事

それではあなたはもう私のジュリさんではないのですね。ああ！ そうおっしゃらないでください、立派な尊敬すべき女性よ。あなたはいつにもましてジュリでいらっしやる。全世界の人々の敬意を受けてしかるべき方です。私をはじめて真の美しさを感じしうるようになった、そのときから崇拜した方です。あなたはこのあとも、たとえ私が死んでからのちでも、生涯にわたって私の魂を魅了したまことにこの世のものならぬ面立ちの記憶が残りますものならば、私の崇拜してやまない方です。あなたの徳性をすっかりよみがえらせたあの勇氣ある努力によって、あなたはますます本来のあなたらしくなるのです。そうです。そう感じ、そう語ることがいかに苦痛であろうと、私を諦められたこの時ほどあなたが私のジュリであられたことはないのです。悲しいこと！ 私はあなたを失うことによって、あなたをふたたび見出した。しかし私は、あなたに見習おうとこころさすだけで心震え、罪ある情熱に悩んでそれに耐えることも打ち克つこともできないでいる、そんな私は、自分の考えていたような人間なのだろうか。あなたに思われる資格があったのでしょうか。私の嘆きや絶望であなたをわずらわすどんな権利があったというのでしょうか。私が、あなたを恋いしたうとは、大それたことでした！ いったい、あなたを愛するなんて、私は何者だったのか。

愚か者よ！ このうえさらに新しい屈辱を求めないでも、もう十分に味わったではないか！ 愛が消し去った優劣をどうしてまた数えたてるのか。愛は私を高めてくれました。あなたと等しくしてくれました、愛の焰が私を支えていました。私たちの心は一つに融け合って、感情はすべて共通で、私の感情はあなたの感情の偉大さを分かち持っております。その私が今ふたたびみずからの低劣のまっただなかに転落したのです！ 私の魂をはぐくんで

この長い手紙につきまして弁明の要はございませんまい。あなたがわたしにとってこれほど大事な方であれば、もっと早く終えておりましたでしょう。最後に、一つお許しを得たいことが残っております。つらい重荷が胸のしかかっているのです。わたしの過去の行ないはヴォルマールに知られておりません。しかしすべてにおいて誠実でなければあの人に対する貞節はまっとうされません。わたしはすでにいっさいを告白しようと思つたかしれません。ただあなたのことだけを考へて控えてきました。ヴォルマールの分別と節度は承知しておりますが、それにしてもお名前を出すということはあなたをまき添えにすること、承諾もただかずにそれはしたくありませんでした。あなたにこれをお願いするのはお氣に入らないでしょうか。同意してくださると思ひこんでは、あなたに対してかわたしに對してか、過信というものでしょうか。この秘密の部分のゆえに潔白になることができず、わたしは日ごとにもますますこれを苦しみ、お返事をいただくまではいつときも氣持が安まりません、お願いでございます、このこと、お考へくださいますように。

(1) リチャードソン氏は、こうした一目見て生じる、いわく言いがたい一致にもとづく愛情をたいそうばかにしている。ばかにするのはけっこうだが、それにしてもこの種の愛情はありすぎて困るくらいあるのだから、いたずらにそれを否定するよりも克服する仕方をわれわれに教えてくれるほうがよいのではなからうか。

(2) これらの關係が現実的な根柢をもたないものであつても、愛は、幻想がわれわれをしてその關係を空想せしめるかぎり持続する。

(3) 土地の牧師。

(4) これから見るに、われわれの手にない別の手紙があつたにちがいない。

(5) 神聖な熱情！ ジュリ、ああ、ジュリよ！ 恋の病からすっかり癒えたと思ひこんでいる女性としては、これはなんという言葉ですか。

(6) 第一部手紙二四を見よ。

に。第一に、あなたの極端な潔癖さが、この場合、あなたを誤らせていると思われるのでして、もっとも厳格な徳ですらいったいなにを根拠にそのような告白を要求しうるのか、私にはわからないのです。世のいかなる契約も週及力をもちえません。人は過去について義務を負うことはできず、もはや履行しえない事柄を約束することはできません。いまその人に誓いをたてても、それ以前にみずからの自由を行使したことについて、その人と約束もしていなかった貞節について、なぜ釈明しなければならぬのでしょうか。間違つてはなりません、ジュリ、あなたは夫に対して誓約に背いたのではありません、友に対してなのです。父上の専横のないうちは、天と自然が私たちを互いに結びつけておりました。あなたは別のきずなをおつくりになって、愛も、おそらくは名譽も許さぬであろう罪を犯されたのです。そしてヴォルマル氏が私から奪い取られた宝を要求する権利は、私にだけあるのです。義務がそのような告白を要請する場合がありますとすれば、慎重な女性が身を誤ることを恐れ、そうならないように用心しなければならぬ場合です。しかし、あなたのお手紙は、あなたの本当のお気持ちを、ご自分で考えていらっしやるよりも明瞭に伝えていきます。それを読みますと、遠く離れておりましたからこそ私たちは罪となる約束を嫌悪しませんでしたが、近くにありましたならば、たとえ愛のただなかに包まれていてもあなたの心はどれほどそれを憎むことか、と、私は自分自身の心のなかでそう感じたのでした。

義務と貞節がこの打ち明けを要請しないのですから、知恵と理性もこれを禁じます。なぜならそれは結婚におけるもっとも貴重なもの、夫の愛情、相互の信頼、家庭の平和を、必要もなく危険にさらすからです。あなたはそのような行動をとることについて、十分にお考えになったのですか。それでご主人にどんな結果をもたらすか確信がおありのようですが、十分にお人柄がわかつているのですか。このことがわかれば、それでもう氣遣いじみた嫉妬を燃やし、どうしようもない侮蔑を抱き、おそらくは妻の命に危害を加えるような男性が世にはどれほどいるか、知っておいでなのですか。この微妙な問題を検討するには、時と、場所と、性格とを考慮に入れなければなりません。私のおります困ではこうした打ち明けにはなんの危険もありません。夫婦の誓約をいとも軽く扱う人たちです

いた、そしてかくも長きにわたって私を欺いた甘美な希望よ、それではおまえは永久に消え去ったのか。あの人は私のものでなくなるのか。私はあの人を永久に失うのか。あの人はほかの男を幸福にするのか……おお、憤怒！ おお、地獄の責苦！……不夷なひと！ ああ！ あなたにそんなことが……。許してください、許してください、奥さま、私の激昂を憐れみたまえ。ああ！ あなたはいみじくもおっしゃいました、その女はもういない、と……その人はもういない、私が自分の心の動きをすっかり見せることのできた、あのやさしいジュリは。なんとということでしょう、私は自分が不幸だと思っていて、それで不平を言ったりできたのですね……その人も聞いてくださったのですね。私が不幸だった？……それならいまの私はどうなるのでしょうか……いえ、私はもうあなたのお顔を赤らめさせるようなことはしません、あなたのことでも、私のことでも。すべて終わりました。お互いに諦めなければなりません。お別れしなければなりません。まさに徳がそういう判決を命じ、あなたの手がそれを書きそえたのです。お互いに忘れましょう……少なくとも、私のことは、忘れてください。私はそう決心しました、誓います。もう自分のことはお話しいたしません。

もうひとつあなたのことで申しあげてもいいでしょうか、この世で私に残されている唯一の気がかり、あなたの幸福ということ、胸に抱いていてもよろしいでしょうか。あなたのお気持は説明していただきましたが、あなたの境遇についてはなにもおっしゃいませんでした。私がどのような犠牲を払いましたかは感じとっていらっしゃるはず、どうぞこの耐えがたい疑惑から私を救いだしてください。ジュリさん、あなたは幸福ですか。もしそうであるなら、絶望のなかで私に許される唯一の慰めを与えてください。もしそうでなければ、お願いします、どうかそうおっしゃってください。それで私の不幸の時は短くなりましょう。

あなたがお考えの告白のことは、熟考いたしましたですが、思えば思うほど賛同いたしかねます。あなたのおっしゃることを拒む勇気を私からいつも奪っておりましたその同じ動機が、今度は私をして頑として応じないようにさせているにちがいありません。問題はきわめて重大ですから、私の申します理由を十分に勘案してくださいませう

であっても、あなたを説得しないかもしれません。たとえそうであっても、ともかくもこれを語る者の声に耳を開きたくないでください。おお、ジュリ、いくらかでも徳をもちうる者の声を、今日あなたにささげる犠牲のゆえに、あなたからもせめてなほどうかの犠牲を期待してしかるべき者の声を、どうか聞いてくださるようには。

この手紙を終えねばなりません。あなたがもう耳にされてはならないような調子でまた語らずにはいられなくなる、それがわかりますから。ジュリ、お別れしなければなりません！ まだこんなに若いというのに、すでに幸福を断念しなければならぬのか？ おお、ふたたび帰らぬ時よ！ 永遠にすぎ去った時、絶えることなき哀惜の源よ！ 歎び、熱狂、甘美な陶醉、魅惑の時、天上の恍惚！ 私の愛、私のただ一つの愛、わが人生の誉れと魅力！ お別れだ、永久に。

手紙 二〇 ジュリより

わたしが幸福かどうかお尋ねです。この問いはわたしの胸を打ちます、そしてあなたはこの問いをお出しになったことで、わたしがお答える手助けをしてくださっているのですよ。と申しますのも、わたしはあなたがおっしゃるようには忘れることを求めるところか、あなたが愛してくださらなくなればわたしは幸福になりえないと、自分でわかっておりますから。ともあれわたしはあらゆる点で幸福でして、わたしの幸福に欠けておりますのはあなたの幸福だけでございます。まえの手紙でヴォルマールの話避けましたのは、あなたへの心づかいからでした。あなたの感じやすさはよくよく承知しておりますから、あなたの苦しみをいやますのではないかと恐れずにはいられません。でも、わたしの境遇をご心配ですから、それを左右しております人のことをお話ししなければなりません。それで話したいしますが、わたしにはその人にふさわしい仕方、その人の妻に、真実の友である女

から、約束以前の過失をそんなに重視しないのです。もっともときにはこうした告白をしなければならぬ、あなたには無縁な理由があることもあって、私の知っているあまり尊敬できない女性たちなどは、おそらくはこれと引きかえに信頼を得て、必要に応じて濫用しようというのでしょうか、ほとんど危険を冒すことなくこうした誠実さを誇りにしてきたのです。しかし、結婚の神聖がもっと尊重されるところ、この聖なるきざしなが堅固な結びつきをつくり、夫がまことの愛情を妻に寄せているところでは、夫は妻にもっと厳しい要求をします。妻の心が自分以外に愛情を抱かなかったことを欲します。自分のもたない権利を勝手に奪い取って、妻が自分に属する以前から自分だけのものであることを求め、現実の不貞を許さないようにつけて自由を行使しすぎたことも許さないのです。

よろしいでしょうか。徳高いジュリさん、効果もなければその必要もないことにむきになってはなりません。危険な秘密は包んでおくのです、明かす義務はどこにもありませんし、打ち明けるとあなたは破壊なさるかもしれない、ご主人にはなんの役にも立たないのです。そのような告白を受けるにふさわしい人ならば、それで深い悲しみを負われるでしょうし、あなたは理由なくして苦しみを与えることになるのです。また、それにふさわしくない人でしたら、その人があなたにむごい仕打ちをする口実をどうしてつくろうとなさるのです。あなたの徳は、あなたの心が受けた打撃からあなたを守ってききましたが、たえず次々と起こってくる家庭内のいざこざからもあなたを守ってくれますかどうか。禍をみずからすすんで悪化させてはなりません、それがあなたの勇気をしのぐようになつてはいけない、良心的になさった結果、やっとそこから抜けだしたその状態よりもさらに悪い状態にまたおちこまれるようなことがあってはいけませんから。知恵はあらゆる徳の基盤です。どうかお願いです、人生のこのもっとも重要な時にさいしてその声に耳を傾けてください。そしてこの宿命的な秘密がそんなにひどく重荷になるのでしたら、せめてその荷をおろすのに時間をかけて、時が、歳月が、あなたにご主人の人となりをもっと完全に知らしめるまで、ご主人の心のなかにあなたの美しさの効果に加えて、それよりもいっそう確実な、あなたの性格の魅力の効果と、それを感じとる甘美な習慣とをばくむまでお待ちなさい。これらの理由がどれほど堅固なもの



せん。しかもその情熱もたいそうむらがなく穏やかで、まるで愛することを望むかぎりにおいてのみ愛する、理性が許すかぎりにおいてのみ愛することを望む、そんなふうなのです。エドワード卿がご自分をこうと思ひこんでいらっしゃる、そのお人柄がじっさいにあの人にあってはまります。わたしたちは感情の人間、そういう自分たちを大いにすばらしいと思っておりますが、わたしの思いますにあの人のほうがその点もっとすぐれています。なぜなら、心情はさまざまな仕方であつたを欺き、いつも疑わしい原則によつてしか働きませんから。ところが理性は善であるもの以外に目的をもちません。その規則は行動の指針として確實で、明瞭で、従うに容易です。理性は、理性のためにつくられたのではない無益な思弁におちいらぬかぎり、迷わないものです。

ヴォルマールがなによりも好むことは、観察することです。人々の性格や眼にうつる行動を考察することが好きです。深い知恵とこのうえなく完全な公正さをもつて判断するのです。敵に害を加えられても、あの人はその動機と方法とをまるで無関係なことのように平静に検討するでしょう。あなたのこととどんな噂があの人のお耳に入っているのかわたしは存じませんが、大そう尊敬をこめて何度かわたしにお話ししました。わたしにはわかっています。偽ることのできない人です。こうした話の最中にあの人がわたしを観察している、ときどきそう思うのでした。しかし、自分で気づいたように思つても、それは不安な良心のひそかな叱責にすぎないかもしれません、きつとそうでしょう。それはともかくとして、わたしはこのことで義務を果たしました。恐れも、恥ずかしさも、わたしに不当な隠しだてをしようなどと思わせなかつたのです。それでわたしは彼の人となりをおあなたにそのままお話ししますように、あなたのすぐれたところをちゃんと申しました。

わたしたちの収入とその管理についてお話しするのを忘れておりました。ヴォルマールの財産の残りもまた分に、年金だけご自分用にとつておかれた父の財産を加えたものが、あの人のつつましく程よい財産です。彼はそれを上品に、賢明に使つて、自分の家では不快で空しい、華美な贅沢ではなく、豊かさ、生活のほんとうの快適さを維持し、近隣のひどく貧しい人たちのところには必要なものがゆきわたるようになっております。あの人ご自分の

にふさわしいようにしか語ることをできません。

ヴォルマールは五十に近い年です。むらのない規則正しい生活と情念の穏やかさのゆえに健康な体と生氣のある様子を保っていて、見たところやっと四十になるかならぬか、経験と知恵だけが年相応に老けております。容姿は氣品があつて感じがよく、人との応待は飾らずに開放的で、振舞いよりは慇懃というよりは誠実です。言葉数が少なく、深みのあることを申しますが、ことさらに正確さや格言風をつくらっているわけではありません。どの人に対しても同じ態度で、だれを求めだれを避けるということがなく、だれかをとくに好んだとしてもそれは理性によつてそうであるにすぎません。

生まれつき冷靜なのですが、その人の心は父の意図をあと押しするかたちとなり、わたしという人間が自分にふさわしいと思えて、生涯にはじめて愛着をもつたのです。控え目な、しかし長つづきするそんな氣持は、たいそう礼節にかなつておりましたし、またとても一樣につづいてきましたから、あの人は状態が変わつたからといって調子を変える必要はなく、わたしに対して結婚後も夫婦の嚴肅さをそこなうことなく以前と同じ態度なのです。わたしはあの人が陽気なもの、ふさいでいるのも見たことがありません。いつも満足しておいでです。けつして自分のことは語らず、わたしのことを語るのもまれです。わたしを追い求めたりしないのですが、わたしが求めていって不機嫌ではなく、わたしのそばから離れるときは氣がすすまぬようです。笑わない人ですのよ。まじめな人、でもほかの人には、まじめにしなくてはなぞと思わせたりしません。その逆で、彼の穏やかな迎え方は、わたしをほがらかな氣分にさそつているようなのです。あの人はわたしが喜びをおぼえるということだけを喜びとしているふうなので、わたしが心をくばるべきことの一つは、つとめて楽しくすることです。つまり、あの人はわたしが幸福であることを望んでいて、口に出しては申しませんが、わたしにわかるのです。そして妻の幸福を望むということ、すでに幸福を得ているということではありませんまいか。

どれほど注意して觀察しましたが、あの人にはわたしに対する以外のどんな種類の情熱も見つけることができませ

さめ、子供をしつかり育てることを考えているのです。恋人たちは自分たちしか見ず、たえず自分たちのことに没頭していて、二人にできることはただひとつ、愛し合うことだけです。夫と妻にとってはこれでは不足です、ほかに多くの心づかいを必要とします。恋愛ほどわたしたちに強い幻想をいだかせるものはありません。その激しさを人は持続するしるしと取り違えるのです。心はとても甘美な感情であふれるばかりになっていきますから、それをいわば未来に向けて押し拡げます。それで人は愛がつづくかぎりこの感情も終わることがないと信じます。ところが反対に、その感情の熱そのものが愛を焼きつくすのです。愛は若さとともに衰え、美とともに色あせ、年齢の氷におおわれて消えてゆきます。この世が始まって以来、恋人たちが白髪になってたがいに相手を恋いたうさまをだれも眼にしたことはありません。それゆえ、遅かれ早かれ激しく愛し合うことはなくなるものと思わなくてはなりません。そうなるとそれまで仕えていた偶像が破壊されて、おたがいに相手があるがままに見ることになります。驚愕して自分の愛した人を探し求めます。もはや見つからないので、残存するものに恨みをおぼえ、しかも想像力は、その人を美しく飾っていただけに今度はしばしば至めることになるのです。ラ・ロシュフォーコーが言っていますね、もはや愛さなくなるとき、かつて愛し合ったことを恥ずかしく思わない人はほとんどない、と。そうなれば、あまりにも激しい感情につづいて倦怠が来て、感情が衰弱してゆき冷淡というにとどまらず嫌悪にまでいたって、ついにはお互いに相手に堪能してしまつて、恋人として愛しすぎたために夫婦として果ては憎み合うようになつてしまふ、こんな恐れ、どれほどあることでしょうか！ わたしのだいたいな友、あなたはわたしにはいつもいとしい人と見えました、わたしの無垢、わたしの安らぎということからすれば、想いがすぎるくらいに。しかしわたしは、愛してらっしゃるあなたしか見たことがありません。愛することをやめたあなたがどうおなりか、どうしてわかりましょう。愛が消えてもあなたには徳がそのまま残りました、たしかにそう。でも、心が締めなければならぬいなぎずなのなかにあつては、それで十分に幸福になれるでしょうか。それに徳があつても夫としてはどうにも耐えがたいという男の人がどれほどいますことやら。こうしたことすべて、あなたがわたしについても同じように

家のなかにもうけた秩序は彼の魂の奥底に拡がっている秩序の反映でして、それは世界の統治において打ち立てられる秩序を小さな家庭のうちでまねているように見えます。利益を与えるよりも窮屈な感じをもたせ、それを強制する人しか辛抱できないようなあの堅苦しい四角四面なところも、あんまり多くを手にして結局なにも使えないあの間違った無秩序も、ここにはありません。いつでも主人の手の働いていることがわかって、それでいてその手が感じられません。彼は最初にとても巧みに整えましたからいまではすべてがおのずと動いていて、人々は規律と自由を同時に享受しているのです。

あなた、これがヴォルマールとともに暮らすようになりましてからわたしが知りえましたかぎりのあの人の性格、かいつまんで、しかしありのままにお話ししました。あの人は最初の日からそのように見えて、いまのいままでなんの変わりもなく同じように見えます。これから思いますに、わたしはちゃんとあの人を理解したのでして、これ以上もうなにも発見することはないでしょう。あの人の値打ちを下げないでこれ以外の姿を見ることがありうるとは考えられませんから。

これだけのことを申しあげましたから、あなたはご自分の問いにもうお答えになれますわね、わたしを大いに軽蔑してらっしゃるのででもなければ、こんなにたくさん幸福になるべき理由があつて、それでわたしが幸福でないとお考えになるはずがありません。わたしを長いあいだ欺いてきましたこと、おそらくあなたをいまなお欺いておりましょうこと、幸福な結婚をするには恋愛が必要であるという考えがそれです。あなた、それは間違いです。誠実さと、いくらかの似合ったところ、それも身分や年齢よりも性格や気質の似合わしさがあれば、それで夫婦のあいだは十分なのです。それでいてこの結びつきから、とてもやさしい愛情が生まれることに変わりありません。恋愛とはまったく違うものですが、それでもその愛情は甘美で、いっそう長つづきします。恋愛には嫉妬とか欠如感とかのたえざる不安がつきまといっていて、それは享受と平和の状態である結婚には向かないのです。結婚するとき人は自分たち二人だけのことを考えているのではありません。協力して市民生活の義務を果たし、慎重に家をお

てくださり心の底を読みたまう神を証人といたします、わたしが選びますのはあなたではありません、ヴォルマーです。

あなたが完全に回復なさるには、わたしの心に残っておりまこと全部をお話してしまうことが、おそらく肝要かと存じます。ヴォルマーはわたしよりも年をとっておりまこと。もし天がわたしの過ちを罰して、わたしにはもつたない立派な夫を取りあげられるならば、けつして別の人を夫に迎えることはない<sup>と</sup>堅く決意しておりまこと。夫は純潔な娘を見出す幸福はもちませんでした<sup>が</sup>、せめては貞潔な寡婦を残すでしょう。あなたはわたしをよく知っておりまこと、このようにはつきり申しあげて、あとでひるがえす女とはお考えになりますまい。

あなたの疑念を取り除こうとしてこれまでお話してきましたが、わたしが夫に告白しなければならぬと思つていてあなたが反対なされたあのことの解決にも、これが少しは役立つかもしれないと思つてお話をしなすから、悔恨の一念から恥をしのんでそうした振舞に及んでもわたしを罰しはしません。またあなたが話した事になった婦人たちのような策略を使いますことはわたしにはできないこと<sup>です</sup>、彼がわたしをさういふふう<sup>に</sup>疑うこともありません。この告白は必要がないと主張なさるその理由は、それはまぎれもなく詭弁です。まだ夫でない人に対してなんの義務もないとはいへ、それだからといって夫にじつさいの自分ではないものを自分のように見せかけることは許されせんから。このことは結婚いたしますまえから感じておりましたが、父がむりやりにさういふことは口にしないと誓わせましたから、それが妨げになってわたしの義務を果たすことができず、それゆえいさう罪深くなつておりました。なぜなら、不当な誓いをする<sup>ことが</sup>罪<sup>です</sup>し、それを守るのは第二の罪<sup>です</sup>から。しかももうひとつ、わたしの心が自分で自分にさう打ち明けることのできなかつた理由があつて、それゆえわたしの罪はさらに重くなりました。うれしいことにこの理由はもうなくなりました。

わたしがよく考えておかなければならない、より正当でより重大な点は、妻を尊敬することをみずからの幸福としてゐる誠実な人の安息を益なくかき乱すおそれがある<sup>ということ</sup>です。たしかに、わたしたちを結びつける

言うことができるのです。

ヴォルマールについて申しますと、わたしたちはいずれも前もってなんの幻想もいだいておりません。互いにあるがままを見ております。わたしたちを結びつけている感情は、情熱的な心の盲目な熱狂ではなく、残された生涯をとにもすこすように定められて、自分たちの境遇に満足し、ともどもそれを快くしようとつとめる、誠意と、分別をもった二人の人間の、堅固で、変わらぬ愛情です。わたしたちが一つに結ばれるように特別につくられたとしても、これ以上うまくはいかなかったと思われるくらいなのです。彼がもしわたしと同じく情にもろい心をもっておりましたなら、両方の感じる力が強くてときには衝突し、いさかいを招かずにはすみません。わたしが彼と同じくらい平静でしたら、二人のあいだが冷めすぎていて、まじわりの快さ、たのしさが乏しくなりましょう。彼がわたしを愛していなければ、いっしょに暮らしてうまくゆきませんでしょう。あまりにたくさん愛されていたら、わたしにはわずらわしい人になったでしょう。二人ともそれぞれちょうど相手に必要な人間なのです。彼はわたしを啓発し、わたしは彼に活気を与えます。それによって互いにいっそう結びつき自分たちの価値を高めます。二人のあいだにただ一つの魂をつくって、彼が悟性を、わたしが意志を受けもつ、まるでそんなふうに通の利点とないのかのように思えるのです。あの人がいささか年をとっていることまで、すべてがわたしたち共通の利点となります。わたしが苦しんでいましたあの情熱をもってすれば、彼がもっと若ければわたしはなおさらつらい気持で結婚したでしょう。間違いない、間違った嫌悪のあまり、わたしの内に起こりました幸福な変革はおそらく妨げられていたでしょう。

わたしの友、天は父たちの善き意図を照らし、子たちの柔順に報いたまうのです。わたしはあなたの苦しみを軽んじるのではゆめありません、とんでもないこと。わたしの身の上について十分に安心していただく、それだけの気持で、加えてこのことも申しあげておきます。以前あなたにいただいた感情と、現在もっている認識と、その両方ともがあつて、わたしがまだ自由の身で思いどおりに夫を選べるとすれば、わたしに嘘のないこと、わたしを導い

ていただいでわたしどもの喜びますようなこと何かございますときは、ときおりドルブ夫人にお便りくださってかまいません。あなたのお手紙にはお心の誠意がいつもにじみでていることと存じます。それに、いとこは貞淑で思慮のある人ですから、わたしが知ってよいことしか伝えないでしょうし、あなたがこれを濫用なさるようでしたら文通をお断わりするでしょう。

さようなら、いとしいひと。あなたが栄達によって幸福になりうる方とっておりましたら、栄達をお求めなさいと申しあげるところです。しかしそんなものはなくてもよい、ご自分の宝庫をたくさんお持ちのあなたです、軽蔑なさっておそらく当然でしょう。わたしはこう申しあげるほうが、至福をお求めなさい、それが賢者の財産です、と申しあげるほうがよろしいでしょう。わたしたちはいつも徳がなければ至福はないと気づいておりました。しかしこの徳というあまりにも抽象的な言葉が堅実さ以上に華々しきをもつことのないように、自分自身を満足させるよりも他人を幻惑するのに役立つ飾り立てた名にならないように、ご留意なさいませ。心の底で姦通を考えていた者たちがあえて徳を語っていたことを思いますと、ぞっといたします！ わたしたちが罪あるまじわりのなかにおちいつていたとき、これほど尊ぶべき、そしてこれほど冒瀆された言葉がわたしたちにとってなにを意味していたか、あなたはよくおわかりでしょうか。わたしたちがともども身を焼かれておりました狂気の愛が、その熱狂を徳の神聖な感激のもとに包み隠し、それをさらに貴いものと思わせ、長いあいだわたしたちを欺いてきたのでした。わたしはあえて信じます、わたしたちはまことの徳にしたがい、これを大切にすべく生まれついでいるのです。しかしわたしたちは徳を求めつつ誤った道にふみ入り、空しい亡霊のあとばかり追ったのでした。いまこそ幻想の終わるときです。長い長い迷いから覚めるときです。わたしの友、この復帰はあなたにとって難しくはありません。あなたはご自身のうちに導き手をお持ちです。それをないがしろにされたかもしれませんが、拒まれたこととはけつしてありませんでした。あなたの魂は健全で、すべて善なることに執着しておいでです。ときおり逸脱なさるの、それをつかまえようと全力を注がれなかったからです。あなたの良心の奥へお帰りなさいませ、そして

なを断つことは、もうあの人の力の及ばないこと。またわたしが過去においてあの人にも、とふさわしい女であらうと思つても、いまさらわたしにどうしようもありません。それゆえ、わたしが不用意な打ち明けをいたしますと、まったく無益のあの人を苦しめるだけで、わたしが誠実であることによって得るところは、わたしの胸に残酷にのしかかっている致命的な秘密の重荷から逃れるだけ、というおそれがあります。告白してしまえば、心が楽になるでしょう、きつと。でもあの人は平静でなくなるにちがいありません。あの人の安息よりもわたしの安息を優先させるのでは、わたしの非をつぐなうことにはなりません。

それではこんな迷いのなかにあつて、わたしはどうすればよろしいでしょうか。天がわたしの義務をもつと照らし出してくださいるまで、あなたの友情の忠告に従います。沈黙を守り、過ちを夫に語らずにいて、いつの日か許しを得ることのできる、それに値する行動によって過ちを消すようにつとめます。

これほど必要な変革を始めるにあつて、あなた、わたしたちがこれから二人のあいだのいっさいの交渉を断ちますこと、お認めくださいね。ヴォルマールがわたしから告白を受けましたならば、わたしたちが二人を結びつけている親しみの情をどの程度いだいていいものか、またその潔白な証をどの程度与えあってよいものか、彼が決めてくれましょう。しかし、そんなことを相談できませぬ以上は、わたしとしましては、見かけはこのうえなく正しい習慣に従つていてもどれほど迷いにおちいるかということ、わが身にたして痛いほど知らされているのです。いまこそ賢明になるべき時です。自分の心に信頼はできませんでした、わたしはもうわたし自身の訴訟の裁き手になりたくありませんし、娘のときにわたしを滅ぼした自負に、妻となつてまた身を託したくはありません。わたしからお受け取りになるこれが最後の手紙です。あなたもどうぞもうお書きになりませんように。そうは申しませんが、わたしはあなたに対してかぎりなくやさしい気持をもたなくなることにはけつしてありませんから、そしてこの感情はわたしを照らす日の光と同じく清いものですから、おりにふれてあなたの消息を知ることができますれば、またあなたにふさわしい幸福を得ていらっしゃることがわかりましたならば、わたしはうれしゅうございます。知らせ



む。私は金メッキした銀の皿など見ると、体に毒な葡萄酒が出されるものと覚悟する。田舎の別荘で朝のさわやかな空気を吸いながら、美しい庭園の眺めに心ひかれることは何度もあることだろう。早起きして、散歩して、食欲をそそられ、朝食がとりたくなる。ところが食膳係が外出していたり、食料が欠けていたり、奥方が命令を与えていなかったり、いやになるほど待たされたりだ。ときには先まわりして、なんなりと彙勢にさしあげますとくるが、これはなにもけっこうですと言うことという条件づきなのだ。三時まで絶食していなければならなかったり、チャーリッブを朝食にしなければならぬ。私はひどく美しい庭園を散歩したことを思い出すが、なんでもその女主人はコーヒーが大好きなのだ。私なら生垣の刈込みがもっとお粗末でよろしいから、しょっちゅうコーヒーを飲むだろうと思う。

(2) きっと彼女は、のちに彼女をあれほど苦しめる致命的な秘密にまだ気づいていなかったか、あるいはそのとき友に打ち明けたくなかったのだ。

(3) この場合とはかく、いつにせよジュリがラ・ロシュフーコーを読んでいて引用したとあれば、私は大いに驚くであろう。彼のうとうといしい書物は、善良な人たちにはけっして好まれまい。

手紙 二一 エドワード卿へ

そうです、卿、まこと、私の魂は生の重みに押しひしがれております。久しく生は私にとって重荷でした。私は生を貴重にしてくれたものをすべて失いました、残っているのは倦怠のみです。しかし、私に生を与えたもうたお方の命なしには、自分で自分の生命を処置することは許されないことになっております。私はまた私の命が、一再ならぬわけあってあなたに属していることも知っております。あなたのご配慮によって私は二度命を救われ、そしてたえずあなたの恩恵によって命がらえております。私は罪にならずにそれができると確信しないかぎり、かつ私の命をあなたのために役立たせうという希望がわずかでも残っているかぎり、自分で自分の処置はいたしません。

そこにあなたが忘れていらっしやる原則、あなたのすべての行動を秩序づけ、それらを相互に、かつ共通の目的をもって、より堅固に結び合わせるのに役立つならかの原則が見出せないものかどうか探求なさいませ。よございませうか、徳があなたの行為の土台となるだけでは十分ではないのです、あなたはこの土台を揺るぎない基礎の上に打ち立てなければならぬのです。思い出してごらんなさいませ、世界を大きな象の上に乗せ、つぎに象を兎の上に乗せ、そして兎はなんの上に乗るのかと問われたとき、もうどう答えようもなかったあのインド人たちのお話。

お願いいたします、どうかあなたの方の申しましたことにいくばくかの注意をお向けになって、幸福にいたる道として、わたしたちをあれほど長いあいだ迷わせてきました道よりも、もっと確実な道をお選びになってくださいませ。わたしはあなたのために、そしてわたしのために、あの純な至福をいつまでも天に祈願しつづけ、わたしたち二人がともにそれを手に入れないかぎり心みたまされません。ああ！ わたしたちの心が自分に背いて青春の過ちを思い起こすようなことがあれば、その過ちの結果としてわたしたちが復帰したこと、せめてそれで思い出が許されるようにいたしましょう。そしてあの古人にならって、わたしたちが破滅していなかっただけならば、いま破滅しているであろう、とそういえるようにいたしましょう。

説教の君のお説教はこれでおしまいです。これからは彼女は自分自身にたくさんお説教をしなければなりません。お別れです、わたしのいとしいひと、永久に、お別れ。苛酷な義務がそう命じています。でも、信じてほしい、ジュリの心は、だじじだったその人を忘れることはできない……つらいこと！ わたしどうしたことか……この紙のありさま、あなたよくよくおわかりね。ああ！ 友に最後のさよならをいうとき心弱くなつては許されないのでしょうか。

(一) 茶番と吝嗇の結びつきほど普通に見られるものはない。すべて世間体をつくらうためのものは、自然から、真の快樂から、必要そのものから、これらを削り取ってつくられるのである。ある人は調理場を犠牲にして邸宅を飾る。ある人はおいしいご馳走よりも美しい食器の類を好む。またある人はいちど豪華な食事をして、その後の一年間は飢えに苦し

たものであるがゆえに、われわれに属していないと彼らは考えます。しかし、まさしくわれわれに与えられたものであるがゆえに、われわれに属しているのです。神は彼らに二本の腕を与えませんでしたか。それなのに壊疽のおそれがある場合は一本を切断し、必要とあれば二本とも切り落とすのです。靈魂の不滅を信ずる者にとっても事はまったく同じです。なぜなら、かりに私が身体というより貴重なものを維持するために腕を犠牲にするのだとすれば、私は私の充足というより貴重なものを保持するために身体を犠牲にするのですから。天から授かった贈物はすべて本来われわれにとって善いものであるとしても、これら天与のものはあまりにもその性質を変えやすい、そこで天はわれわれがそれらのものを判別する力をもつように、そのうえさらに理性を授けたのです。この理性の規範が、われわれがあるものを選び他を退けることを容認しないとすれば、それを行使することは人間にとってなんの意味があるでしょう。

この大いに堅固ならざる反論を、彼らは種々様々に言い直しています。彼らはこの世に生きる人間を歩哨に立たされた兵士とみなすのです。「神は君をこの世に置きたもうた、どうして神の許可なしに君は世を去るのか」と彼らは言います。しかし、そういう君自身はどうでしょう、神は君を君の都市に置きたもうた、君はどうして神の許可なしに君の都市を去るのか？ 居心地が悪いということのうちに許可はあるのではないか？ 神が私を、肉体のなかであれ、この地上であれ、いかなる場所に置かれようとも、それは私がそこで快いかぎりそこにとどまっています、不快であればただちにそこから去ってよいということなのです。これが自然の声であり、神の声です。命令を待たねばならぬ、それはそうです。しかし、私が自然に死ぬ場合は、神が私に命を捨てよと命じておられるのではなく、私から命をお取り上げになるのです。生きることが耐えがたいと私に思わせる、そうなることによって神に命を捨てよと命じていらっしやるのです。前の場合には私は全力をつくして逆らいます。後の場合ならば私は立派に服従します。

自殺を摂理に対する反逆であるとして、まるでその掟から免れようと欲してるようだと非難する、そんな不当な

あなたにとって私は必要な人間だとおっしゃいました。なぜ嘘を言われるのです？ 私たちがロンドンに來ましてから、あなたのお役に立たせていただくどころか、あなたが私の心配ばかりなさっている。いらずもがなのご配慮をどれほどか！ 郷、ご存じでしょう、私が命よりも罪を憎んでおりますこと、私が永遠の存在を崇めておりますことを。私はあなたにすべてを負っており、私はあなたを愛し、私は地上においてあなたにのみ結ばれております。友情と義務は不幸な者をこの世につなぎとめます。もろもろの口実や詭弁がその者を引きとめることはありません。すまい。私の理性を啓発してください。私の心に語りかけてください。私には耳を傾ける用意ができております。ただし、これはご記憶ください、絶望というものはだますことができません。

あなたは人が理性的に語るのをお望みです。で、理性的に語りましょう。あなたは扱う問題が重要であるほど慎重に議論しなければならぬとお考えです。私もそう思います。穏やかに、平静に、真理を追求しましょう。他人事のように一般命題を論じましょう。ロベックは自殺するまえに自由意志による死の擁護論を書きました。私は彼にならって一本を著わそうとは思いませんし、彼の書物が大いに気に入っているわけでもありません。が、この議論において彼の冷静さには見習おうと思います。

私は長いあいだこの重大な問題について考察してきました。それはあなたもご承知のはず、私の境涯を知っております。そして私はいまなお生存しているのですから。考えれば考えるほど、問題は以下の基本命題に帰着するものと思われます。すなわち、他者に害を及ぼさぬことにおいては、自己の幸福を求め禍を避けることは人間本性の権利である、ということです。それゆえわれわれの生が自分にとって禍であり、ほかのだれにとっても善いものでない場合には、この生から放免されて許されるのです。この世に明白にして確実な格率があるとすれば、これがそうだと考えます。これを覆すようなことをすれば、およそ人間の行為で、罪であると考えられない行為は存在しなくなります。

この点についてわれらがソフィストたちはどう言っておりますでしょうか。まず第一に、生命はわれわれに与えられ

ではこの問題はごく軽く触れられているだけで、話のついでに出てくるようなものです。不正きわまりない裁判によって数時間後に命を失うと宣告されたソクラテスには、自分の生命を自由に処置することが許されるか否かを深く検討する必要はなかったのです。プラトンが語らせている言葉をソクラテスがじっさいに語ったものと仮定しても、本当のところ、卿、ソクラテスはその言葉を実践する立場に立ったならば、彼はもっと注意して自分の言葉を考察したでありましょう。そしてこの不滅の書物から、自分自身の命を自由に処置する権利に反対するまっとうな異論を一つもひきだしえない証拠があつて、それはカトーが世を去るその夜に二度くり返してこれを全部読んだということです。（一七五）

こうした詭弁家たちは、はたして人生は悪たりうるかと問うのです。人生にみちみちているあの無数の誤り、苦悩、悪徳を考へるならば、はたして人生が善いものであつたことがあるかと問いたくありません。罪はもつとも有徳な人にも絶え間なくつきまとい、生きていく刻一刻に、いまにも悪人の餌食になるか、あるいは自分自身が悪人になろうとしているのです。闘うことと苦しむこと、これがこの世における彼の運命です。悪事を行なうことと苦しむこと、これが不誠実な人間の運命です。彼らのあいだには他のすべての点では差がありますが、人生の悲惨ということだけは共通しています。典拠や事実が必要でしたら、神託や、賢者の答えや、死によって報いられた美徳の行為を数々あげることができましょう。が、それはさておきます、卿。私はあなたにお話し申し上げているのです。そしてあなたにお尋ねしたいのです、この世における賢者の主要な仕事はなんでしょう、いわば魂の内奥に自己を集中させること、生きていくあいだじゅう死んでいるよう努めること、それ以外に何かあるでしょうか。人類の数々の悪から免れるために理性が見出した唯一の手段は、地上のものから、われわれの内にある死すべきものすべてから離脱すること、われわれ自身の内部で思念を凝らすこと、崇高な観想へと自己を高めることではないでしょうか。そしてわれわれの情念の過誤がわれわれの不幸をつくるのだとすれば、われわれはこの両者から自分を解放してくれる状態を、どれほどか熱意をこめて追い求めるべきではないでしょうか。享樂によってわが身の苦悩

人々がいるなどということがお考えになれますか。生を断つのは、掟を免れるためではありません。それを実践するためです。なんとということか！ 神は私の肉体に対してしか力をお持ちにならないのでしょうか。神の手中にないものがなにか存在している場所が、世界のどこかにありましようか。純化された私の実体がいつそう一つになり、神の実体に似てくるであろうときに、私に対する神のはたらきかけは直接性を減じるのでしょうか。いいえ、神の正義と神の慈愛が私の希望なのであって、死によって神の権能から免れうるなどと考えていたら、私はもう死を欲しないでありましよう。

『パイドン』の詭弁の一つはそこにあります。もっともこれは崇高な真理にみちた本ですが。ソクラテスはケベスにこう言います。「もし君の奴隷が自殺したら、君はその奴隷を君の財産を不当にも奪ったという理由で罰しないだろうか、まあ死んでから言ってもどうにもならないことだが。」善良なソクラテスよ、あなたはわれわれに向うべきだったのです。「奴隷が君に対してなすべき仕事をしている、ところが君が彼に着せている衣服が窮屈である、そこでもっとよく君に奉仕するために彼がその服をぬぎ捨てたからといって君は罰するだろうか。」大きな誤りは、あまりにも生に重要性を与えすぎていることです。まるでわれわれの存在が生に依存していて、死後はもはや無であるかのように。われわれの生は神の眼から見れば何ものでもありません。理性の眼から見れば何ものでもありません。われわれの眼から見ても何ものでもないはずです。そしてわれわれが肉体を捨て去るときは、われわれは不快な衣服を置いてゆくだけのことなのです。それだけのことに大さわぎする必要がありませんか。卿、あの大仰なもの言いをする連中には誠実さがありません。その論法は不条理で残酷で、彼らは彼らのいうところの自殺という罪を、自分の存在を除去する行為であるかのように重大化し、人がいつまでもこの世に存在するかのように罪を罰するのです。

『パイドン』が彼らに、彼らがこれまでに用いた唯一もっともらしい論拠を提供したのですが、その『パイドン』

す、彼らに言わせると、生の悩みと苦しみを免れることは卑怯であつて、みずからに死を与える者は臆病者ではないのです。おお、ローマ、世界の征服者よ、どれほど多くの臆病者が汝に汝の権勢を与えたことか！ アルリア、エポニナ、ルクレティア（クレティア）もその数のなかに入れようではないか、三人とも女性なのだ。そうだ、ブルートゥスよ、カシウスよ、そしてあなた、驚愕した地上の尊敬を神々とともに分かちもつた、偉大にして崇高なカトーよ、その威厳ある神聖な姿が聖なる熱意でもつてローマ人を鼓舞し、暴君どもを戦慄せしめたあなた、あなたの誇り高い崇拜者たちは、後日卑しい雄弁術教師らが埃っぽい学校の片隅で、あなたが幸せな罪を選んで鉄鎖につながれて生きる美德を重んじなかつたがゆえにあなたを卑怯者にすぎないと証明しようなどは考えもしなかつたのです。近代の著述家の力と偉大さ、それはなんと卓越していることか、彼らはペンを手にすればなんと勇敢なことか！ だが私に言ってもらいたい、勇敢で雄々しい英雄よ、生きる苦痛をいつそう長く耐えしのぶために戦いから敢然として身を引く君は、その雄弁な手の上に燃える火種が落ちてくるようなことがおこれば、どうしてそんなにあわてて手をひっこめるのか。なんとということか！ 火の熱さに耐える勇氣もないほど臆病だとは！ 私には火種の熱さを耐え忍ぶ義務はなにもない、と君は言う。それではこの私は、だれに義務づけられて人生を耐え忍ばなければならぬのか。人間をつくりだすことは、神にとつて業をつくりだすことよりも大変な仕事だったのか、そのいずれもひとしく神の御業ではないか。

たしかに、避けることのできぬ不幸を毅然として耐えるのは勇氣あることです。しかし、悪を及ぼさずに免れうる不幸をみずから欲して耐えしのぶのは、非常識な人間ばかりですし、必要なくして不幸に耐えることは、しばしば大いなる悪なのです。素早い死によつて苦痛な生から解放されるすべを知らない者は、傷を外科医の有効なメスにゆだねないで好んで悪化させておく者に似ています。さあ、尊敬すべきパリゾ（パリゾ）よ、私を死にいたらしめるであらうこの脚を切断してほしい。私は眉ひとつ動かさずにあなたの手術を見るであらう。そしてこの手術に耐える勇氣を欠いて自分の脚が腐つてゆくのを見ている勇者には、勝手に卑怯者呼ばわりさせておこう。

です。

人生により深く没入するほど、それだけ不幸になるの

しかし一般には、人間にとって地上を悲しく這いまわることが幸福である、それはそうでしょう、私は同意します。私は全人類がすべて一致してみずからを犠牲にすべきであるとか、世界を広大な墓場にすべきであるとか主張しているわけではありません。ただし、例外的に特別な天性を与えられていて通常の道をたどりえない人間、その者にとっては絶望とにがい苦惱が生まれながらもっている旅券であるような不幸者がいるのです。そういう者たちにとっては、人生が善いものであると信ずることは狂気の沙汰でありましょう、痛風に悩んだ詭弁家のポセイドニオス(二)にとって、人生を悪であるか否定することがそうであったように。生きることが快いかぎり、われわれは生きることを強く欲するのであって、この欲求に打ち勝ちうるものは極度の不幸の意識のみです。なぜなら、われわれはすべて自然から死に対するきわめて大きな恐怖を受け取っていて、この恐怖が人間の条件のもろもろの悲惨をわれわれの眼から隠しているのです。人は生を放棄する決意をするまでに、長いあいだつらく苦しい人生に耐えま

す。しかし、ひとたび生きることの倦怠が死の恐怖に打ち勝つと、そのとき生は明瞭に大いなる悪となり、どれだけ早ばやと生から解放されようとも早すぎるということはないのです。それゆえ、生が善であることをやめる転換点を厳密に定めることはできませんが、少なくとも生がわれわれにそう見えるときよりもはるか以前から悪になっていることは、きわめて確実にわかります。そしておよそ思慮分別のある人間にあっては、生を放棄する権利は生を放棄する誘惑よりもいつもはるかに先立っているのです。

それだけではありません。彼らは生を除去する権利をわれわれから取り上げるために、生が悪いものでありうることを否定しておきながら、今度はわれわれが生に耐ええないことを非難するために、生は悪であると言うので



ぶことでしよう。人間の本性がそのいずれをも嫌悪する証拠です。それでは命を断って不治の病から解放されることよりも、薬を使って一時の病から解放されることのほうがどうして許されるのか、結石に阿片を用いるよりも熱病にキナ皮を用いるほうが罪が軽いのか、説明してもらいたいものです。目的を考えますならば、そのいずれもがわれわれを不快から解放することであり、手段を考えますならば両者はひとしく自然であり、嫌悪ということを考えますならば、そのいずれの側にもひとしく嫌悪があります。主の意志を考えますならば、人が闘おうと欲する禍で主がわれわれに送らしたもうた禍でないものがありますでしょうか。人が免れたいと欲する苦惱において主の御手から来ていないものがありますでしょうか。主の権能がそこで終わり、それから先は人は逆らっても正しいという、そんな限界がどこにありますでしょうか。それでは、存在するものすべては主が欲したもうたごとくにあるがゆえに、われわれにはいかなるもの状態を変更することも許されないのでしょうか。主の掟に背くことを恐れてわれわれはこの世では何ごともしないようにしていなければならぬのでしょうか。そしてわれわれが何をしようとも、われわれには主の掟に背くなどということが、はたしてできるのでしょうか。いいえ、卿、人間の天職はもっと偉大でもっと高貴です。神は永遠の静寂主義のなかで不動のままとどまっているために命を与えたもうたのではありません。神は人間に善をなすための自由を、善を欲するための良心を、善を選択するための理性を与えられたのです。神は人間を自分自身の行為の唯一の審判者に任命されたのです。人間の心のなかに、「汝に有益にして何人にも害にならぬことをなせ」と書き記されたのです。死が私にとって善いことだと私が感じるならば、生きることに固執することは神に抗っているのです。なぜなら、神は私に死を望ましいものと思わせることによって、死を求めることを命じておられるのですから。

ボムストーンさん、私はあなたの英知とあなたの率直さに訴えます。理性は自殺について、より確実なならぬの故かっ引き出しうるでしょうか。キリスト教徒よこれに反対する諸原則を立てましたが、彼らは彼らの宗

他人に対する義務というものがあって、自分自身を自由に処理することがだれにでも許されているわけではない、それは認めます。しかしその反対に、そうすることを命じている義務もどれほどかあるのではないのでしょうか。祖国の安全をになつてゐる高官や、子供たちを養育せねばならない一家の父や、支払い能力がなくて債権者を破産させるかもしれない債務者は、なにが起きようとも己れの義務に身を捧げねばならず、また、そのほかの無数の市民的な、家庭的な関係は、誠実な恵まれぬ者に、不正になるといつそう大きな不幸を避けるために生きる不幸に耐えるよう強制します。だが、それはその通りだとしても、まったく異なつた場合において、多数の悲惨な人たちを犠牲にして、あえて死ぬ勇気のないその当人にしか益のない生命を維持することは許されるでしょうか。「わが子よ、わしを殺せ」と老いさらばえた未開人が、彼を背負い、その重みに身をかがめてゐる息子に言いました。「敵はそこにいる。おまえの兄弟たちともに行つて戦え。行つておまえの子を救え。おまえの父を生きたまま奴らの、わしがその親たちを食つた奴らの手中に落ちるような目に会わさないでくれ。」かりに、飢え、病氣、貧困という未開人よりもさらにひどい家庭の敵があつて、それでも不幸な不具者はベッドのなかで、家族のパンを、それも自分たちを養うにせいっぱいのパンを消費することが許されるとします。だとしても、何ものにも執着をもたない者、天意によって地上にただ一人生きざるをえなくなった者、その不幸な生存から何ひとつ善を生みださない者は、せめてものこと、嘆けばうるさがられ苦しんで益のない住みかを去る権利くらいはもつていいのじゃないでしょうか。

卿、こうした考察をよくご検討ください。こうした理由をすべてとりまとめてください。そうすれば、これらは道理をわきまえた人間がけつして疑問視したことのない人間本性の諸権利の、もっとも單純なものに帰着するとお考えになります。じつさい、なぜ人は痛風から癒えることは許されて、人生から癒えることは許されないのでしょうか。そのいずれもが同じ御手からわれわれに与えられるのではないのでしょうか。死ぬことは苦しいことだとしても、それがどうだというのでしょうか。薬を服用するのは快いでしょうか。どれほど多くの人が医術よりも死を選

人間に誇りとすることを許したまうのは、この後者の不幸なのです。神は、われわれに課す強制的な貢物を、われわれの自発的な尊崇のしるしとして受納し、現世における忍従を来世の利益となるように記したまうのです。人間が罪を償うべきまことの苦しみは自然によって課されているのです。人が耐えなければならぬことをすべて忍耐づよく耐えるならば、この点では神が求めたまうことをすべて行なったこととなります。だがかりにだれかがそれ以上のことを行なおうとするほどの傲慢を示すならば、それは幽閉すべき狂人であるか、罰を与えるべき狡猾な人間です。ですから避けることのできる不幸はすべてためらわずに避けましょう。それでもまだ苦しむことはあります。ぎるくらいあるでしょう。人生がわれわれにとって禍となるや否や、さばさばと人生から自分を解放しましょう。なぜとって、そうすることはわれわれの自由ですし、それによって神も人も傷つけることにはならないのですから。至上の存在への犠牲が必要ならば、それは死ぬことをおいてほかにありましょうか。神が理性の声を通してわれわれに課したまう死を神に捧げましょう、そして神が返せとのたまうわれわれの魂を、心しずかに神の御胸のうちに注ぎこみましょう。

以上が、良識がすべての人に命じ、宗教がこれを容認している普遍的な教えです。私たちの問題に帰りました。う。あなたは私に心中を開いてくださいました。私はあなたの悩みを存じております。私に劣らずお苦しみです。あなたの不幸は私の不幸と同じく救いようがなく、しかも名譽の掟は運命の定めよりもいっそう強固でありますだけに、ますます救いようがありません。たしかに、あなたは不幸にしっかりと耐えておられます。徳があなたを支えているのです。が、もう一步お進みになれば、徳はあなたを自由にいたします。あなたは私にかならず耐えよとおっしゃる、卿、私はあなたに苦惱を終わらせるようになさいとあえて申しあげます。あなたは私にとって、私もあなたにとってそれぞれ大事な人間、どちらがより強くそう思っているかというご判断はおまかせします。

私たちはつねに踏みださねばならぬ一步を、なぜぐずぐず遅らせているのでしょうか。私たちは待っているのでしょうか、老いと歳月が、生の魅力を奪い去った後でもなおも私たちを卑しく生に執着せしめるのを、また壊れて

その権威にのみ従っているのです。じっさい、聖書全体のなかで、自殺を禁じる掟が、あるいはたんなる非難でもよろしい、いったいどこに見出されるでしょうか。それに、みずからに死を与えた人たちの実例が出てくるところで、こうした例のいづれに対しても咎める言葉すら見つからない、これは大いに奇妙ではありませんか。それだけではなく、サムソンの例は、彼の敵に対して復讐する奇蹟ということで容認されているのです。この奇蹟は罪を正当化するために行なわれたのでしょうか、また女に誘惑されてしまって力を失ったこの男は、正真正銘の大罪を犯すべく力を回復したのでしょうか。まるで神みずからが人間たちを欺こうとなさったかのようにありませんか。

汝殺すなかれ、と十戒に言っています。これからどういう帰結が出てくるでしょうか。この戒律を文字おどりに受けとるべきであるとすれば、悪人も敵も殺してはならないことになります。とすると、あれほど多くの人を死なせたモーゼは自分自身の掟を理解していなかったのです。もしなんらかの例外があるとすれば、まず最初に間違はなく自殺が考えられます。なぜなら、自殺には暴力と不正という、殺人を罪たらしめる二つの理由がありませんから。さらにまた、自然はこの行為に対して、それを容易ならしめない十分な障害を置いたのですから。

彼らはまたこうも言います。神から送られた不幸をじっと耐えしのべ、みずからの苦しみを誇りとせよ、と。キリスト教の格率をこんなふうに通することは、その精神の把え方においてなんと間違っていることでしょうか！人間は無数の不幸におちいりやすく、その人生は悲惨の連続であって、苦しむためのみ生まれてきたかのように見えます。こうした不幸のうちで、人が避けうるものについては、理性はこれを避けよと主張し、また宗教は、理性に反するものではけつしてありませんから、これを容認します。しかし、それにしてもこの種の不幸はそのすべてを合わせても、わが意に反して耐えしのばざるをえない不幸とくらべてどれほど少ないことでしょうか。仁慈な神が

にもとづいてしか他人を判断しないものだ。しかしながら、まったく別な意味で賢明な人間が、後悔もなく、激昂もなく、絶望もなく、ただ人生が重荷であるがゆえに生を捨て、生きてきた時よりもいっそう平静に死んでゆく実例を、われわれはどれほど多く知っていることだろう。

## 手紙 二二 返事

若い人よ、盲目的な興奮が君を迷わせています。もっと傾み深くしたまえ、意見を求めながら人に意見したりしてはいけない。私は君の不幸とは違った不幸を知ったのです。私は確固たる魂をもっています。私はイギリス人だ、死ぬすべを知っている。なぜなら、私は生きるすべを知り、男らしく耐えるすべを知っているから。私は死をまじかに見た、あまりに無関心に死を見ているものだから、わざわざそれを求めに行く気にはなれません。

本当のところ、君は私に必要な人でした。私の魂は君の魂を必要とし、君の配慮は有益だったし、君の理性は私の生涯のもっとも重要な事件において私を啓発してくれたのでした。私がいまそれを利用しないとしても、いったい君はだれにくってかかるのです。君の理性はどこへいったのか。どうなったのか。君に何ができますか。いまのような状態でなんの役に立ちますか。どんな尽力を君から期待できますか。常軌を逸した苦悩が君を恐かにし、無情にしています。君は人間らしさをなくしている。すっかりだめになっている。もし私が君の可能性に注目しなければ、現状の君ではこの世で最低の人間ということになってしまうのだよ。

君の手紙だけで、その認拠として十分。以前は、君には良識があり真実味があった。感情はまっすぐで、考え方も正しかった。私が君を愛したのは、ただ気に入ったというだけではなくて、私にとって知恵を練磨する手段になるとも思えて、それで選択したというところもあるのです。いま、君はご満足らしいあの手紙の理屈のなかに私が

不自由な肉体を、無理して、恥をしのいで、苦痛にみちて引きずるようになるのを。私たちの年ですと、魂に活力があつて、魂はその束縛を容易に振り払うことができ、そして、人間はまだ死ぬすべを知っています。もっとあとになれば、人はうめきながら、命をもぎ取られるがままになるのです。生きることの倦怠が私たちに死を望ましく思わせる時を利用しようではありませんか。もはや死を望まなくなつたときに、死が死への恐怖をともなつてくることを恐れましょう。思い出すのですが、私はただ一時間だけの時を天に乞い求め、それが得られなければ絶望して死んでいたのであろう、そんな瞬間がありました。ああ、私たちの心を地上に結びつけているきずなを断つことはなんと苦しいことでしょうか、そしてそのきずなが断たれるや直ちに地上を去ることはなんと賢明なことでしょうか！ 卿、私はそう感じるのですが、私たちは二人ともっと清浄な住まいにふさわしい人間なのです。徳は私たちにその住まいを示し、運命はそれを求めるように招いています。私たちを結ぶ友情が最後の時まで私たちを結び合せてくれますように。二人の眞の友にとつて、互いに腕を組んでみずから欲して自分たちの命を終えること、最後の吐息を一つに合わせることに、魂を分かち合いながら同時に息絶えること、おお、なんとという悦楽でしょう！ 二人の最後の瞬間を毒するなんの苦惱が、なんの後悔がありましたでしょうか。この世を去るとき何を手離すのでしょうか。いっしょに立ち去るのです。手離すものなど何もないのです。

(1) リヨンの外科医。名譽を重んずる人、善き市民である。心のやさしい、寛大な友であり、かつて彼の恩恵に浴した者は、無沙汰はしていても、彼のことを忘れてはいない。

(2) こんな議論を扱うにしては奇妙な手紙だ！ このような問題を自分のこととして検討する場合、これほど平浄に推論するものだろうか。この手紙は本物でなくつくりごとなのか、それとも筆者はただ反駁してほしだけなのか。それも言い切れまい。彼はロベックの例をもちだして、それで自分の場合も許されると考えているように見えるからである。ロベックは大そう落ち着いて論議し、一冊の本を、ずいぶん長く、重々しく、冷静な大部の書をもつて我慢つよかつたのだ。そして自分の考えによれば自殺は許されるということを証明し終えるや、同じように平然として自殺したのであつた。時代や國民の偏見にとらわれないよう警戒しよう。自殺が流行してはいないときには、自殺する者はいきり立った者としかみなされない。どれほど勇氣ある行為も弱い魂からみればすべて夢物語である。人はだれも自分

時間は休むがいい、そうしていいのです。だが君のした仕事を見てみよう。至高の審判者から君の時間をどう使ったか説明せよと言われたとき、君はどんな答えを用意していますか。さあ、君はなんと答えますか。「私は清純な娘を誘惑しました。私は一人の友を悲嘆のうちに打ち棄てています。」困った人だ！ 自分は十分に生きたと自負するような義人を私に見つけてくれたまえ。人生を去る権利をもつためにはどれほど人生を担う必要があったのか、私はその人から教えてもらいたいから。

君は人類の禍を救えあげる。何度も言い古されたきまり文句を恥ずかしげもなく全部ひっぱりだして、そして、人生は悪です、というのだ。だが見たまえ、探したまえ、万物の秩序のなかで悪がすこしも混じらない善がなにか見つかるかどうか。とすると、これは世界のなかにはいかなる善もないということになるのだろうか。また君は、その本性からして悪であるものと、ただ偶然に悪を許容しているにすぎないものとを混同してよいのだろうか。君自身も語っているように、人間の受動的な生はなんの価値ももたず、やがてそれから解放されるはずの肉体にのみかかわっています。だが、人間の全存在に影響を与えるべき能動的な、精神的な生は、意志の行使のうちにあるのです。栄える悪人にとっては、人生は悪であり、誠実にして恵まれぬ人にとっては、善である。なぜなら、人生を善いもの、あるいは悪いものとするのは、一時的な存在形態ではなく、人生の目的との関係なのですから。君に生を離れるように強いている、それほどつらい苦悩とは、つまるところ何なのだろう。君が公正無私を装ってこの世の生の不幸を列挙している、その底には君自身の不幸を語ることの恥ずかしさがあると私が見抜かなかったとも思うのですか。よろしいか、君の徳を一時に全部捨ててはなりません。せめて以前の率直さは保っておいて、君の友に正直にこう言いなさい。私は貞淑な女性を墮落させる望みを失った、いまや私は行ない正しい人間にならざるをえなくなった、死んだほうがいいのだ、とね。

君は生きることがうとましくなっていて、人生は悪である、と言う。遅かれ早かれ、君は慰められるだろう、そして、人生は善である、と言うようになるだろう。理論の立て方がより正しくなるわけではないが、より真実を語る

見出すのはなにか。哀れな、果てしない詭弁です。君の理性がこんなに逆上しているのを見れば、君の心の逆上もはっきりしている、もし私が君の錯乱に憐れみをおぼえなければ、わざわざ取りあげる気にもならない詭弁です。

あれをすべて一言で覆すために、君にただ一つの事だけ問うておきましょう。君は神の存在と、靈魂の不滅と、人間の自由を信じている、その君が、知的な存在がたんに生き、苦しみ、死ぬためにのみ肉体を付与され、でたために地上に置かれていたとは、おそらく考えていないでしょうね。人間の生には、目標が、めざすところが、精神的な目的がきつとあるのではないか？ この点について明確に答えていただきたい。その後でわれわれはおもむろに君の手紙を取りあげることにしましょう。そうすれば君はあれを書いたことが恥ずかしくなるでしょう。

しかし、あのもろもろの一般的格率なるものはほうっておきましょう。人はしばしばそれで大さわぎしながら、そのどれ一つにも従わないのです。なぜそうなるかというに、適用する場合になにか個別の条件があるのが普通であって、それが事態を大きく変えますから、それぞれ人は他人には規則を課しておきながら、自分はこれに従わなくともよいと思っている、それにまた、周知のとおり、一般的格率を立てる人間はみな、それは全員を拘束するが自分だけは別だと、そんなふうを考えているのです。そこでもう一度、君の問題を語りましょう。

君の説では、生を断つても許されるというのですね。その証拠というのが変わっている。君は死にたいからそういうことを言うのですよ。たしかに悪党どもにはたいそう都合のいい論拠だ。彼らは君に武器を提供してもらって大いに感謝すべきです。どんな大罪を犯しても、彼らはやりたくなかったからやったという理由で正当化するだろう。そして情念の激しさが罪の恐怖に勝ちをしめるや否や、悪事をはたらく欲望のうちにそれを行なう権利をも見出すだろう。

君は生を断つても許されるというのですね。ひとつ知りたいものです、そもそも君は生を開始したのかどうか。え、なんだって！ 君はこの地上に、何もしないために置かれたのですか。天は君に、生命を与えたとともに、果たすべき一つの務めを課したのではないのですか。夕べがくるまでに君の一日の仕事を終えたのであれば、残った



のです。彼は死ぬ以前にすでに人間であることをやめていたのであって、みずから生命を断つことによって、彼の邪魔をしている肉体、彼の魂がもはやそこにはない肉体から完全に離れるということだけのことです。

だが、魂の苦悩については、事は同じではありません。この苦悩はいかに激しかろうと、つねに治療の方策をたずさえている。じっさい、どんな病気にせよそれを耐えがたくするものは何かといえば、それは長くつづくことです。外科手術は一般にそれが治療する病気の苦痛よりも苦しい。しかし病気の苦痛は永続的であり、手術の苦痛は一時的であるから、それで人は後者を選ぶのです。それでは、長くつづくことのみが苦痛を耐えがたくするとしても、その持続そのものが消滅させてゆく苦痛に対して、なにゆえに手術が必要なのだろうか。おのずから消えてゆく苦しみにそのような激烈な治療をほどこすことは、理にかなっているだろうか。忍耐力を重んじ、癒えるまでの年月にはそれ相当のわずかな価値しか認めない者にとって、苦悩から自分を解放する二つの手段のうち、死か、時か、そのいずれを選ぶべきだろうか。待つということをなさい、そうすれば君は癒されるでしょう。それ以上まだ何か求めることがありますか。

「ああ！ 自分の苦しみが終わるであろうということを考えると、苦しみは倍加する！」そう言いたのでしよう。苦悩が言わせる空しい詭弁です！ 気のきいたせりふだが、道理もなく、的確でもなく、おそらくは誠実さにも欠けます。自分の悲惨を終わらせる希望、それが絶望の原因になるとは、なんと不条理なことか。たとえこの奇妙な感情を認めるとしても、ちょうど傷口を癒済させるために乱切りするように、苦悩がやがて終わるのを確信して、現在の苦悩をいつとき激化させるほうがよいと思わない者があるだろうか。また、苦悩にはわれわれに苦しむことを好ませる魅力があるのだとしても、命を断つことによって苦悩をなくするということは、未来においてまさに恐れていることを直ちに行なうことではないだろうか。

よくお考えなさい、若い人よ。不滅の存在からすれば十年、二十年、三十年がなんでしょう。苦痛も快樂も影のように過ぎてゆきます。人生は一瞬のうちに流れ去ります。人生はそれ自体では価値がないのであって、人生の価

なるだろう。君が変わるだけで、ほかの何も変化していかないだろうから。だからさっそく今日から変わりたいまえ。いっさいの悪は君の魂の悪い傾向のなかにこそあるのだから、調子の狂った君のもろもろの感情を矯正しなさい。家を整える手間がかからないように、焼き払ったりはしないことです。

君はこう言っていますね、「私は苦しんでいる、苦しまないようにすることは私の力でできるだろうか。」まず問題の立て方を変えることです。君が苦しんでいるかどうかではなく、生きることが君にとって悪いことかどうか、それを知るのが問題なのだから。先へ進みましょう。君は苦しんでいる、苦しまないようになるために努力しなければならぬ。そこで、そのためには死ぬことが必要か否かを考えましょう。

魂と肉体という二つの実体はその本性から相対立するものであるから、肉体の苦痛の進行とはまさに相反する魂の苦痛の進行について、しばし考察してごらんください。前者の苦痛は慢性化し、老いるにつれて悪化し、ついにはこの死すべき機械を破壊します。これに反して、魂の苦痛は、不滅にして単一な存在の外的な、一時的な変質であって、知らず知らずのうちに消えてゆき、そのあとにはこの存在が、何をもってしても変えることのできない原始的な形態において残るのです。悲哀、倦怠、悔恨、これらは魂のなかに根をもっていない、持続しない苦悩です。われわれにみずからの苦痛が永久につづくと思わせるのは、悲痛な感情がそう思わせるのですが、体験はつねにこの感情を否認しています。さらに言いましょ。私にはわれわれを墮落させる悪徳が、われわれの悲痛よりもいっそう内在的だとは信じられないのです。悪徳はそれを生ぜしめる肉体とともに滅びると考えるだけではなく、もっと長い生命が与えられれば十分に人間を矯正することができること、数世紀にわたる青春期があればわれわれに徳よりもよいものは何もないと教えるであろうことを私は疑わないのです。

それはさておいて、われわれの肉体的な苦痛は、その大部分はたえず増大するばかりですから、肉体の苦痛が激しく、それが不治である場合には、人は自分を自由に処分してもよいのです。なぜなら、彼のあらゆる能力は苦痛のために失われていて、しかも病気に治療法がないのですから、彼はもはやみずからの意志と理性を行使できない

君は高官や一家の父の義務を語って、君にはそういう義務が課されていないから、すべてから自由であると思っ  
ています。それでは、君がみずからの生存、才能、知識をそこから得ている社会、君が属している祖国、君を必要  
としている不幸な人たち、君はこれらのものになんの義務もないのですか。まったく念入りに並べ立てたものだ！  
君が教えあげている義務のなかで、忘れられているのは人間の義務と市民の義務だけです。祖国のためにしか血は  
流してはならないと行って、外国の君主に血を売ることを拒絶するあの有徳な愛国者はどこへ行ったのか。その人  
はいま、法律の明白な禁を犯して、自暴自棄になって血を流そうというのだ。法を、法を、若い人よ、賢者は法を  
無視しますか。無実のソクラテスは、法を重んじたために、牢獄から出ようとしなかったのです。君は不正にも人  
生から脱出するために法を犯すことをためらわない、しかも、何が悪いかと問うのです。君は不正にも人

君はいくつもの例を盾にとろうとする。君は厚顔にもローマ人たちの名を挙げています！ 君が、ローマ人を！  
あの華々しい名をあえて口にする、まったく君におあつらえむきだ。さあ、ブルートゥスは恋に破れて死んだので  
すか、カトーは愛する女のために臍腸を引き裂いたのですか。卑小な弱い男よ、カトーと君のあいだになんのかか  
わりがあるのです。あの崇高な魂と君の魂とに共通する尺度があるのなら、見せてもらいたいものです。無謀な人  
だ、言葉を慎みたまえ。私なら彼の弁護をしてもその名を冒瀆することにならないかと恐れるくらいだ。この神聖  
にして厳かな名のまえでは、およそ徳を受する者ならば、床に額を押しつけて、黙々としてこの最大の偉人の思い  
出に敬意を表すべきです。

君のあげた例はなんと選択のまずいことか、またローマ人たちは人生が重荷になるや否や命を断つ権利があると  
思っていたと、そう君が考えるのなら、君はなんとローマ人を低劣に判断していることだろう。共和国の最盛期  
に眼を向けてごらんさい、そして、いやしくも有徳の市民にして、このうえなく残酷な不運に見舞われたあとで  
さえ、そのようにして自分の義務から逃れようとする者が一人でも見つかるかどうか探してごらんさい。カルタ  
ゴに戻ってゆくレグルスは、死によって、彼を待ちうけている責苦を避けましたか。カウディナの隘路で、ホス

値はこれをどう用いたかにかかっています。人が行なった善のみが残るのであって、その善によって人生はなんらかの意味をもつのです。

だからもう自分にとって生きることは悪だなどと言わないことです。君の気持ちひとつでそれは善になるのだから。これまでの人生が悪だとすれば、それはなお生きつづけるための理由を加えることになるのだから。死ぬことが自分には許される、などと言うこともありません。それは人間でなくなることが許される、君の存在の創造主に反抗しても、君の使命を裏切っても許される、というも同然のことだから。しかも、死んでもだれに害も及ぼさないなどと言って、君はそれをあえて友人に向かって語っているのだということに気づいているのですか。

死んでもだれにも害を及ぼさない？ わかりました！ 死んでわれわれに悲痛な思いをさせても、君にはほとんどどうでもいいことなのだ。われわれの哀惜もものの数に入らないのだ。私はもう友情の権利については語らない。君が無視しているのだから。それにしても、君に自分を大事にするように命じている、より貴重な権利があるのではありませんか。君が死んだらもう生きていようとは思わないほど君を愛した人、君が幸福にならないかぎり幸福をまっとうできない人がこの地上にいるというのに、君はその人になんの義務も負うていないのですか。君のいまわしい企てが実行されたら、あれほどの苦しみを負って最初の無垢へたどりついた人の魂の平和をかき乱さないでしょうか。君は怖れないのですか、あのあまりにもやさしい心の、まだ十分にふさがっていない傷口をふたたび開くことを。君は怖れないのですか、君の死がさらにいっそう残酷な別の死を招き、地上から、美德から、そのもつとも立派な飾りを奪いとることにしはしまいかと。また君の死んだあと彼女が生きていたならば、君は怖れないのですか、生よりもさらに耐えがたい、重い悔恨を胸中にかきたることにしはしまいかと。君は怖れないやりのない恋人よ、君はいつまでたっても自分のことだけでいっばいなのだろうか。自分の苦しみだけしかけっして考えないのだろうか。君にとって大切だった人の幸福には無感覚なのか。君といっしょに死んでもよいと思つた人の幸福のために、生きることはできないのか。

存在しているというそれだけのことで、人類に有用であるということ、君は知らないのですか。

いいですか、無分別な若者よ、君は私にとって大事な人です。私は君の迷妄に憐れみをおぼえます。君の心の底にわずかでも徳の感情が残っているならば、やって来なさい、私は人生を愛することを君に教えてあげたいのだ。生を棄てようという誘惑にかられるたびごとに、心のなかでこう言うのです。「死ぬまえにもう一つ善い行ないがしたいものだ。」そうして、だれかが救わねばならない貧者を、慰めねばならない不幸な人を、守らねばならない虐げられた人を探しに行きたまえ。気後れして私に近寄れない不幸な人たちを私に引き合わせてくれたまえ。私の財布と私の権勢をためらわずにどしどし使ってください。私の財産を手にして、使い果たしてください。私を豊かな人間にしてくれたまえ。こんな配慮が今日もし君を引きとめるならば、明日もまた、明後日も、一生涯ずっと君を引きとめるでしょう。もし君を引きとめないならば、死ぬがいい、君は邪な人間にすぎません。

(1) 朝よ、それは違います。そのようにすれば、人は自分の惨めさを終結させるのではなく、悲惨の極に達して、われわれを幸福に結びつけている最後のきずなを断つことになるのです。自分にとって大事だった人を哀惜することによって、人はまだ己れの苦悩そのものによって苦悩の対象につながっている。そしてこの状態は、もはや何ものにもつながっていないよりは、まだしも怖ろしくないのです。

(2) 友情の権利よりもさらに貴重な権利とは？ しかも、賢者がそれを語っている！ しかしこの自称賢者は、その人自身がお恋をしていたのだ。

手紙 二三 エドワード卿より

親愛な友よ、今日あなたを抱擁できると思っていましたでしたが期待どおりにいかないようです。まだ二日間ケンシン  
トンに引きとめられています。宮廷での事の運びは、大いに働きながら何もしていない、あらゆる仕事次々とお

してのちなお生きつづけたために、元老院さえもその勇気ある努力をたたえなかったでしょう。恥辱を受けることは、いかなる理由によるのでしょうか。それは彼らが自分の血を、命を、最後の息を祖国に捧げなければならなかったから、恥も敗北もこの神聖な義務から彼らを引き離すことができなかったからです。しかしながら、法が消滅させられた時、国家が暴君らの支配下に置かれた時、市民たちは彼らの自然的な自由と自分自身に対する権利とを取り戻しました。ローマがもはや存在しなくなった時、ローマ人たちにとって生存を断つことが許されたのでした。ローマ人たちは地上における彼らの役目を果たし終えたのです。彼らにはもはや祖国がなかった。彼らは自分を自由に処理する権利をもち、もはや自分の国に自由を回復させることができなかったので、自分自身に自由を取り戻す権利をもちました。瀕死のローマに奉仕するために、法を守って戦うために、自分の生命を使ったあとで、彼らはその生きざまと同じく有徳に、偉大に死んでゆきました。そして彼らの死もまた、ローマ人という名の栄光に捧げられる貢物でした。それは、真の市民が篡奪者に仕えるという恥ずべき光景が、彼らのうちのだれ一人にも見られないようにするためだったのです。

ところで君は、君は何者か。君は何をしましたか。世に知られていないことをもって言い訳にするのですか。君の弱さのゆえに義務を免れるのですか。祖国のなかで名も地位もたないからといって、それゆえ祖国の法に服すること、より少ないのですか。君は君の命を同胞のために使わなければならないのに、死ぬことを口走るとはまさに君にお似合いだ！ 君の企てているような死は、恥ずべきであり、泥棒でもするみたいにくそくそしたものだということを知りなさい。それは人類に対してなされる窃盗です。人類から別れるまえに、人類が君のためになさるべきこと、より少ないのですか。君は君の命を同胞のために使わなければならないのに、死ぬことを口走るとはまさに君にお似合いだ！ 君は地上において何か果たすべき義務を見出さずには一歩も歩けないこと、およそ人間は、ただ

す。あなたは人の眼を驚かす、もつとも壮大な光景を見るでしょう。観察することの好きなあなたは十分に満足す

るものを見出すでしょう。あなたの職務は名誉あるものです。才能をおもちだから、ほかに要求されるのは勇氣と健康だけです。拘束よりもむしろ危険の多い職務だと思われるでしょうが、それゆえかえってあなたに適しておりましょう。契約はそうそう長い期間にはわたらないはずで、今日はこれ以上のことは言えません。というのは、この計画はまさに実現寸前にあるのですが、まだ秘密であって私の一存ではお話しできないのです。ただ、これだけつけ加えておきますと、こんな幸運で稀なる機会は、いま見逃せばおそらく二度とふたたび見つけることはできないでしょうし、あなたはことによると生涯悔むことになるかもしれません。

私はこの手紙をおとどけする使いの者に、どこにおられようとともかくあなたを探しだし、お返事を頂くまでは戻ってはならぬと命じてあります。あなたのお返事は急を要し、かつ私もここを發つまえにお返事しなければなりませんから。

手紙 二四 返事

そのとおりになさってください、卿。お考えどおりに私を動かしてください。なんであつても否とは申しません。お役に立つ資格がもてるまでは、せめてあなたに服従したく思います。

手紙 二五 エドワード卿より

私の思いついた考えに同意されましたので、一刻も早くすべての了解がついたことをお知らせし、事業の内容を

しよせてきながら何も結着がつかない、という有様です。一週間来ここに私を引きとめている件などは、二時間もあれば十分ことたりるのです。だが、大臣連の最大の関心事は、忙殺されているという様子をいつもしていることです。私から、私をご用済みにするためよりも多くの時間を引きのばすために使って、むだをしているのです。私の短気は、いささか目立ちすぎるくらいですが、それをもってしてもこの遅延を短縮できません。ご承知のとおり宮廷は私にはあまり向いていない。しかもあなたといっしょに暮らしてからはなおさら耐えがたく、この国にうようよしている従僕どもを相手にとどもも退屈しているよりは、あなたの憂鬱を分かち合っているほうが百倍も好ましいのです。

とはいうものの、こうした熱心な怠け者たちと話をしている、あなたに關係のある一つの着想がうかんだのです。あなたを私の意志どおりに動かしてよいか、あなたの承諾を待つのみです。私の見るところ、あなたは苦惱と戦いながら、あなたの現実の不幸に苦しみ、同時にその苦痛に抵抗することに苦しんでいるのです。あなたが生きかつ極えることを欲するのは、名誉と理性の要請というよりも、友人たちの意に叶うためなのです。親しい友よ、それだけではいけない。人生の義務を果たすためには、生への意欲を取り戻さなければなりません。それに、万事にそれほど無関心では、何をしてもうまくゆきません。われわれが共同してやってもだめでしょう。理性だけの力ではあなたの理性を回復させることはできないでしょう。新しい強烈な対象が数多く現われて、あなたの心を占領していることのみに向けられている注意力を、一部分でも奪い取る必要があります。あなたが自分自身に立ち帰るためには、あなたの内部から外に出る必要があります。あなたがふたたび休息を見出すのは、活動的な生活の揺れ動くなかでしかありません。

この試練を行なうための、無視できない機会が到来しています。それは偉大な、すばらしい事業で、いつの時代にも見られるようなものではありません。あなたの意志ひとつで、この事業に立ち会い、参加することができません。あなたは人の眼を驚かす、もっとも壮大な光景を見るでしょう。観察することの好きなあなたは十分に満足す



を あちらの半球に求めに行きます。なんとという愚か者でしょう！ 私は心を休める場所も見つからないのに世界

中をさまようのです。あなたから遠く離れるであろう土地に隠れ家を求めに行くのです！ しかし、友であり、恩人であり、父である人の意志は尊重しなければなりません。癒える望みはなくとも、せめては癒える意欲をもたねばなりません、ジュリさんと徳がそう命じているからには。三日後には、私は波のまにまにただよっています。三日後には、もうヨーロッパが見えないでしょう。三月後には、たえまない嵐が吹きすさぶ見知らぬ海におりましよう。三年後には、おそらく……もうあなたにお会いすることがないとすれば、それはどれほど怖ろしいことか！ ああ！ 最大の危険は私の心のなかにあります。というのも、私の運命がどうあろうとも、私は決意したのですから。私は誓います、あなたのまえに現われてしかるべき人間になったとき、またお会いしましょう。さもなければ、二度とお会いしますまい。

エドワード卿がまたローマに行かれますので、その途上でこの手紙をお渡しして、私に関する事の詳細をお話しになるはずです。あなたはあの人の心を知ってらっしゃるから、あの人が話さないことも容易に推察なさるでしょう。あなたは私を知っていらした。私が自分から申しあげないことも察してください。ああ、卿よ！ あなたはその眼であの人たちにまたお会いするのですね！

あなたの友は、あなたと同じように、幸福にもお母さまにおなりなのです。やはり、そう、それで当然なんです。ね……冷酷な天よ！……お、わが母よ、どうして天は怒りの日にあなたに息子を授けたのか……

もう終えなければなりません、そう思います。さようなら、愛らしいお二人のいとこの君。さようなら、たぐいなく美しい女性よ。さようなら、純粋な天上の魂よ。さようなら、やさしい、おそば離れぬお友だち、地上にまたとない女性よ。あなた方は、そのおひとりごうひとりにとって唯一ふさわしい方たち。あなた方の幸福を手をとりあっておつくりになりますように。自分の魂のすべての感情をあなた方にお分かちするためにのみ存在した、あなた方から遠ざかったときには生きることをやめた恵まれぬ者の記憶を、ときには、呼び起こしてくださいませう。もし万一……出航の合図が、水夫たちの叫び声が聞こえます。風が立ち、帆がひろがるのが見えます。乗船

ご説明したく思います。あなたのことを請け合いましたので、話してもよいという許可を得ましたから。

ご承知でしょうが、プリマスで戦艦五隻の艦隊の艀装が終了し、出帆の準備がととのっています。指揮をとるのはジョージ・アンソン氏、熟達した勇敢な士官で、私の旧友です。目的地は南の海で、往きはル・メール海峡を経て、帰りは東インドを経由することになっています。したがって、これはまさしく世界一周にほかなりません。約三年を要すると考えられている遠征です。あなたを乗組志願者として登録することもできたのですが、乗組員のかで重んじられるようにと思って、一つ資格を加えてもらいましたから、上陸部隊の技師として名簿に記入されます。工学はあなたの最初の志望ですし、子供のころから学んでこられたことを私も知っておりますから、このことはあなたにはいっそう好都合でしょう。

私は明日ロンドンに帰り、二日後にあなたをアンソン氏に紹介するつもりです。それまでに旅装をととのえ、道具や書物を用意するよう心がけておいてください。乗船の準備はできていて、いまや出発命令を待つばかりなのです。親愛な友よ、神の加護によってあなたが身心ともに健康になってこの長旅から戻られるように、そしてあなたが帰られてわれわれが再会してからはもう二度と別れることのないように、希望しています。

(1) このことが私にはよくわからない。ケンシントンはロンドンからわずか四分の一里のところだから、宮廷に出る貴族たちはそこで泊まらない。ところがエドワード卿は何か理由があって数日そこでささねばならなかったのだ。

手紙 二六 ドルブ夫人へ

なつかしい、愛らしい、いとこの君。私は地球を一周すべく出発します。こちらの半球では恵まれなかった平安を、あちらの半球に求めに行きます。なんとという愚か者でしょう！ 私は心を休める場所も見つからないのに世界

## 訳注

### 扉

(一) イタリア語による引用。ペトラルカのソネ CCCXXXVIII 一二—三行。ペトラルカが死んだラウラの徳をしのでつくったソネである。

### 第一部

(一) 原文はイタリア語。「新エロイーズ」には、たびたびイタリア詩がすべて原語で引用されている。訳者はイタリア語の原文を挿入したほうがよいか逡巡したが、全集の方針にしたがって割愛した。だが、こうしたイタリア詩の引用は、ルソーのなみなみならぬイタリアへの愛情と、「新エロイーズ」の一つの性格を示しており、また、フランス語の詩句を引用する場合はおのずから異なる役割をにない、独得の効果をあげている。訳者には、その間の機微を察知してくださるようお願いしたい。こうした事情を勘案して訳者は原著には記されていない作者名を（ ）内に付記しておいた。ルソーはこれらの詩句のほとんどすべてにフランス語のかなり自由な散文訳をつけて、一七六四年のデュシェヌ版に書きつけている。ルソーが訳し残した若干の詩句は、のちにミュッセ「バテ版」で訳されている。訳者はこれらのフランス語訳を参照しながら、原詩の体裁に近い形で、また北川忠紀氏に教示をうけてイタリア語の原義になるべく背かかのように訳しておいた。プレイアード版およびガルニエ版の注を参照して、出典を明示しえたのも同氏の尽力によることを感謝とともに記す。なお、ここで引用されている詩句をルソーはメタスタシオとしているが、ペトラルカのバラッドⅫ（ハ—〇行）である。ラウラがペトラルカの彼女に対する愛に気づいて以来、まえよりもきびしくなったことを嘆いている。

(二) メタスタシオの劇「永遠の神殿」。

(三) モンテーニュ「エッセー」第三卷一二章。

しなければなりません、出発しなければならぬ。広大な海よ、無限の海よ、おまえの懐に私をのみこむかもしれぬ海よ。おまえの波の上で、この騒ぎ立つ心から逃げてゆく平安にめぐりあえることを！